

市内遺跡調査概報VIII

— 平成 9 年度 麻生谷新生園遺跡の調査他 —



1998年3月

高岡市教育委員会

※表紙・大原カット；東木津遺跡出土青銅鏡

序

高岡市域における遺跡については、丘陵・台地部において、縄文集落跡、古墳群、城郭跡、都市遺跡等が多く見られると共に、平野部においても、主に初期農耕文化以降の集落遺跡等が多く分布しています。最近では、丘陵部における横穴墓の新たな確認や平野部での縄文遺跡の確認・再確認が続いています。そしてこれらの遺跡が個性ある歴史的風土や環境を形成する一部となっております。

今回ここに報告しますのは、個人住宅等の開発行為に対して実施した3箇所の遺跡、麻生谷新生園遺跡、東木津遺跡、石塚遺跡の発掘調査の内容と、その他の遺跡で実施した試掘調査の結果です。

麻生谷新生園遺跡は、古代北陸道の川入駅推定地付近に立地していますが、この度の調査により、古代北陸道の一部と推定される石敷きの道路址が検出されました。

東木津遺跡は、以前より奈良・平安時代を中心とする遺跡として知られてきました。この時代の遺構・遺物の検出・出土と共に、古墳時代後期のものと推定される青銅鏡が出土しました。

石塚遺跡は、高岡市街地の南西郊外に立地し、和田川を挟んで、東側には、東木津遺跡や下佐野遺跡が立地しています。今回の調査地区は、この遺跡の北西側での調査を実施しました。

最後になりましたが、今回の調査実施にご協力頂きました、関係各位、地元の皆様に厚く御礼申しあげます。

平成10年3月

高岡市教育委員会
教育長 細呂木 六良

例 言

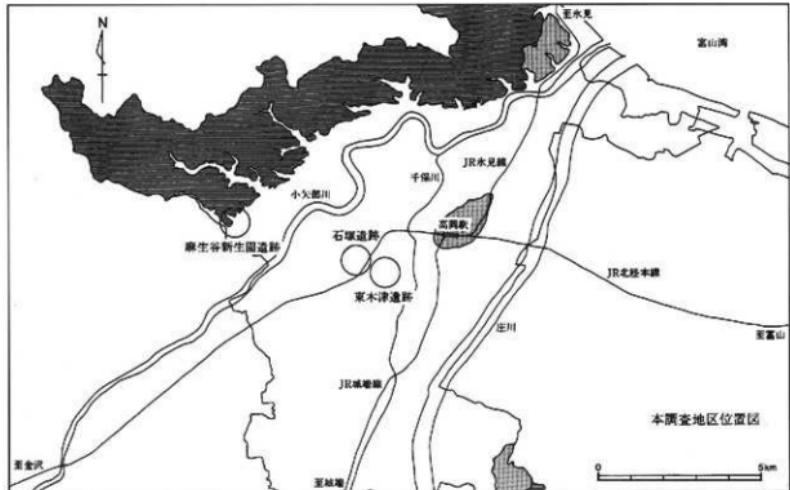
1. 本書は、開発工事に伴い実施した本調査、及び試掘調査の概要報告書である。
2. 当調査は、平成9年度国庫補助金の交付を受け、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本調査地区は以下の3箇所である。
 - (1) 麻生谷新生園遺跡、村田地区
高岡市麻生谷414-4
 - (2) 東木津遺跡、丹羽地区
高岡市東木津1068
 - (3) 石塚遺跡、白石地区
高岡市上北島286-3
4. 試掘調査地区は7遺跡10箇所である。
5. 調査関係者は次のとおりである。

文化財課長：田村晴彦
[埋蔵文化財係]
主幹兼係長：石浦正雄
係員：山口辰一、根津明義
荒井 隆、太田浩司
6. 本書における遺構記号は次のとおりである。

S D - 溝、S E - 井戸址、S F - 道路址
S K - 土坑、S X - その他の遺構
7. 本書における遺物番号は次のとおりである。

1101番～麻生谷新生園遺跡、村田地区出土遺物
2101番～東木津遺跡、丹羽地区出土遺物
3101番～石塚遺跡、白石地区出土遺物
8. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示・御援助を得た。(順不同、敬称略)

木下良、京田良志、藏持大輔、小島俊彰
斎藤隆、坂原二郎、西井龍儀、橋本正春
林寺殿潤、宮田進一
9. 麻生谷新生園遺跡、道路址の標については、邑本順亮氏(市文化財審議委員)に鑑定していただき、玉稿を賜った。
10. 本書の執筆は、「1. 麻生谷新生園遺跡、村田地区 - V 道路址の標について」が邑本氏で、他は山口が担当した。



目 次

序
例 言
目 次

1. 麻生谷新生園遺跡、村田地区	1
I 序 説	3
II 調査の概況	4
III 遺 構	12
IV 遺 物	14
V 道路址の確認について	15
VI 結 語	19
2. 東木津遺跡、丹羽地区	23
I 序 説	25
II 遺 構	27
III 遺 物	32
IV 結 語	34
3. 石塚遺跡、白石地区	35
I 序 説	37
II 遺 構	39
III 遺 物	41
IV 結 語	42
4. 試掘調査地区	43
I 東木津遺跡、山口地区	45
II 麻生谷新生園遺跡、村田地区	46
III 須田藤の木遺跡、背戸地区	47
IV 赤丸古村遺跡、公民館地区	48
V 瑞龍寺遺跡、中西地区	49
VI 下佐野遺跡、新田地区	50
VII H S - 02遺跡、各地区	51

挿 図 目 次

第1図 麻生谷新生園遺跡位置図 (1/5万).....	2
第2図 麻生谷新生園遺跡村田地区、石敷き面模出状態 (1/200).....	4
第3図 麻生谷新生園遺跡村田地区、上層の基本層序.....	5
第4図 麻生谷新生園遺跡村田地区、試掘坑配置図 (1/200).....	6
第5図 麻生谷新生園遺跡村田地区、石敷き状態実測図 (1/100).....	7
第6図 麻生谷新生園遺跡村田地区、北東側サブレンチ土層断面図 (1/40).....	8
第7図 麻生谷新生園遺跡村田地区、南西側サブレンチ土層断面図 (1/40).....	9
第8図 麻生谷新生園遺跡村田地区、遺物出土位置図 (1/200).....	11
第9図 麻生谷新生園遺跡村田地区、道路址実測図 (1/200).....	12
第10図 麻生谷新生園遺跡村田地区、完掘状態遺構図 (1/200).....	13
第11図 麻生谷新生園遺跡村田地区、縄の短径/長径ヒストグラム.....	16
第12図 麻生谷新生園遺跡村田地区、縄の円周度.....	16
第13図 麻生谷新生園遺跡村田地区、縄の大きさと偏平率.....	16
第14図 東木津遺跡位置図 (1/5万).....	24
第15図 東木津遺跡丹羽地区位置図 (1/5,000).....	25
第16図 東木津遺跡丹羽地区全体図 (1/200).....	27
第17図 東木津遺跡丹羽地区上層遺構図 (1/200).....	28
第18図 東木津遺跡丹羽地区完掘状態遺構図 (1/200).....	29
第19図 石塚遺跡位置図 (1/5万).....	36
第20図 石塚遺跡白石地区位置図 (1/5,000).....	37
第21図 石塚遺跡白石地区遺構図 (1/200).....	39
第22図 石塚遺跡白石地区砥石尖端図 (1/2).....	41
第23図 試掘調査地区関係遺跡位置図 (1/7万5千).....	44
第24図 東木津遺跡山口地区位置図 (1/5,000).....	45
第25図 麻生谷新生園遺跡村田地区位置図 (1/5,000).....	46
第26図 須田藤の木遺跡背戸地区位置図 (1/5,000).....	47
第27図 赤丸古村遺跡公民館地区位置図 (1/5,000).....	48
第28図 墓龍寺遺跡中西地区位置図 (1/5,000).....	49
第29図 下佐野遺跡新出地区位置図 (1/5,000).....	50
第30図 HS-02遺跡調査地区位置図 [1] (1/5,000).....	51
第31図 HS-02遺跡調査地区位置図 [2] (1/5,000).....	52

挿 表 目 次

第1表 麻生谷新生園遺跡村田地区、礫の岩質集計表	15
第2表 麻生谷新生園遺跡村田地区、礫の円磨度集計表	16
第3表 麻生谷新生園遺跡村田地区、遺跡中央部縦計測表	17
第4表 麻生谷新生園遺跡村田地区、遺跡南西部縦計測表	18

図 面 目 次

図面1 遺物実測図 麻生谷新生園遺跡 土器類
図面2 遺物実測図 麻生谷新生園遺跡 土器類
図面3 遺物実測図 麻生谷新生園遺跡 土製品、石製品
図面4 遺物尖測図 東木津遺跡 土器類
図面5 遺物尖測図 東木津遺跡 土器類
図面6 遺物実測図 東木津遺跡 土器類
図面7 遺物実測図 東木津遺跡 上器類
図面8 遺物実測図 東木津遺跡 土器類
図面9 遺物尖測図 東木津遺跡 土器類
図面10 遺物尖測図 東木津遺跡 土器類
図面11 遺物尖測図 東木津遺跡 土器類
図面12 遺物尖測図 東木津遺跡 土製品、銅製品、石製品
図面13 遺物尖測図 石塚遺跡 土器類
図面14 遺物尖測図 石塚遺跡 土器類

図 版 目 次

- 図版1 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 調査地区遠景（南西）
2. 調査地区遠景（南南西）
- 図版2 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 調査地区全景（北東）
2. 調査地区全景（南南東）
- 図版3 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 調査地区遠景（南西）
2. 調査地区遠景（南西）
- 図版4 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 調査地区全景（北西）
2. 調査地区全景（北東）
- 図版5 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 調査地区全景（南東）
2. 調査地区（西）
- 図版6 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 完掘状態全景（北）
2. 完掘状態近景（東）
- 図版7 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 路面検出状態全景（西）
2. 路面検出状態全景（北東）
- 図版8 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 路面検出状態近景（北）
2. 路面検出状態近景（北西）
- 図版9 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 路面検出状態近景（南西）
2. 路面検出状態近景（南西）
- 図版10 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 路面検出状態近景（北）
2. 路面検出状態近景（北）
- 図版11 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 北東側サブトレンド全景（北）
2. 南西側サブトレンド全景（西）
- 図版12 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 北東側サブトレンド北東壁近景（南）
2. 南西側サブトレンド北東壁全景（西）
- 図版13 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 北東側サブトレンド北東壁北端部（南西）
2. 北東側サブトレンド北東壁中央北寄り（南西）
- 図版14 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 北東側サブトレンド北東壁中央部（南西）
2. 北東側サブトレンド北東壁南端部（南西）
- 図版15 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 北東側サブトレンド南西壁北端部（北東）
2. 北東側サブトレンド南西壁中央北寄り（北東）
- 図版16 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 北東側サブトレンド南西壁中央部（北東）
2. 北東側サブトレンド南西壁中央南寄り（北東）
- 図版17 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 南西側サブトレンド北東壁北端部（南西）
2. 南西側サブトレンド北東壁北部（南西）
- 図版18 造構 麻生谷新生園遺跡 1. 南西側サブトレンド北東壁中央部（南西）

2. 南西側サブトレント東壁南部（南西）
- 図版19 遺構 麻生谷新生園遺跡 1. 南西側サブトレント西壁南端部（北東）
2. 南西側サブトレント西壁中央北寄り（北東）
- 図版20 遺構 麻生谷新生園遺跡 1. 南西側サブトレント西壁中央北寄り（北東）
2. 南西側サブトレント西壁北部（北東）
- 図版21 遺構 麻生谷新生園遺跡 1. 溝S D01（南東側、側溝）全景（南）
2. 溝S D01（南東側、側溝）全景（南東）
- 図版22 遺構 麻生谷新生園遺跡 1. 南西側サブトレント北端部土器出土状態（南）
2. 南西側サブトレント北端部土器出土状態（南西）
- 図版23 遺構 麻生谷新生園遺跡 1. 南西側サブトレント南端部須恵器出土状態（西）
2. 北東側サブトレント南西壁南部須恵器出土状態（北東）
- 図版24 遺構 麻生谷新生園遺跡 1. 調査地区南西部路面下遺物出土状態（北東）
2. 溝S D03遺物出土状態（北西）
- 図版25 遺構 麻生谷新生園遺跡 1. 調査風景（南）
2. 調査風景（南西）
3. 調査風景（東）
- 図版26 遺構 東木津遺跡 1. 調査地区遠景（南東）
2. 調査地区全景（北）
- 図版27 遺構 東木津遺跡 1. 調査地区全景（北西）
2. 調査地区全景（北東）
- 図版28 遺構 東木津遺跡 1. 調査地区近景（北西）
2. 調査地区近景（北東）
- 図版29 遺構 東木津遺跡 1. 溝S D06東側近景（東）
2. 溝S D06西側近景（北）
- 図版30 遺構 東木津遺跡 1. 溝S D05・09全景（南東）
2. 溝S D13・14全景（北）
- 図版31 遺構 東木津遺跡 1. 調査地区南東部遺物出土状態（北）
2. 溝S D05遺物出土状態（西）
3. 溝S D05遺物出土状態（東）
- 図版32 遺構 東木津遺跡 1. 溝S D06鏡出土状態（東）
2. 溝S D06鏡出土状態（南）
- 図版33 遺構 東木津遺跡 1. 溝S D06鏡出土状態（南西）
2. 溝S D06鏡出土状態（南）
- 図版34 遺構 東木津遺跡 1. 調査風景（南西）
2. 調査風景（南西）
3. 調査風景（北東）
- 図版35 遺構 右塚遺跡 1. 調査地区遠景（南西）
2. 調査地区遠景（南）

図版36 遺構 石塚遺跡 1. 調査地区全景（東南東）

2. 調査地区全景（南南西）

図版37 遺構 石塚遺跡 1. 調査地区近景（南東）

2. 上坑 S K146全景（西）

図版38 遺構 石塚遺跡 1. 井戸址 S E06全景（西）

2. 井戸址 S E06近景（北）

図版39 遺構 石塚遺跡 1. 地震址 S X62全景（南西）

2. 地震址 S X62近景（南東）

図版40 遺構 石塚遺跡 1. 調査風景（南）

2. 調査風景（南西）

3. 調査風景（南西）

図版41 遺物 麻生谷新生園遺跡 1. 土師器

2. 須恵器、珠洲

図版42 遺物 麻生谷新生園遺跡 1. 土師器、須恵器

2. 土製品、石製品

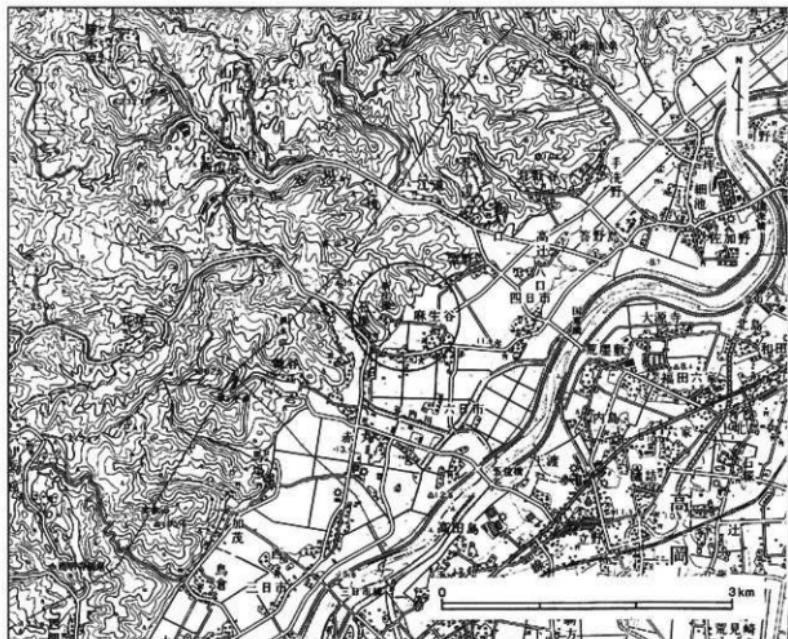
図版43 遺物 東木津遺跡 陶生土器、須恵器

図版44 遺物 東木津遺跡 土製品、銅製品、石製品

1. 麻生谷新生園遺跡、村田地区

麻生谷新生園遺跡村田地区、目次

I 序 説	3	IV 遺 物	14
II 調査の概況	4	1. 土器類	14
1. 石敷面	4	2. その他の遺物	14
2. 試掘坑	5		
3. 路面下	10		
4. 遺物の出土状態	10	V 道路址の蝶について	15
III 遺 溝	12	VI 結 語	19
1. 道路址	12	1. 検出遺構と出土遺物	19
2. 溝	13	2. 周辺の調査地区	20
		3. 古代北陸道	21
		4. 道路址	22



第1図 麻生谷新生園遺跡位置図（1／5万）

I 序 説

遺跡概観

当「麻生谷新生園遺跡」は、高岡市街地の西方、隣接する福岡町との境付近に位置する。JR高岡駅の西方約6.5kmの所である。北西側には西山丘陵が迫り、南東側約1.8kmには小矢部川が北東方向に流れている。丘陵谷部には、県立養護施設である「新生園」が所在するが、この谷部と南東側一帯が当遺跡である。

当遺跡の東側一帯には麻生谷遺跡が拡がっている。西側の丘陵尾根上には石堀船塁古墳群が立地している。円墳と方墳合計12基からなる古墳群である。この古墳群のある尾根を越えた西側の谷部には、石堤長光寺遺跡がある。

遺跡の範囲は、北東～南西が約100m、北西～南東が約300mを計る。谷部の県立新生園の敷地からは、昭和46年の造成工事の時、縄文土器、打製石斧、土師器、須恵器等が出土している。平野部側では、丘陵裾部を走る県道工事に伴う調査が実施されている。この調査では、古墳時代後期、6世紀代を中心とした遺構、遺物の検出、出土をみている。

調査に至る経緯

平成9年1月、市農業委員会からの照会で、当該地における農地転用と住宅の建設計画を知った。施主の村田哲二氏と協議をして発掘調査に至った。計画地は、平成6年度に調査を実施した県道の南側に接する地区であり、遺構が検出される可能性が高い地区であった。建設工事は急いでいるとのことであったが、冬場のため調査は困難であり、新年度に実施することになった。平成9年4月16日に試掘調査を実施したところ、土師器、須恵器等の遺物が出土し、遺構状のものが確認されたので、本調査を実施することになった。この試掘調査と調査地区の位置については、本書「4-II」(46頁)を参照されたい。

調査経過

本調査は、平成9年5月12日から同年8月20日まで実施した。実働調査日数は56日である。第1・2層の除去はバックフォーで行い、敷地内に積み上げた。この段階で地表ド、約60cmの所に、石敷き(パラス=小石・砂礫敷き)の硬化面を確認したので、この面のやや上で止め、手作業で掘り下げてこの面を検出すことにした。この面は調査地区の大部分を占め、帶状に延びているものだったので、道路状の遺構と判断し、調査を続けた。調査対象面積は499m²で、180m²の発掘を実施した。

検出遺構

検出遺構は道路址と溝である。道路址はSF01とした。溝は4条検出され、SD01~04とした。

出土遺物

出土遺物は以下のとおりである。

上器類：土師器、須恵器、珠洲

上製品：土鍤

石製品：砥石

グリッド

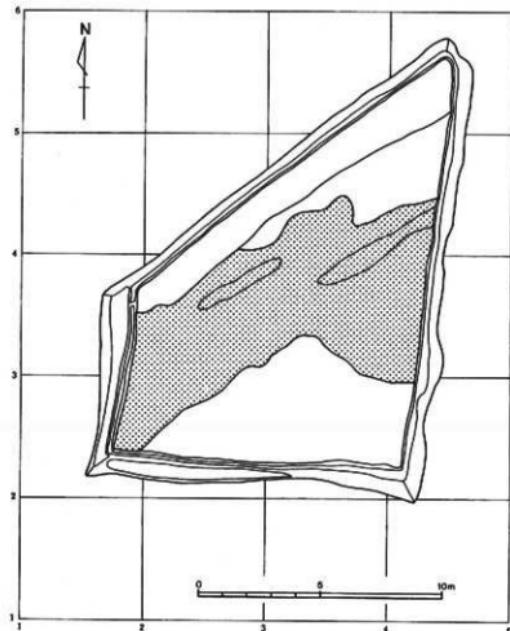
調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系(原点は北緯35°00'00"、東経137°10'00")に合わせた。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ19.910km、北へ82.340kmの位置である。構造図のメッシュは5m区画である。

II 調査の概況

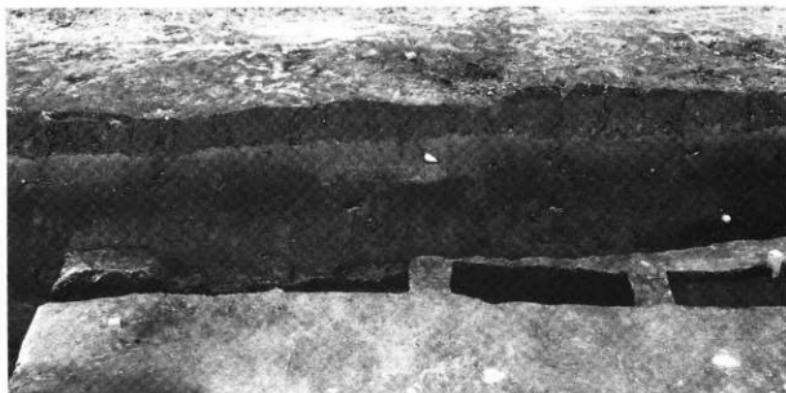
1. 石敷面

石敷面の検出

表土と第2層の除去は、重機（バックフォー）で実施した。約60cm掘り下げた所で硬化した面を確認したので、重機による掘削はこのやや上で止め、その後手作業により掘り下げを行い、石敷き（パラス敷き）された硬化面を検出した。この面の直上から検出される遺物に中世以降のものがないことより、この遺構が古代のものであることが知り得た。またこの遺構が一定の幅を持ち延びているので、道路址であると判断し、この調査を続けることにした。石敷き面と、石敷きがやや希薄だが硬化した面の範囲を記録して、次の作業にかかった。この時点で確認した上記の範囲は、第2図として示したものである。主要な石敷き部分は、西南西～東北東方向へ延びているように観察されたが、硬化面等を考慮して、道路面（道路址）としては、ほぼ南西～北東方向に向かっているものと把握した。



第2図 麻生谷新生園遺跡
村田地区、石敷き面検出状
態（1/200）



第3図 麻生谷新生園遺跡村田地区、上層の基本層序

上層の基本層序

道路面より上層の基本層序は以下のとおりである。また第3図として示した写真も参照されたい。

第1層：暗褐色砂質土層

第2層：明褐色粘質土層

第3層：黒褐色粘質土層

第4層：暗褐色粘質土層

第1層は現代の水田の耕作土である。第2層も現代のもので圃場整備の時に移動した土層と推定される。

第3層については、中世～近代頃のものであろう。第4層については、道路面を覆っており、出土遺物からも平安時代のものと判断される。

2. 試掘坑

試掘坑の設定

道路面下の状況を把握するため、試掘坑（「サブトレンチ」と称する）を設定した。道路址が南西～北東方向に延びているものとし、これと直交する形で2本のサブトレンチを設けた。調査地区的北東側と南西側とにそれぞれ1本づつである。北東側サブトレンチ及び南西側サブトレンチとする。掘り下げ時の出土遺物の位置を記録しながら、基盤層と判断した土層まで掘り下げた。

北東側サブトレンチ

幅2.0～2.2mで、長さ18.0～19.5mに亘り設定した。土層断面の記録は両方の壁面で行い、それを北東側サブトレンチ北東壁、及び南西壁とする。

北東側サブトレンチ北東壁（第6図の上段）。北東壁の中央部に石敷き面の直下から切り込む形で、溝状

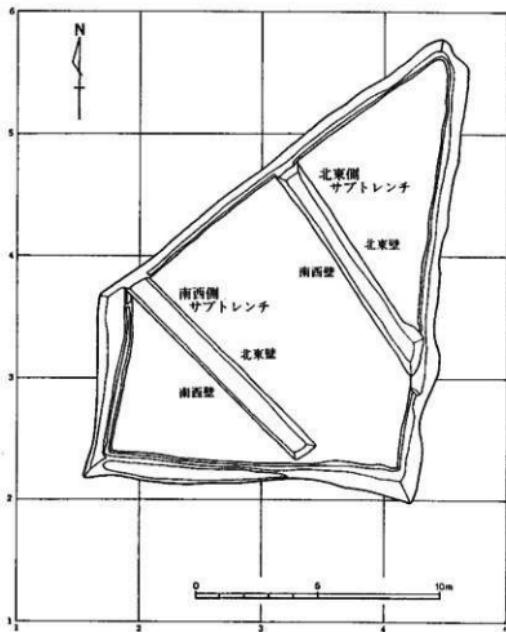
の土層が見られた。第3層とした所である。薄く帯状に拡がっている第1・4・5層は砂質土であり、道路造成に伴う整地層と思われる。この整地層は幅約4.50mを計る。この層の左右には、これよりはやや軟質な土層が拡がっている。南東側には道路址の側溝とした落ち込みが見られる。第17層としたものである。

北東側サブトレンチ南西壁（第6図の下段）。南西壁の中央部に右駆き面の直下から切り込む形で、溝状の土層が見られた。第3層とした所である。薄く帯状に拡がっている第1・2・4層は砂質土であり、道路造成に伴う整地層と思われる。この整地層は幅約2.10mを計る。この層の左右には、これよりはやや軟質な土層が拡がっている。南東側には道路址の側溝とした落ち込みが見られる。第17層としたものである。ここから図面2-1123とした須恵器群が出土している。

南西側サブトレンチ

幅2.0~2.2mで、長さ19.3~19.7mに亘り設定した。七層断面の記録は両方の壁面で行い、それぞれを南西側サブトレンチ北東壁、及び南西壁とする。

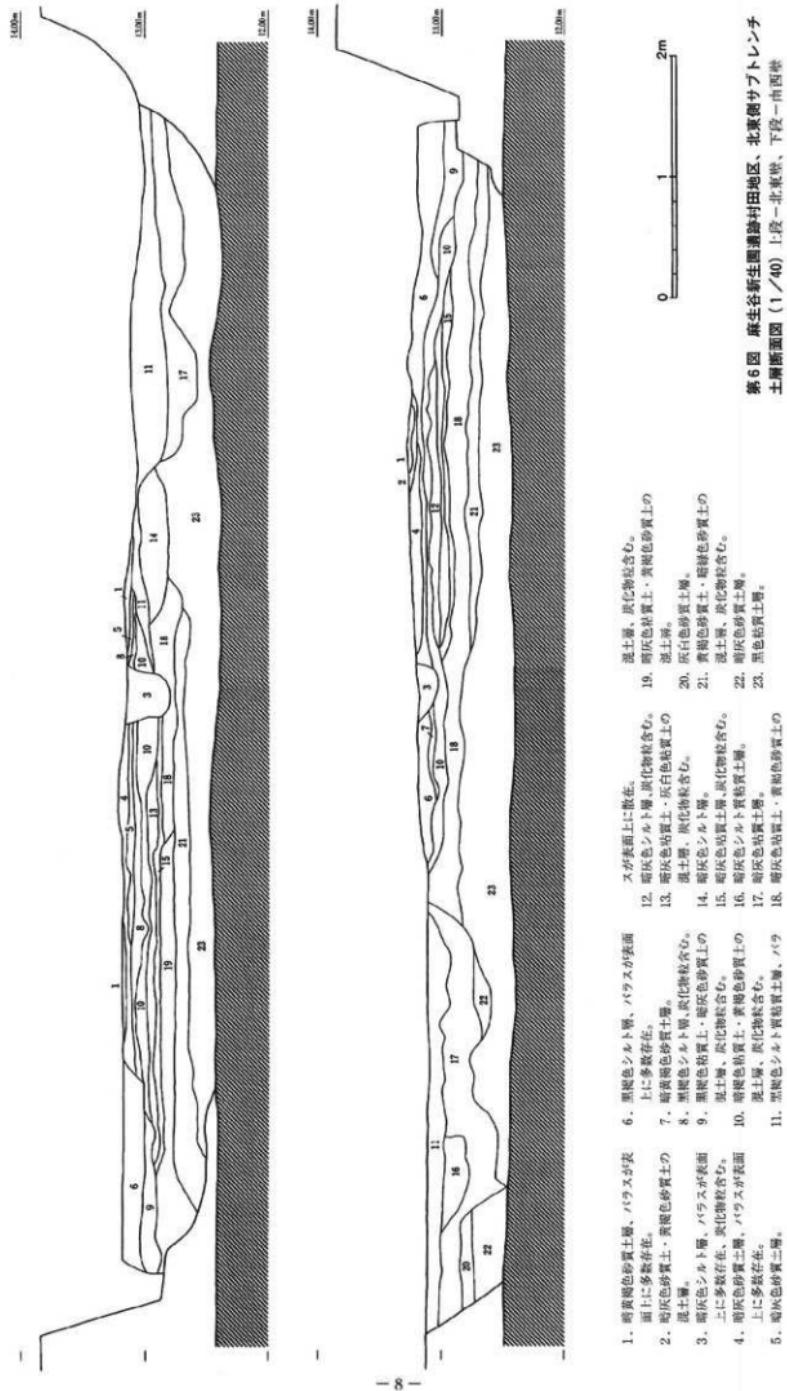
南西側サブトレンチ北東壁（第7図の上段）。北東壁の北西側端部で、溝状の上層が見られた。第4層としたものである。この壁の中央より北西側は第1層、第2層とした砂質土が薄く帯状に拡がっており、道路造成に伴う整地層と思われる。この整地層は約3.45mを計るものである。その下には第5層としたものがあ



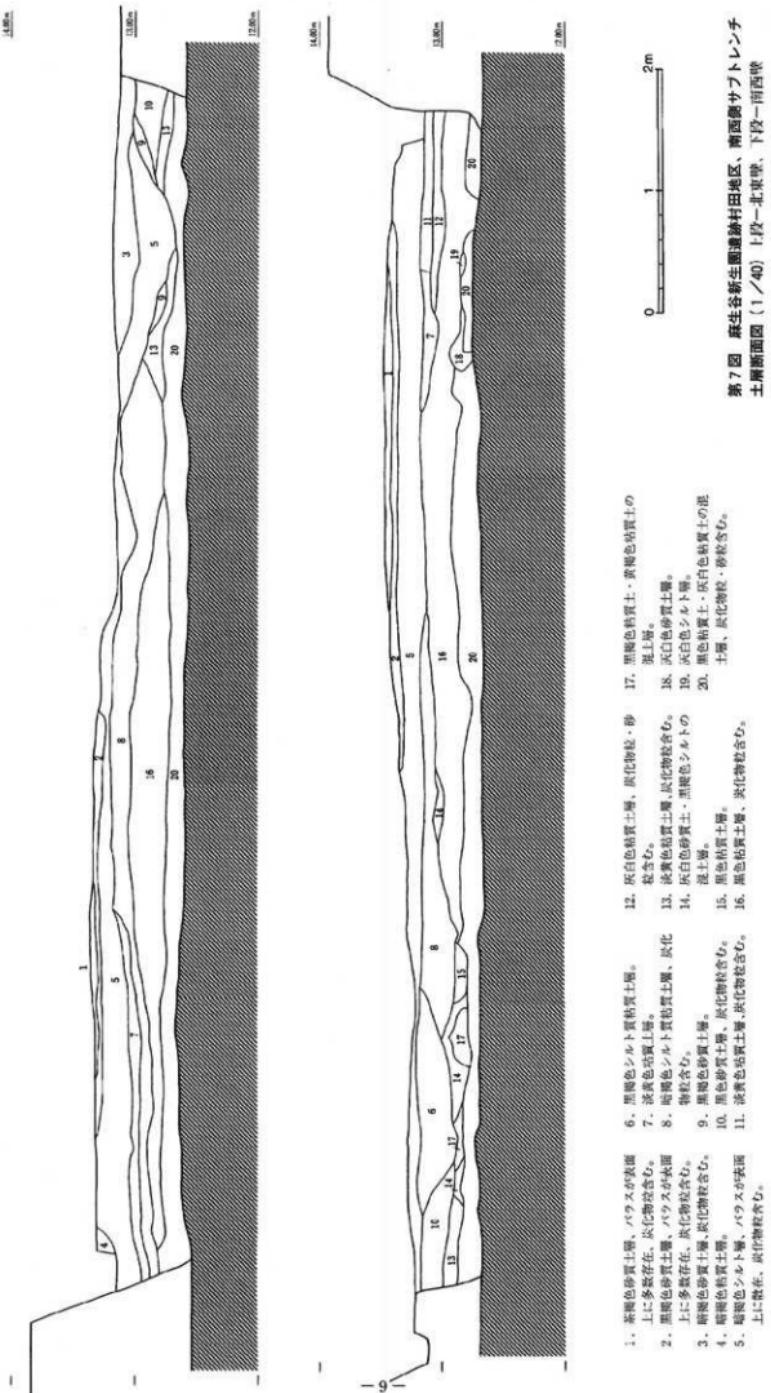
第4図 麻生谷新生町遺跡
村田地区、試掘坑配置図
(1/200)



第5図 麻生谷新生団遺跡村田地区、石敷き状態実測図 (1/100)



第6図 麻生谷新生園通跡付近地区、北東側サブトレーナ
土層断面図 (1/40) 上段—北東側、下段—南西側



第7図 麻生谷新生園遺跡村田地区、南西側サブトレーン
土層断面図 (1 / 40) 1段-北東壁、下段-南西壁

1. 黄褐色粘土層、バクスガ表層
1.1. 多葉苔生、灰化物含む。
2. 黑褐色質土層、バクスガ表層
2.1. 多葉苔生、灰化物含む。

3. 斜面砂質土層、灰化物含む。

4. 黄褐色粘土層、バクスガ表層
4.1. 多葉苔生。

5. 黄褐色シルト層、バクスガ表層
5.1. 多葉苔生、灰化物含む。

6. 黑褐色シルト質粘土層
6.1. 多葉苔生。

7. 深褐色粘土層
7.1. 多葉苔生。

8. 咖啡色シルト質粘土層、灰化物含む
8.1. 多葉苔生。

9. 黑褐色砂質土層
9.1. 多葉苔生。

10. 黄褐色砂質土層、灰化物含む
10.1. 多葉苔生。

11. 淡褐色粘土層、灰化物含む
11.1. 多葉苔生。

12. 厚白色粘土層、灰化物含む
12.1. 多葉苔生。

13. 淡黄色粘土層、灰化物含む
13.1. 多葉苔生。

14. 厚白色砂質土層、黑褐色シルトの混入
14.1. 多葉苔生。

15. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
15.1. 多葉苔生。

16. 黄褐色粘土層、灰化物含む
16.1. 多葉苔生。

17. 黑褐色粘土層、灰化物含む
17.1. 多葉苔生。

18. 淡白色砂質土層
18.1. 多葉苔生。

19. 黑褐色粘土層
19.1. 多葉苔生。

20. 黑褐色粘土層、灰化物含む
20.1. 多葉苔生。

21. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
21.1. 多葉苔生。

22. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
22.1. 多葉苔生。

23. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
23.1. 多葉苔生。

24. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
24.1. 多葉苔生。

25. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
25.1. 多葉苔生。

26. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
26.1. 多葉苔生。

27. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
27.1. 多葉苔生。

28. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
28.1. 多葉苔生。

29. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
29.1. 多葉苔生。

30. 黑褐色砂質土層、灰化物含む
30.1. 多葉苔生。

るが、これも堅く締まったものである。南東側には道路辺の側溝とした落ち込みが見られる。

南西側サブレンチ南西壁（第7図の下段）。この壁の中央部から北西側は第1層、第2層とした砂質土が薄く帯状に括がっている。道路造成に伴う整地層と思われる。この整地層は約4.45mを計るものである。その下には第5層としたものがあるがこれも堅く締まったものである。南東側には道路辺の側溝とした落ち込みが見られる。

3. 路面下

道路面の記録

試掘坑を掘り終わった段階で、調査地区的全景写真を撮影した。これは地上からのものと、業者委託によるラジオコントロールヘリコプターによるものとの両方である。また石敷きの状況把握のため、空中写真測量による平面図を作成した。

下層への掘り下げ

道路面やサブレンチ設定による土層断面の記録作成の後、下層への掘り下げを行った。サブレンチのそれぞれ内側をセクションベルトとして掘り残し、この中央部とサブレンチのそれぞれ外側、すなわち3箇所を掘り下けた。周囲の壁の崩壊防止のため、周辺部も掘り残した。掘り下げに当たり、路面の石を探集した。

関連遺構

道路辺に関連するものと思われる溝状の遺構を4条検出し、SD01~04とした。

4. 遺物の出土状態

出土遺物の区分

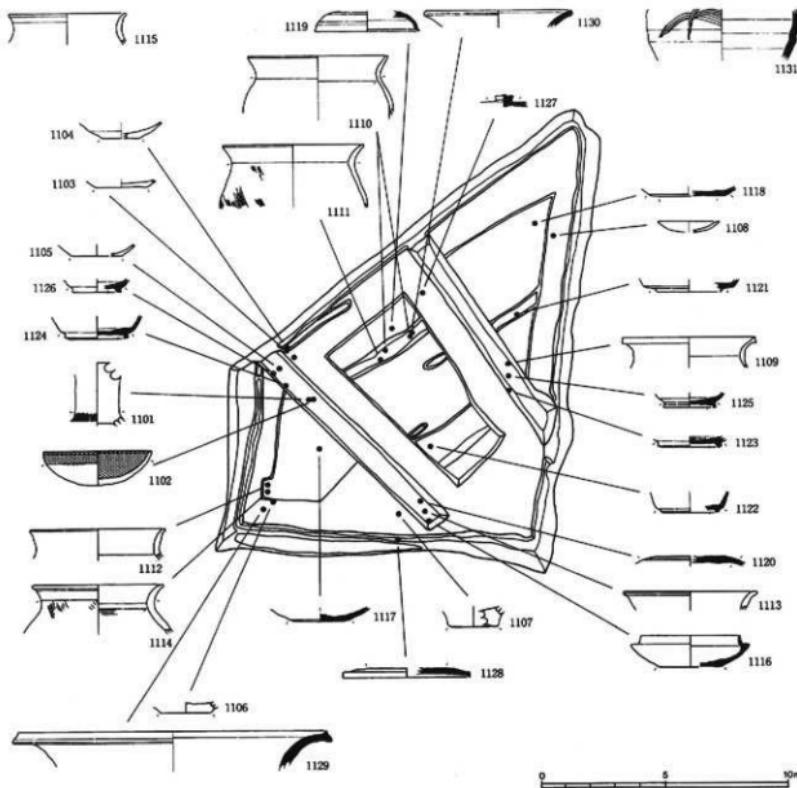
遺物は出土位置や歴史的性格の違いにより以下のように3つに区分される。

1. 道路が造成される以前のもの。古墳時代の遺物
サブレンチや路面下の掘り下げ時に出土したもの。
2. 道路造成や使用時のもの。奈良・平安時代の遺物
道路面直上や直下、関連する溝から出土したもの。
3. 道路が廃絶して以降のもの。平安時代後期以降の遺物
道路面より上方で出土したもの。

遺物の出土位置

上記の1と2の遺物は、原則として出土位置を記録して取り上げた。主要遺物の出土位置は、第8図として示した。

第8図で示した上器の内、1115と1131は出土位置を明示していないが、1115は表上出土であり、1131は表面採集の資料である。1106~1108の3点は道路面よりかなり上方から出土している。その他の土器の出土位置は以下のとおりである。



第8図 麻生谷新生園遺跡村田地区、遺物出土位置図 (1/200)

1. 上層出土；1103・1106～1108。
 2. 路面直上ないし路面から出土；1105・1118・1124・1126～1129。
 3. 路面下より出土；1101・1102・1109・1112～1114・1116・1117・1119・1120・1125。
 4. 各溝より出土；S D01～1122・1123, S D02～1121, S D03～1110・1111・1130, S D04～1104。
- S D01は道路址の側溝としたもので、1122は面的に掘り下げた所から、1123は北東側サブトレーンチの断面からの出土である。1125については、S D01に所属する可能性がある。

1128については、調査地区南端の排水用側溝を掘削している時の出土であり、路面との関係は明確ではない。

III 遺構

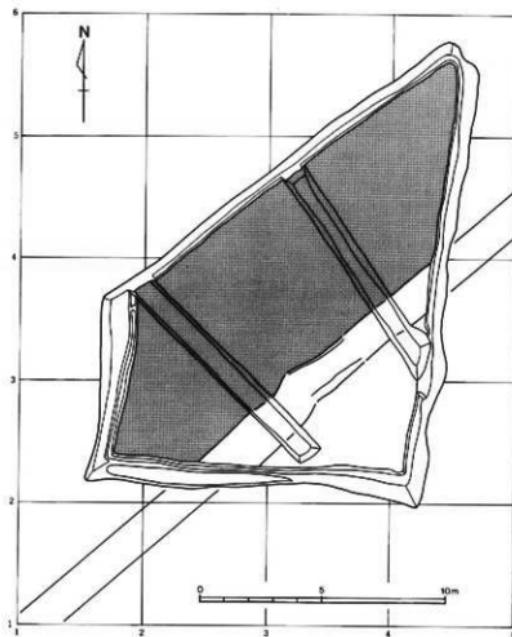
1. 道路址

道路址 S F 01

北東方向へ伸びる道路址である。調査地区の大半を覆っている。

上層の遺構（第2・3期の道路址）。パラス（小石・砂礫）を敷き詰めた路面である。幅4～4.5mで南北～北東方向に拡がり、さらに湾曲して幅5.5～7.5mで東西方向に拡がっている。これの北東側もパラスがやや少ないものの硬化した面となっている。

下層の遺構（第1期の道路址）。道路址に伴うと推定される溝（側溝）がパラスの下から検出された。S D01とした溝である。この側溝は道路址の南東側にあり、これに対する北西側の側溝は検出されていない。S D01の北西側肩部から調査地区北西端までは、6.5mを計り、最低6.5mの路面があった可能性が指摘できる。



第9図 麻生谷新生圓遺跡
村田地区、道路址実測図
(1/200)

2. 溝

溝SD01

道路址SF01の南東側側溝である。北東～南西方向に走る溝である。規模は幅100～200cm、深さ49cmを計る。面的には2.80mに亘り検出されている。サブトレンチの土層断面の分を加えると、7.40mに亘り検出されたことになり、さらに両方向へ延びている。

溝SD02

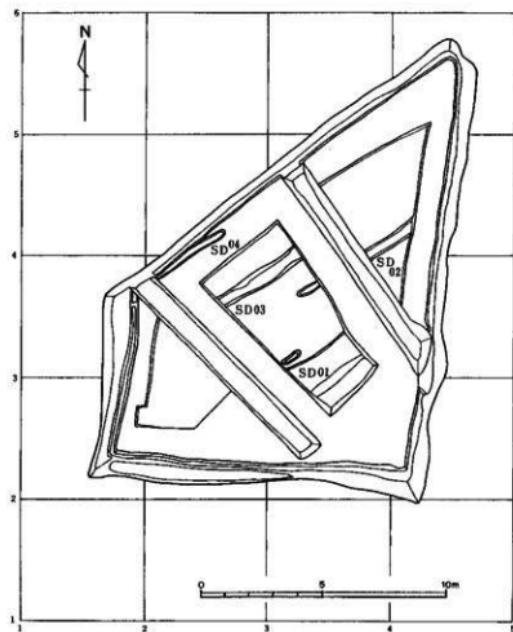
道路址SF01内より検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は幅20～56cm、深さ16cmを計る。北東側はさらに延びている。

溝SD03

道路址SF01内より検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は幅44～70cm、深さ8cmを計る。西側に延びている。

溝SD04

道路址SF01内より検出された。北東～南西方向に走る溝である。規模は幅26～35cm、深さ26cmを計る。南東側はさらに延びている。



第10図 麻生谷新生圓遺跡
村田地区、完掘状態遺構図
(1/200)

IV 遺 物

1. 土器類

土師器

高杯 図面 1-1101。高杯の柱状部片である。

椀A 図面 1-1102。半球形の椀である。内面と口縁部外面は黒化されている。

椀B 図面 1-1103~1105。椀の底部片である。底部は糸切りである。

皿A 図面 1-1106・1107。皿の底部片である。底部は比較的厚く、糸切りしている。

皿B 図面 1-1108。非ロクロの小皿である。

壺A 図面 1-1109。壺の口縁部である。口縁部は口唇帯をなし、上方へつまみ上げられている。

壺B 図面 1-1110~1115。壺の口縁・胴上部片である。口縁部はくの字状に折れて、外反して外上方へ括がっている。

須恵器

杯H 直面 2-1116~1118。立ち上がりと受け部を持つ身である。1116は全体の形態がほぼ判明する。口縁部や受け部の端は丸く終わっている。底部はヘラ切りのままである。1117と1118は小破片である。1116のような杯身になるか、後述の1119のような杯蓋になるか明確でないが、一応杯身とした。1117は、底部はヘラ切りのままである。底部近くの体下部はヘラ削りされているように見えるがはっきりしない。1118は底部をヘラ切りし、外縁部をヘラ削りしている。

杯H蓋 図面 2-1119・1120。杯Hと組み合う椀形の蓋である。1119は下端部内面に稜が付く。1120は小破片のためはっきりしないが、一応蓋とした。天井部はヘラ削りしている。

杯B 直面 2-1121~1126。高台付の身である。体下・底部片である。高台部の外下方へのふんばりは絶じて小さいものである。1122は下方へ延びる小さな高台が付く。1123はやや外下方へ延びる小さな高台が付く。

杯B蓋 図面 2-1127・1128。杯Bと組み合う蓋である。1127は宝珠形のつまみ部である。1128は口縁部で、口端部は下方へ短く折れ曲がる。

壺 図面 2-1129・1130。壺の口縁部片である。

珠洲

壺 国面 2-1131。壺の胴部片である。櫛描文が付く。

2. その他の遺物

土製品

土錐 国面 3-1201・1202。土師質で管状のものである。

石製品

砥石 国面 3-1301。砥石の破片である。

V 道路址の礫について

邑本順亮

はじめに

当遺跡出土の礫について、大きさ・形状・礫質等の計測・識別を行った。

古代の道に敷かれた砂利であろうと考えられることから、それがどこから運ばれたものかを推測しようと考えたからである。

計測等の結果は表のとおりであった。

計測したのは、発掘調査の際に採集された物のうち、遺跡の中央部のものと南西部のものから、それぞれ100個、計200個である。取扱いに当たっては全体の傾向がつかめるように配慮しながら任意に取り上げた。

まとまって礫を運び出すことができる場所としては、近くでは小矢部川の河原が考えられる。丘陵地には段丘礫層が分布するが、発掘現場で礫を観察したところ、近くの段丘礫層のものとは考えにくかった。

以下、計測の結果に若干の考察を加えてみた。なお、小矢部川の三日市橋と五位橋の間で三日市橋の下流約1kmの地点で昭和55年7月に調査した河原の礫の記録があったので比較した。

礫の岩質について

礫の岩質は外観の肉眼鑑定によった。

火成岩は中央部で59%、南西部で73%で平均66%であった。小矢部川の三日市橋下流約1kmの地点（以降小矢部川河原と呼ぶ）では78%であり遺跡のものよりはやや多い。火成岩の中では流紋岩類が多く、石英斑岩を含めて全体の46%を占めている。小矢部川河原では43%であった。これら流紋岩類のほとんどは濃飛流紋岩類であること、灰干山に特有なタイプが含まれることなどが共通した特徴である。ちなみに庄川の大門大橋の下では30%であった。

堆積岩は中央部で27%、南西部で21%で平均24%であった。小矢部川河原では13%と少ないが、これは壊れやすい岩石であるため場所による差異が大きいものと思われる。

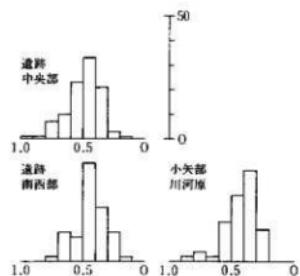
変成岩はほとんどが片麻岩である。肉眼鑑定では花崗岩と片麻岩とは識別し難い場合がありとくに小さい礫の場合にそれが多い。したがって花崗岩としたものの中には片麻岩に含めるべきものが含まれる場合がある。

		中央部	南西部	計	合計
火成岩	花崗岩	5	5	10	
	閃綠岩	1	1	2	
	ピン岩	5	9	14	
	石英斑岩		1	1	
	流紋岩（濃飛）	44	43	87	
	流紋岩（灰干山）	1	2	3	
	綠果流紋岩	1		1	
	安山岩	2	11	13	132
	石英安山岩	1	1	1	(66%)
堆積岩	砂岩	3	4	7	
	泥灰岩	12	9	21	
	溶結凝灰岩		3	3	
	綠色凝灰岩	1		1	
	角礫凝灰岩		1	1	
	集塊岩	6	4	10	
	安山岩（集塊岩）	1		1	
	チャート	3		3	48
変成岩	正理岩	1		1	(24%)
	片麻岩	13	6	19	20
	花崗片麻岩	1		1	(10%)
計		100	100	200	

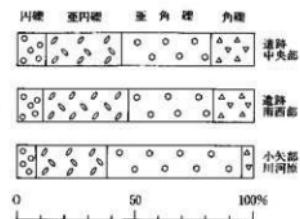
第1表 麻生谷新生園遺跡村田地区、礫の岩質集計表

	中央部	南西部	計
角 碨	18	17	35(17.5%)
亜角 碛	38	36	74(37.0%)
亜円 碛	32	36	68(34.0%)
円 碛	12	11	23(11.5%)
計	100	100	200

第2表 麻生谷新生園遺跡村田地区、礫の円度集計表



第11図 麻生谷新生園遺跡村田地区、礫の短径／長径ヒストグラム

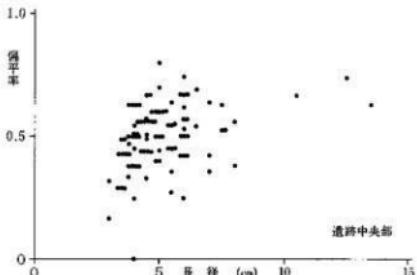


第12図 麻生谷新生園遺跡村田地区、礫の円度

れたものと思われる。礫種の構成が類似することや形状の比較から、その類似性を何うことができる。

礫の中には小矢部川の上流に特有な正珪岩が確認されたことや、医王山周辺に特有なタイプの流紋岩が含まれることも重要な点である。正珪岩は小矢部川流域の立野が原などでよく採集され、良質のものは福光で玉杯などに加工されている。

礫の形状については、必ずしも小矢部川の河原のものと一致するとはいえないが、これは河川上流の環境の違いに起因するものと思われる。すなわち、現在の小矢部川の上流には、人工的な構造物（ダムや護岸など）があるが、遺跡の時代にはこの様な構造物はなかったと思われるから、この様な条件の違いが河原の礫の形状や礫種の構成に反映されているものと考えられる。



第13図 麻生谷新生園遺跡村田地区、礫の大きさと偏平率

礫の形状について

礫の計測では、長径と短径を測定した。礫の形を示す数値の一つとして、短径と長径の比を求めた。礫の短径と長径が同じ、すなわち球に近い場合は1.0となり、逆に長径に比べて短径が小さい程0に近付くことになる。

結果は図（ヒストグラム）に示した。

礫の円度を4段階（円礫・亜円礫・亜角礫・角礫）に分けて調べた。その結果遺跡の中央部と南西部とはかなり類似した結果となった。また、小矢部川河原にくらべると遺跡のものは亜角礫が少なくなっている。

礫について計測値から偏平率を求めた。この値は偏平率をaとすれば、

$$a = (a - b) / a, \quad a : \text{長径}, \quad b : \text{短径},$$

すなわち、球 ($a = b$) に近付けば $a = 0$ に近付くことになる。長径と偏平率の関係を遺跡の中央部の資料から作図して例示した。

考察

礫の計測値等から、遺跡の礫は小矢部川の河原から運ば

No	長径	短径	短/長	円周度	偏平率	岩質	No	長径	短径	短/長	円周度	偏平率	岩質
1	13.5	5.0	0.37	亜角礫	0.63	ヒン岩	51	5.5	3.5	0.64	角 繙	0.36	凝灰岩
2	12.5	3.3	0.26	亜角礫	0.74	ヒン岩	52	3.8	2.0	0.53	円 繙	0.47	流紋岩
3	6.0	3.5	0.58	亜円礫	0.42	流紋岩	53	3.5	2.0	0.57	亜角礫	0.29	流紋岩
4	6.0	3.0	0.5	亜円礫	0.5	片麻岩	54	3.5	2.5	0.71	亜円礫	0.6	流紋岩
5	6.0	3.5	0.58	角 繙	0.42	花崗岩	55	5.0	2.0	0.4	亜円礫	0.63	流紋岩
6	10.5	3.5	0.33	亜角礫	0.67	片麻岩	56	4.0	1.5	0.38	角 繙	0.43	流紋岩
7	7.0	4.0	0.57	亜角礫	0.43	流紋岩	57	4.5	2.5	0.56	亜角礫	0.44	流紋岩
8	5.0	2.5	0.5	亜角礫	0.5	流紋岩	58	4.0	2.5	0.63	亜角礫	0.38	流紋岩
9	8.0	3.5	0.44	円 繙	0.56	流紋岩	59	6.0	2.0	0.33	亜円礫	0.67	流紋岩
10	3.5	2.5	0.71	亜円礫	0.29	流紋岩	60	4.5	2.0	0.44	亜円礫	0.56	流紋岩
11	4.5	2.5	0.56	円 繙	0.44	凝灰岩	61	5.0	3.0	0.6	円 繙	0.4	花崗岩
12	6.0	2.3	0.38	亜円礫	0.62	流紋岩	62	4.0	2.0	0.5	円 繙	0.5	安山岩(塊状)
13	6.0	3.5	0.58	亜円礫	0.42	緑色凝灰岩	63	4.5	1.5	0.33	角 繙	0.67	片麻岩
14	6.0	3.0	0.5	亜円礫	0.5	凝灰岩	64	4.5	2.5	0.56	角 繙	0.44	集塊岩
15	6.0	1.5	0.25	亜円礫	0.75	凝灰岩	65	5.0	2.0	0.4	亜角礫	0.6	流紋岩
16	3.0	2.0	0.67	角 繙	0.33	流紋岩	66	4.5	2.0	0.44	亜円礫	0.56	閃綠岩
17	4.0	2.0	0.5	亜角礫	0.5	凝灰岩	67	4.0	1.5	0.38	円 繙	0.63	集塊岩
18	3.5	2.5	0.71	亜角礫	0.29	流紋岩	68	3.5	1.8	0.51	円 繙	0.49	片麻岩
19	5.0	1.0	0.2	亜角礫	0.8	流紋岩	69	3.5	2.0	0.57	亜角礫	0.43	片麻岩
20	6.0	2.5	0.42	亜角礫	0.58	流紋岩	70	6.0	2.8	0.47	円 繙	0.53	球果流紋岩
21	4.0	1.8	0.45	亜円礫	0.55	集塊岩	71	7.5	3.5	0.47	亜円礫	0.53	流紋岩
22	5.5	3.0	0.55	亜角礫	0.45	ヒン岩	72	4.0	4.0	1.0	角 繙	0.0	砂 岩
23	7.5	3.5	0.47	亜角礫	0.53	花崗岩	73	3.5	1.8	0.51	角 繙	0.49	流紋岩
24	5.0	2.8	0.56	亜円礫	0.44	朱雀岩	74	6.0	3.0	0.5	円 繙	0.5	花崗片麻岩
25	5.0	1.5	0.3	角 繙	0.7	凝灰岩	75	4.5	2.3	0.51	亜角礫	0.49	流紋岩
26	4.0	2.0	0.5	亜角礫	0.5	流紋岩	76	6.0	3.5	0.58	亜角礫	0.42	流紋岩
27	3.5	2.5	0.71	亜角礫	0.29	凝灰岩	77	5.5	4.0	0.73	亜角礫	0.27	流紋岩
28	4.5	2.2	0.49	亜円礫	0.51	凝灰岩	78	5.5	3.0	0.55	亜円礫	0.45	片麻岩
29	4.0	2.0	0.5	亜円礫	0.5	凝灰岩	79	5.0	2.0	0.4	亜角礫	0.6	集塊岩
30	5.5	2.5	0.45	角 繙	0.55	片麻岩	80	6.0	4.5	0.75	角 繙	0.25	流紋岩
31	4.0	1.5	0.37	亜角礫	0.63	流紋岩	81	4.0	2.5	0.63	亜角礫	0.38	ヒン岩
32	6.5	3.0	0.46	亜円礫	0.54	流紋岩	82	6.0	2.0	0.33	円 繙	0.67	集塊岩
33	4.0	2.5	0.63	亜円礫	0.38	凝灰岩	83	4.0	3.0	0.75	亜角礫	0.25	流紋岩
34	6.5	2.0	0.31	亜円礫	0.69	流紋岩	84	7.0	4.5	0.64	亜円礫	0.36	チャート
35	5.0	2.5	0.5	亜角礫	0.5	流紋岩	85	5.5	2.5	0.45	亜角礫	0.55	流紋岩
36	4.0	2.5	0.63	角 繙	0.38	凝灰岩	86	3.0	2.5	0.83	亜角礫	0.17	流紋岩
37	4.0	1.8	0.45	円 繙	0.55	花崗岩	87	4.5	2.0	0.44	角 繙	0.56	花崗岩
38	4.5	2.5	0.56	亜角礫	0.44	チャート	88	4.5	1.5	0.33	亜角礫	0.67	凝灰岩
39	7.5	2.8	0.37	角 繙	0.63	流紋岩	89	4.5	2.0	0.44	亜角礫	0.56	流紋岩
40	4.5	2.0	0.44	亜角礫	0.56	片麻岩	90	4.5	2.0	0.44	亜角礫	0.56	流紋岩
41	6.0	2.5	0.42	亜円礫	0.58	片麻岩	91	5.0	2.0	0.4	角 繙	0.6	安山岩
42	5.5	2.5	0.45	亜角礫	0.55	片麻岩	92	5.0	2.0	0.4	亜円礫	0.6	流紋岩
43	6.0	2.0	0.33	亜円礫	0.67	片麻岩	93	7.0	2.5	0.36	角 繙	0.64	流紋岩
44	4.0	2.0	0.5	亜角礫	0.5	正珪岩	94	5.5	2.0	0.36	亜角礫	0.64	流紋岩
45	3.5	2.0	0.57	亜円礫	0.43	流紋岩	95	5.5	3.0	0.55	亜円礫	0.45	砂 岩
46	5.0	3.0	0.6	円 繙	0.4	片麻岩	96	4.0	2.0	0.5	亜角礫	0.5	流紋岩
47	4.5	3.0	0.67	亜角礫	0.33	流紋岩	97	4.0	2.0	0.5	亜角礫	0.5	流紋岩
48	4.5	2.0	0.44	亜円礫	0.56	ヒン岩	98	4.0	1.5	0.38	角 繙	0.63	安山岩
49	5.0	2.5	0.5	亜円礫	0.5	片麻岩	99	3.5	2.0	0.57	亜円礫	0.43	砂 岩
50	3.8	2.5	0.66	亜円礫	0.34	流紋岩	100	8.0	5.0	0.63	角 繙	0.38	チャート

※長径・短径の単位:cm、短径/長:短径/長径、偏平率=(長径-短径)/長径

第3表 麻生谷新生園遺跡村田地区、遺跡中央部 sondage測定表

No	長径	短径	短/長	円周度	偏平率	岩質	No	長径	短径	短/長	円周度	偏平率	岩質
1	5.5	2.5	0.45	円 球	0.55	花崗岩	51	4.5	2.5	0.56	亜円球	0.44	閃緑岩
2	9.0	3.5	0.39	亜角球	0.61	流紋岩	52	3.5	1.5	0.43	亜円球	0.57	砂 岩
3	6.0	3.0	0.5	亜角球	0.5	溶結凝灰岩	53	4.0	1.5	0.38	亜角球	0.63	ヒン岩
4	4.5	2.0	0.44	亜円球	0.56	流紋岩(風化)	54	4.5	3.0	0.67	亜角球	0.33	ヒン岩
5	9.5	4.0	0.42	亜円球	0.58	安山岩	55	6.0	2.5	0.42	亜円球	0.58	凝灰岩
6	7.5	4.5	0.6	円 球	0.4	溶結凝灰岩	56	5.0	2.5	0.5	亜角球	0.5	流紋岩
7	6.5	4.5	0.69	角 球	0.31	凝灰岩	57	6.5	2.5	0.38	亜円球	0.62	流紋岩
8	6.0	2.0	0.33	角 球	0.67	安山岩	58	6.0	2.5	0.42	亜円球	0.58	安山岩
9	6.5	2.0	0.31	亜角球	0.69	流紋岩	59	6.0	1.7	0.28	亜円球	0.72	流紋岩
10	6.0	1.5	0.25	亜円球	0.75	流紋岩	60	4.5	2.0	0.44	亜円球	0.56	流紋岩
11	5.0	2.5	0.5	亜円球	0.5	流紋岩	61	4.0	1.5	0.38	亜円球	0.63	流紋岩
12	5.0	2.0	0.4	角 球	0.6	石英安山岩	62	6.0	2.0	0.33	亜角球	0.67	流紋岩
13	3.5	2.5	0.71	円 球	0.29	片麻岩	63	4.5	2.0	0.44	亜円球	0.56	流紋岩
14	5.5	2.0	0.36	亜円球	0.64	安山岩	64	4.5	1.5	0.33	亜角球	0.67	流紋岩
15	7.0	3.0	0.43	角 球	0.57	安山岩	65	5.0	3.5	0.7	亜角球	0.3	凝灰岩
16	6.0	1.5	0.25	亜円球	0.75	流紋岩	66	5.0	1.5	0.3	亜角球	0.7	凝灰岩
17	6.5	2.0	0.31	亜角球	0.69	流紋岩	67	5.5	2.0	0.36	亜円球	0.64	ヒン岩
18	3.5	2.0	0.57	亜円球	0.43	片麻岩	68	4.5	2.0	0.44	亜角球	0.56	流紋岩
19	6.0	3.0	0.5	角 球	0.5	安山岩	69	3.5	2.0	0.42	円 球	0.43	安山岩
20	5.5	3.0	0.55	円 球	0.45	流紋岩	70	5.5	2.0	0.36	亜角球	0.64	ヒン岩
21	6.0	2.0	0.33	亜角球	0.67	流紋岩	71	5.0	2.5	0.25	亜角球	0.5	流紋岩
22	7.5	3.0	0.4	角 球	0.6	安山岩	72	4.0	2.0	0.38	亜円球	0.5	流紋岩
23	5.5	3.0	0.55	亜円球	0.45	流紋岩	73	3.5	1.5	0.67	角 球	0.57	流紋岩
24	5.5	3.0	0.55	角 球	0.45	片麻岩	74	4.0	3.0	0.46	亜円球	0.25	流紋岩
25	6.5	2.0	0.31	円 球	0.69	凝灰岩	75	5.0	2.0	0.42	亜円球	0.6	流紋岩(風化)
26	5.5	2.7	0.49	亜円球	0.51	安山岩	76	4.0	1.5	0.42	亜角球	0.63	流紋岩
27	6.5	3.5	0.54	亜角球	0.46	流紋岩	77	5.0	1.5	0.5	亜角球	0.7	安山岩
28	4.5	2.0	0.44	角 球	0.56	流紋岩	78	4.0	1.5	0.42	亜円球	0.63	流紋岩
29	4.5	2.0	0.44	亜円球	0.56	流紋岩	79	4.5	3.0	0.42	亜角球	0.33	流紋岩
30	4.0	3.0	0.75	亜角球	0.25	ヒン岩	80	4.0	3.0	0.7	亜円球	0.25	流紋岩
31	4.5	2.0	0.44	亜角球	0.36	流紋岩	81	4.5	2.5	0.3	亜角球	0.44	流紋岩
32	4.0	2.5	0.63	亜円球	0.38	花崗岩	82	4.0	2.0	0.7	円 球	0.5	凝灰岩
33	4.0	2.0	0.5	亜円球	0.5	ヒン岩	83	3.0	1.5	0.43	円 球	0.5	安山岩
34	5.5	3.5	0.64	角 球	0.36	安山岩	84	6.0	2.0	0.29	亜角球	0.67	石英斑岩
35	12.0	2.0	0.17	亜角球	0.83	溶結凝灰岩	85	3.5	2.5	0.56	角 球	0.29	花崗岩
36	8.0	2.0	0.25	亜角球	0.75	ヒン岩	86	4.5	2.0	0.43	亜角球	0.56	片麻岩
37	7.0	2.5	0.36	角 球	0.64	流紋岩	87	6.0	3.0	0.17	亜角球	0.5	集塊岩
38	6.0	4.0	0.67	亜角球	0.33	流紋岩	88	4.0	2.0	0.45	角 球	0.5	砂 岩
39	3.5	1.5	0.43	円 球	0.57	片麻岩	89	3.5	2.0	0.38	角 球	0.43	片麻岩
40	7.0	4.0	0.57	亜角球	0.43	流紋岩	90	4.5	2.5	0.28	亜円球	0.44	流紋岩
41	8.5	2.0	0.24	亜角球	0.76	流紋岩	91	3.0	1.2	0.44	角 球	0.6	流紋岩
42	7.0	3.5	0.5	亜円球	0.5	角 球凝灰岩	92	4.0	2.0	0.38	亜角球	0.5	流紋岩
43	6.0	2.5	0.42	亜円球	0.58	安山岩	93	4.0	2.5	0.44	亜円球	0.38	集塊岩
44	6.5	3.0	0.46	角 球	0.54	ヒン岩	94	4.5	2.0	0.67	亜角球	0.56	流紋岩
45	6.0	2.5	0.42	亜円球	0.58	ヒン岩	95	3.5	1.5	0.57	亜円球	0.57	集塊岩
46	5.5	3.5	0.64	円 球	0.36	流紋岩	96	5.0	2.5	0.24	亜角球	0.5	流紋岩
47	5.0	3.5	0.7	角 球	0.3	凝灰岩	97	3.5	2.0	0.5	亜角球	0.43	凝灰岩
48	5.5	2.5	0.45	亜円球	0.55	流紋岩	98	3.0	2.0	0.33	円 球	0.33	流紋岩
49	6.0	2.5	0.42	亜円球	0.58	凝灰岩	99	4.0	1.5	0.33	亜円球	0.63	砂 岩
50	3.5	1.0	0.29	亜角球	0.71	砂 岩	100	6.0	2.5	0.44	亜円球	0.58	集塊岩

*長径・短径の単位：cm。 短/長：短径/長径、 偏平率：(長径-短径)/長径

第4表 麻生谷新生園遺跡村田地区、遺跡南西部疊積測定表

VI 結語

1. 検出遺構と出土遺物

検出遺構

検出遺構は道路址とこれに間連すると判断した溝である。道路址は石敷きの路面として検出された。これは最終段階のもので、第2・3期の道路址と表現してきた。この石敷き面を除去したところ、道路址の側溝になると思われる溝が検出されたので、古い段階の道路址に伴うものと判断した。第1期の道路址と表現してきたものである。これらのはものは、土層や出土遺物などより、古代・奈良～平安時代のものとしてきたところである。

第1期の道路址は、側溝をもつ道路で北東方、すなわち二上山や越中国府方面へ延びているものである。側溝は南東側、すなわち都を背にして右側のみの検出である。北西側は調査地区外になるためか、検出されていない。そして側溝より調査範囲までは6.5mあり、さらに北西側へ拡がっている可能性があることより、幅6.5m以上で北東方向へ延びている道路址と推定した。

第2・3期の道路址は、側溝やその他の溝を覆う形で検出された。幅約4.5mではば北東方向に延びているが、側溝等をもたないため、路肩を明確に押さえることができない。石敷きの主要面は、北東方向から東北東方向へ蛇行する。一方北東方向へ直線的に延びる路面も指摘できる。この路面の直上の出土遺物により、平安時代のものと判断した。

出土遺物

出土遺物の内、主要なものである土器類については、以下のように時期区分できるものである。

1. 弥生時代末～古墳時代初め

土師器：壺1109

2. 古墳時代後期、特に6世紀後半ごろ

土師器：高杯1101、掩1102、壺1110～1115

須恵器：杯身1116～1118、杯蓋1119・1120、壺1130

3. 奈良時代後期～平安時代前期、特に8世紀後葉～9世紀

土師器：壺1103～1105

須恵器：杯1121～1126、杯蓋1127・1128、壺1129

4. 平安時代中・後期、特に10～11世紀

土師器：壺1106・1107

5. 中世

土師器：壺1108

珠洲：壺1131

上記の内で、1と2のものが、道路構築以前のものであり、4と5が道路廃絶以後の遺物である。そして3としたものが道筋にかかる時期のものとした。側溝としたSD01から須恵器の杯1122・1123が出土しており、第2・3期の道路址はこれより新しいものであり、第1期の道路址もこれより大きくならぬものと推定される。

立地

当「麻生谷新生園遺跡」は、開析谷とその出入り口部に拡がる遺跡である。当調査地区付近は出入り口部に当たり、青灰色粘土の基盤層の上に土砂が堆積し、その上に水田が営まれ今日に至っている地区である。基盤層の上の堆積土は複雑であり、地点ごとに異なった様相を示している。これらの土層の間には遺物が含まれており、いわゆる遺物包含層となっている。土器類から伺える、主要な時期は、古墳時代後期・奈良時代～平安時代前期・中世である。これ以外にも、弥生時代末～古墳時代前期・平安時代中期～後期・近世の上器類等も出土している。奈良時代以前に限っても、古墳時代後期を中心に土砂が堆積しており、このような所に道路が構築されたわけである。路面の直下より、古墳時代後期の遺物が出土していることより、道路の構築時期の上限をおさえることができると言える。

道路址の時期

道路址の時期については、第1期が奈良時代頃で、平安時代前期には溝が埋められ（埋まり）廃絶されたとしてよいであろう。第2・3期については、平安時代前期ごろのものとしてよいであろう。

2. 周辺の調査地区

県道工事に伴う麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡の調査

県道の「主要地方道小矢部伏木港線」道路改良工事に伴う、麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡の発掘調査は、試掘調査も含め平成4年度～7年度の4箇年実施した。ルートは今回の麻生谷新生園遺跡村出地区の西側を北東方向に走り、カーブして向きを東西方向に変えるもので、その後再びカーブして北東方向に走り、伏木方向へ向かうものである。

今回道路址とした遺構を北東方向に延伸すると、県道がカーブし東西に向かう当たりと交差する。この部分については、当時使用していた道路があり、試掘調査が十分に行えなかった所であること、谷部となり出土遺物もほとんどなく、ここより東側に拡がっている麻生谷遺跡の西端に当ると考えた所である。このため、道路址との観点からの調査を行っておらず、この部分の道路址としての状態は不明である。

今回の調査地区の西側に接して、県道地区の調査地区がある。調査対象地の端部限界まで発掘調査をしたわけではないので、幅十数mの道路址では、今回調査地区的範囲外であった。この道路址の北西部は、位置的にみて県道地区的調査で検出できなかったことになる。

麻生谷遺跡の県道地区的調査では、平安時代前期頃を中心とした、井戸址・掘立柱建物址・構造等が検出された。掘立柱建物の主軸方向と主軸に直交する方向は、概ねN-25度-Wを示すものである。この方向性、計画性をもつ建物群であるが、このようにする規制や計画性、方向付けがあったと推定されるものである。一方、今回の道路址の第1・2期としたものは、北東～南西方向を向き該当しないが、第3期としたものは東北東方向に延びており、これと何らか関連したものと見える。

石堤長光寺遺跡

今回の調査地区的西側約600mの所に、石堤長光寺遺跡がある。山丘の迫る狭隘な谷間に立地している。平成7年度に実施した発掘調査では、調査面積に比べて多量の奈良・平安時代の上器が出土した。また墨書き上器や骨蔵器の蓋と推定されるもの、土馬が出土した。一般集落跡とするには異質な内容であり、注目される遺跡である。

3. 古代北陸道

小矢部川左岸の道路

小矢部川左岸の歴史の道については、現在2つのものが知られている。「氷見往来」と「山根道」である。原型は相当量失われてしまったが、一定程度現在でも辿ることのできる道である。

「氷見往来」は近世加賀藩の中心都市金沢と漁業の中心地たる氷見とを結ぶものである。小矢部川左岸の南西部に位置する石動町（現在の小矢部市）から北東方向へ進み、守山で向きを北西方向に変え、海老坂峠を越えて氷見方面へ向うものである。小矢部川右岸の北陸街道本街道に対する脇街道の役目としては、守山より向きを南東方向に変え、小矢部川を渡り、高岡町（現在の高岡市街地）へ至るものである。この「氷見往来」は山麓部を通る「山根道」に対して、治水工事が進んだ近世に入ってから作られたものとされている。

これ以前の古代～近世の主要なルートとして、「山根道」がある。これら2つの道は、石動町より北側へ向い了撫川を渡る。山寄りに進むものと平野部寄りに進むものとの2つのルートがあるが、山麓に達して1つになり、山麓沿いに進んだ後、福岡町下田で2つに分かれる。そのまま山麓沿いを進むのが「山根道」であり、平野部へ向うのが「氷見往来」である。高岡市の石堤地域、国吉地域ではこのまま分かれて進み、守山地域に入り再び1つになり山麓沿いを進んで行くようである。守山へ達し、北西へ曲がれば氷見方面へ、南東へ曲がれば高岡町方面へ向う。直進すれば上山南麓を通り高岡市伏木にある越中国府方面へ達するものである。

道筋と駅家

「延喜式」によれば、越中国には坂本、川人、日理、白城、磐瀬、水橋、布勢、佐味の8駅があり、駅馬が置かれ、砺波、射水、婦負、新川の4郡に伝馬が置かれたとされている。「延喜式」の駅路については、加賀と越中との国境を越えた後、小矢部川左岸、小矢部川とその西側の丘陵との間に狭隘な平野部を北東方向へ進み、高岡市伏木にある越中国府方面へ延びていたとされている。

坂本駅の有力な比定地は小矢部市堺沼で、付近には砺波郡衙の所在も推定されている。日理駅については、越中国府に隣接する伏木地内とする説と、これより南西側の二上地区に比定する説がある。この両方の駅の間に位置する川人駅については、高岡市の石堤地内から、西側の福岡町赤丸地内に比定されている。

「延喜式」については、その纏纂の時期から、9世紀後半～10世紀初めごろの実態を伝えていても、これより遡る奈良時代頃については、これから直接読み取ることはできないとされている。このことから、奈良時代の北陸道の道筋についても、平安時代と同様に小矢部川左岸を通っていた可能性があるものの、これとは別の道筋の可能性も指摘されている。

川人駅周辺

川人駅の比定地付近における遺跡としては、高岡市の「麻生谷新牛園遺跡」とこれの東側一帯に拡がっている「麻生谷遺跡」が所在している。また山側へ入った谷部には「石堤長光寺遺跡」がある。麻生谷遺跡については、奈良～平安時代の掘立柱建物址や井戸址が検出されている。井戸址は9世紀と推定されるが、出土した須恵器杯のなかに「人長」と墨書きされた土器がある。木下良氏はこれについて「川人の駅長」を示すものである可能性を指摘された。

駅舎の中核的施設が検出されているわけではないが、これらの遺跡は駅舎と関連付けてもよい内容をもつていると思える。

4. 道路址

道路址の変遷

検出された道路面については、大きく上層と下層とに分けて述べてきた。微細に見れば3時期の可能性を指摘することができる。

第1期 個溝を伴う直線道

第2期 個溝が埋まつた後の石敷きの直線道

第3期 石敷きの蛇行道

検出された状態は、道路としての最終段階のものである。石敷きの主要面は、北東方向から東北東方面へと向きを変えている（蛇行）状態であり、素直に見れば直線道とは言い難い。しかし、調査地区南西部の石敷きの主要面から、調査地区北東部の右敷き粗略面への流れも指摘できる。この部分は硬化面で直線的なものとなっている。石敷きで蛇行する道の前段階に、個溝は持たないがある程度石が敷かれた直線道の段階を想定したい。この前が個溝を持つ段階である。

山根道と古代官道

「山根道」ないしこれに匹敵するルートが律令期ないしこれ以前から存在し、多少の変更はあったとしても現在まで続いてきた蓋然性が高い。ただし、現在「山根道」とされているものがそのまま古代官道としての北陸道とするには疑問点もある。近年の研究成果では、古代官道の計画性や直線性が指摘されている。そこで現在の蛇行した「山根道」は古代官道の変化したものと捉え、古代官道としては計画的な直線道を想定したい。

今回検出し、時期区分した道路址について、第1・2期としたものを、8～9世紀頃の古代官道とし、第3期の蛇行し始める段階を、9世紀以降に変質し始めた古代官道と捉えたい。これと現在も残っている「山根道」とを今すぐに結び付けるわけにはいかないが、蛇行し始め山根道的になりつつあったとも言えよう。

道路址の性格

第1・2期とした道路址について、駅路とするか、伝馬路・伝路とするかは明確にはできないが、南西側の砺波郡衙と北東側の越中国府（付近に射水郡衙を想定する考え方もある）とを結ぶルート上にあり、古代官道であった可能性が高いと言える。

2. 東木津遺跡、丹羽地区

東木津遺跡丹羽地区、目次

I 序 説	25	III 遺 物	32
II 遺 構	27	1. 土器類	32
1. 土坑	27	2. その他の遺物	33
2. 溝	28	IV 結 語	34



第14図 東木津遺跡位置図 (1 / 5万)

I 序 説

遺跡概観

当「東木津遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の南西約3kmに位置する。泉ヶ丘畠地の北側一帯であり、東側約500mには国道156号線が、西側約500mにはJR北陸本線が、北北東～南南西方向に走っている。遺跡は、東側の千保川と西側の和田川に挟まれた標高11～12mの微高地に立地している。この付近は往古の庄川が形成した扇状地の末瀬部にある。

遺跡の範囲は南北250m×東西600mを計り、南側は下佐野遺跡に繋がって行く。また北西側には木津神社遺跡がある他、西木津遺跡、泉ヶ丘遺跡、諏訪遺跡等もあり、これらと共に千保川と和田川の間の微高地に位置する遺跡群を形作っている。これらの遺跡群は、弥生時代後期に始まり、古墳時代、奈良・平安時代を経て中世に至る遺跡である。東木津遺跡は、これまで、奈良時代～平安時代中期を中心とする遺跡として、早くから知られていた遺跡である。近年実施した分布調査により、その範囲が広まり、南側は下佐野遺跡と接するものとなり、東西や北側へも拡大した。



第15図 東木津遺跡丹羽地区位置図 (1/5,000)

調査に至る経緯

平成9年4月15日に、当該地の北東側に接する「東木津遺跡、山口地区」の試掘調査を実施した。これは、農地を転用して小売り店舗を建設する工事計画の事前調査として実施したものである。この調査では溝が2条検査され、奈良・平安時代の遺物が出土した。工事に先立って本調査を要する内容であった。その後工事計画が修正され、この山口地区の部分は小売り店舗の駐車場用地となり、隣接する当該地に店舗本体を建設することになった。そこで、施主の丹羽正文氏と協議して、試掘調査を省略して直ちに本調査を実施することになった。

調査経過

発掘調査は、平成9年8月18日から同年10月23日まで実施した。実働調査日数は39日である。表土除去はバックフォーで行い、隣接する山口地区へ仮置きした。現代の暗渠排水溝や近・現代の溝（SD02）を先に掘り、その後、古代の遺物包含層を精査しながら、古代の遺構を検出し掘り下げを行った。表土の下は、調査地区の南側を中心に黒褐色の遺物包含層が堆積していた。深い所では約80cmを計るものであった。隣接地の試掘調査の結果から予想した以上の遺構や遺物があり、調査期間も予定より延びた。遺構図については、3種類のものを掲載した。複雑ではあるが全体の遺構を示したもの（第16図）。他の遺構を切っている比較的新しい遺構を中心とした図、正確な表現ではないが、これは上層遺構図（第17図）とした。そして完掘状態の全体図（第18図）である。調査対象面積は456m²で、338m²の発掘を実施した。

検出遺構

検出遺構は、土坑1基と溝16条である。土坑はSK01とした。溝は、同じく東木津遺跡に属する昭和61年度の調査で溝が1条検出されているので、今回のこの溝はSD02～17とした。

出土遺物

出土遺物は以下のとおりである。

土器・陶磁器類：弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、越中漁戸、唐津

土製品：土錘

銅製品：青銅鏡（漢式鏡）

石製品：砥石

グリッド

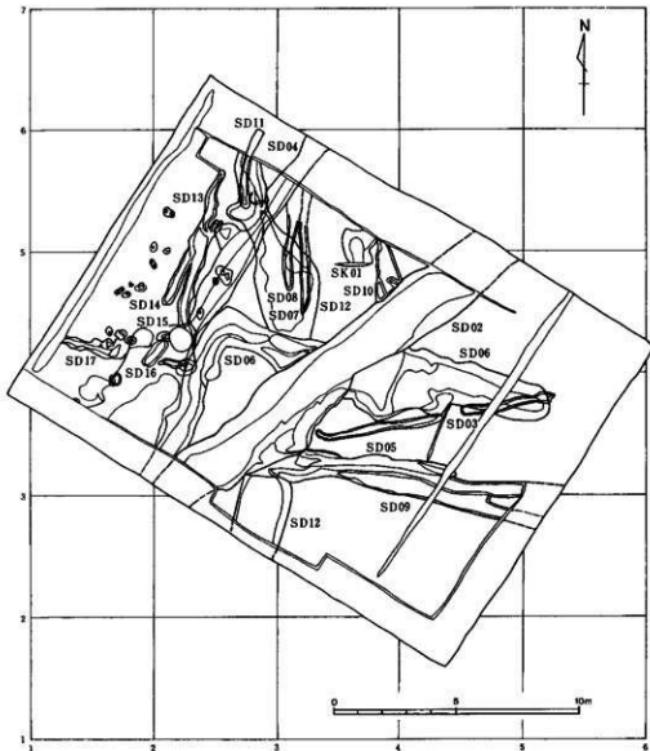
調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯35°00'00"、東経137°10'00"）に合わせた。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ15.390km、北へ80.255kmの位置である。遺構図のマッシュは5m四方である。

II 遺構

1. 土坑

土坑SK01

測査地区の北側（3、4・5）区で検出された。平面形は不正橿円形である。規模は長軸1.40m、短軸1.30m、深さ49cmを計る。出土遺物は、土師器、須恵器である。図示した土器類は、図面7-2181、2193、図面8-2217、図面11-2264である。

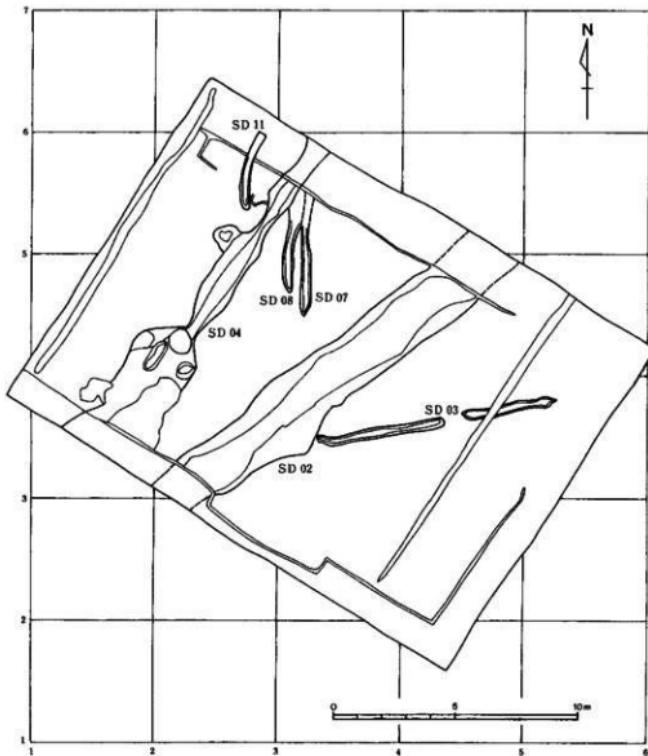


第16図 東木津遺跡丹羽地区全体図 (1/200)

2. 溝

溝 SD 02

調査地区の中央部で検出された。北東～南西に走る溝である。規模は幅190～310cm、深さ59cmを計る。13.00mに亘り検出され、北東側、南西側とも調査地区外へ延びている。SD 05. 06. 10. 12を切っている。出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲、近世・近代陶磁器である。図示した土器類は、図面4-2104、2122、図面5-2133、図面6-2146、2157、2159、図面7-2167の一部、2175、2194、図面8-2197の一部、2210、2213、図面9-2228、2236、2240、2244、2247、図面10-2272、図面11-2258、2263、2278、2281である。



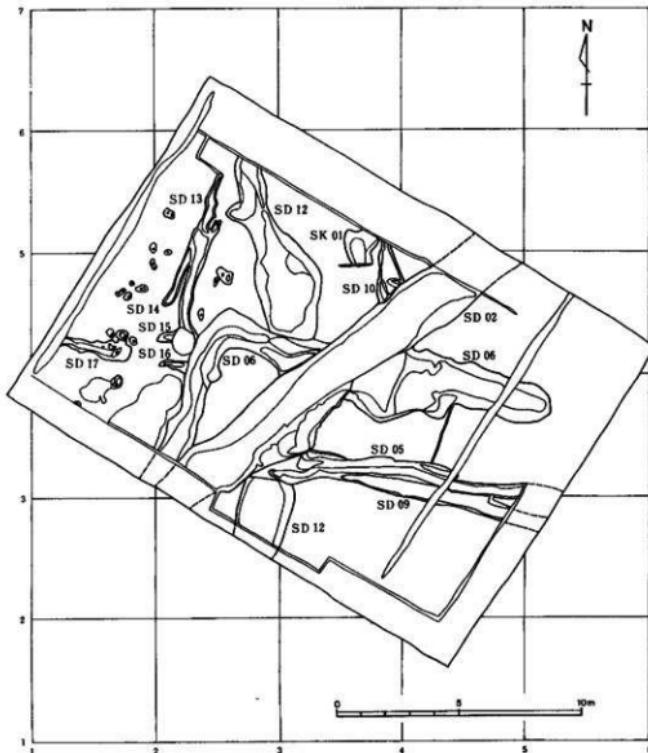
第17図 東木津遺跡丹羽地区上層造構図 (1/200)

溝SD03

調査地区の東側で検出された。北東～南西に走る溝である。規模は幅20～50cm、深さ21cmを計る。この溝の中程で一旦途切れるが一つの溝とした。14.00mに亘り検出された。出土遺物は、上飾器、須恵器である。図示した土器類は、図面8-2203である。

溝SD04

調査地区の北西側で検出された。北東～南西に走る溝である。規模は幅50～250cm、深さ24cmを計る。14.00mに亘り検出され、北東側、南西側とともに調査地区外へ延びている。南端部は擾乱に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器、土鍤である。図示した土器類は、図面4-2102、2105、2110、2123、図面5-2126、図面7-2168、2186、2189、2196、図面8-2211、2212、2214、2216、図面9-2232、2234、2239、



第18図 東木津遺跡丹羽地区発掘状態遺構図 (1/200)

2251、2256、図面10-2270、2271、図面11-2260、2274、2275、2280、2282である。土鍤は図面12-2302である。

溝 S D 05

調査地区的南側で検出された。東西に走る溝である。規模は幅50~110cm以上、深さ71cmを計る。11.30mに亘り検出され、東側は調査地区外へ延びている。西側はS D 02に切られている。S D 09、12を切っている。出土遺物は、土師器、須恵器、土鍤である。図示した土器類は、図面5-2124、図面6-2142、2164、図面7-2176、図面8-2205、2206である。土鍤は図面12-2301である。

溝 S D 06

調査地区的中央部で検出された。東西方向から、南北方向へ屈曲する溝である。規模は幅100~270cm、深さ52cmを計る。東西に14.30m、南北に6.50mに亘り検出され、南側は調査地区外へ延びている。中央部と南端部はS D 02に切られている。S D 12、16を切っている。出土遺物は、土師器、須恵器、青銅鏡（漢式鏡）である。図示した土器類は、図面4-2116、2120、図面6-2145、2153、図面7-2167の一部、図面8-2197の一部と、2204、2223、図面9-2225である。青銅鏡は図面12-2303である。

溝 S D 07

調査地区的中央北寄りで検出された。南北に走る溝である。規模は幅約30cm、深さ10cmを計る。3.90mに亘り検出された。北側は明確ではない。S D 08と平行している。出土遺物は、土師器、須恵器である。図示した土器類は、図面4-2113の一部である。

溝 S D 08

調査地区的中央北寄りで検出された。南北に走る溝である。規模は幅40~60cm、深さ14cmを計る。3.10mに亘り検出された。北側は明確ではない。S D 07と平行している。出土遺物は、土師器、須恵器である。図示した土器類は、図面4-2113の一部、図面9-2253である。

溝 S D 09

調査地区的南側で検出された。東西に走る溝である。規模は幅85cm以上、深さ33cmを計る。7.00m以上に亘り検出され、東側は調査地区外へ延びている。西側はS D 05に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

溝 S D 10

調査地区的中央北寄りで検出された。南北に走る溝である。規模は幅40~110cm、深さ35cmを計る。2.60mに亘り検出された。北側は調査地区外へ延びている。南側はS D 02に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

溝 S D 11

調査地区的北西側で検出された。南北に走る溝である。規模は幅40cm、深さ38cmを計る。3.30mに亘り検出された。やや湾曲している。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

溝 S D 12

調査地区的中央西寄りを南北に走る溝である。規模は幅100~260cm、深さ50cmを計る。15.70mに亘り検出された。北側、南側とともに調査地区外となる。この溝の中央部は、S D 02、05、06に切られ、分断された形となっている。出土遺物は、土師器、須恵器である。図示した土器類は、図面6-2147である。

溝 S D 13

調査地区の北西側で検出された。南北に走る溝である。規模は幅30~80cm、深さ24cmを計る。6.60mに亘り検出された。やや湾曲している。S D14を切っている。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

溝 S D14

調査地区の北西側で検出された。北北東~南南西に走る溝である。規模は幅約40cm、深さ11cmを計る。2.60mに亘り検出された。S D13に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

溝 S D15

調査地区の西側で検出された。東西に走る小さな溝である。規模は幅約40cm、深さ9cmを計る。0.80mに亘り検出された。東側は擾乱に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

溝 S D16

調査地区の西側で検出された。東西に走る小さな溝である。規模は幅約30cm、深さ15cmを計る。1.20mに亘り検出された。東側はS D06に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

溝 S D17

調査地区の西側で検出された。東西に走る溝である。規模は幅40~80cm、深さ27cmを計る。2.70mに亘り検出された。西側は擾乱に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。小破片のみで図示できるものは出土していない。

III 遺 物

1. 土器類

弥生土器

壺 図面4-2101~2104。2101は複合口縁の壺の口縁部である。丹塗りされている。2102は壺の胴部で、凹線文が巡る。2103は網彫壺である。口縁部は欠損している。2104は無彫壺の口縁部である。

土師器

杯 図面4-2105。全体の形態が判る唯一のものである。体下部から底部にかけてはヘラ削りされている。底面には糸切りの痕跡が付く。

杯口縁部 図面4-2106~2109。2106は内面が黒色化されている。2107の内面はヘラ磨きされている。

杯体・底部 図面4-2110~2121。2110は内面が黒色化され、外側は丹塗りされている。2111は外側がヘラ削りされている。2112~2121の底部は糸切りである。

椀 図面4-2122。高台付きの底部片である。

皿 図面4-2123。皿と思われる小破片である。

壺口縁部 図面5-2124~2133。2124~2128は比較的大きい壺の口縁部である。2124は外傾する端面を形成している。2125~2128の口端部は巻込むように終わっている。2129~2133は小型の壺の口縁部である。2129の口端部は上方へつまみ上げたようになっている。2130~2133の口縁部は内窪しながら屈曲している。

壺底部 図面5-2134~2136。小型の壺の底部である。外側はヘラ削りしている。

鍋 図面5-2137~2139。大型の口縁部片であり、鍋の口縁部とした。外反気味に延びた口縁部から、口端部は丸くなっている。

須恵器

杯A 図面6-2140~2155。高台の付かない杯の内、全体の形態が判るものである。口径は10.8~13.7cmを計る。底部はヘラ切りである。

杯A底部 図面6-2156~2166、図面7-2167~2187。高台の付かない杯の体下・底部である。底部はヘラ切りである。

杯B a 図面7-2188~2189。高台付杯で全体の形態がほぼ判るもの内、大型で器高が深いものである。口縁・体部は外上方へ直線的に延びる。高台部は下方へ付く。

杯B b 図面7-2190~2196。高台付杯で全体の形態がほぼ判るもの内、小型で器高が深いものである。口径は12.2~10.0cmを計る。口縁・体部は直線的に延びるものとやや内弯するものとがある。高台部も外下方へやや踏ん張るものと、下方へ延びるものとがある。

杯B c 図面8-2197~2199。高台付杯で全体の形態がほぼ判るもの内、中型で器高が浅いものである。2197は口径が14.5cmを計り、高台部は外方へ踏ん張る。2198は口径が14.0cmを計り、高台部は下方に小さく付く。2199は口径が13.2cmとやや小型のものである。高台部はやや外方へ踏ん張る。

杯B底部 図面8-2200~2224。高台付杯の体下・底部片である。高台部はやや外方へ踏ん張るものと、下方へ短く延びるものとがある。

杯口縁部 図面9-2225~2228。杯の口縁部片である。

杯B蓋 図面9-2229・2230。高台付杯と組み合う蓋の内、全体の形態が判るもの。両者とも口端部は丸くなる。つまみは宝珠形にならず退化したものである。口径は11.6cmと11.4cmである。

杯B蓋口縁部 図面9-2231-2247。高台付杯と組み合う蓋の口縁部片である。2231-2238の口端部は下方へ短く折れ曲がる。2239-2247の口端部は丸くなっている。

杯B蓋つまみ部 図面9-2248-2252。高台付杯と組み合う蓋のつまみ・天井部片である。つまみ部は宝珠形をやや残しながらも偏平なものとなっている。

杯B蓋天井部 図面9-2253-2257。高台付杯と組み合う蓋の天井部片である。

小型壺 図面11-2258・2259。高台付きの小型壺である。

双耳瓶 図面11-2260。双耳瓶ないしはこの類似品の耳部である。

壺底部 図面11-2261-2264。壺瓶類の底部である。2261・2262は外下方へ延びるしっかりした高台が付く。2263は小さな高台が外縁に付く。2264には高台が付かない。

壺口縁部 図面10-2265-2271。壺の口縁部で、外反して外上方へ延びる。2265・2267には波状文が付く。

壺頸部 図面10-2272・2273。壺の頸部。

珠洲

鉢口縁部 図面11-2274-2276。擂鉢の口縁部片である。2274は片口部である。

鉢底部 図面11-2277・2278。擂鉢の底部片である。オロシ目が確認できる。

越中瀬戸

椀 図面11-2279-2281。椀の底・高台部片である。

唐津

椀 図面11-2282。椀の底・高台部片である。

2. その他の遺物

土製品

土錘 図面12-2301・2302。土師質で管状の土錘である。

銅製品

青銅鏡 図面12-2303。いわゆる漢式鏡である。文様から珠文鏡と分類されるものである。径7.00cmを計る。2次的にやや折れ曲がっている。

石製品

砥石 図面12-2304・2305。2304はやや大塊の砥石の一部である。2305は小型の砥石である。一部欠損している。両方とも凝灰岩である。

IV 結語

今回の調査は、東木津遺跡の本調査としては、2回目のものである。

東木津遺跡は、奈良・平安時代頃を中心とする遺跡として知られてきたが、今回の調査からも同様なことが言える。

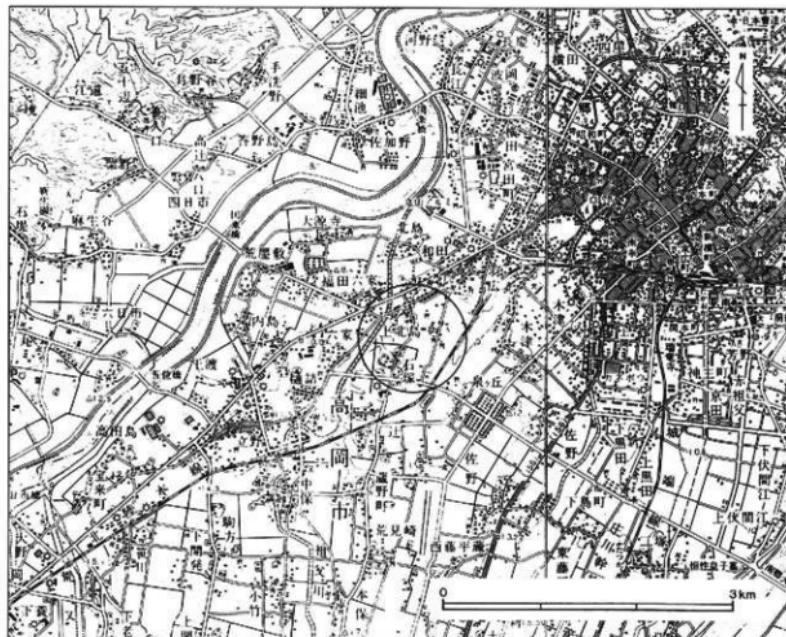
検出された遺構は土坑および溝である。調査地区を分断するように走っている溝S D02が近代のものである以外、奈良・平安時代のものと推定される。出土土器からは8世紀後半から9世紀中頃のものとしてよいであろう。

出土した鏡は、この時代に所属する溝から出土したが、曲がっていることもあり、2次的に堆積したものと判断される。このような鏡は一般には古墳時代後期の古墳から出土することが多い。当遺跡の付近に古墳があり本来そこに所属していた可能性を考えたい。当遺跡や隣接する下佐野遺跡ではこの時代の土器の出土は僅かだが、西側の和田川を挟んだ微高地に立地している石塚遺跡や石名瀬A遺跡からは、5～6世紀の土器がある程度まとめて出土しており、これら一帯に古墳が作られた可能性は否定できない。

3. 石塚遺跡、白石地区

石塚遺跡白石地区、目次

I 序 説	37	III 遺 物	41
II 遺 構	39	1. 土器類	41
1. 井戸址	39	2. その他の遺物	41
2. 土坑	39		
3. 溝	40		
4. 地震址	40	IV 結 語	42



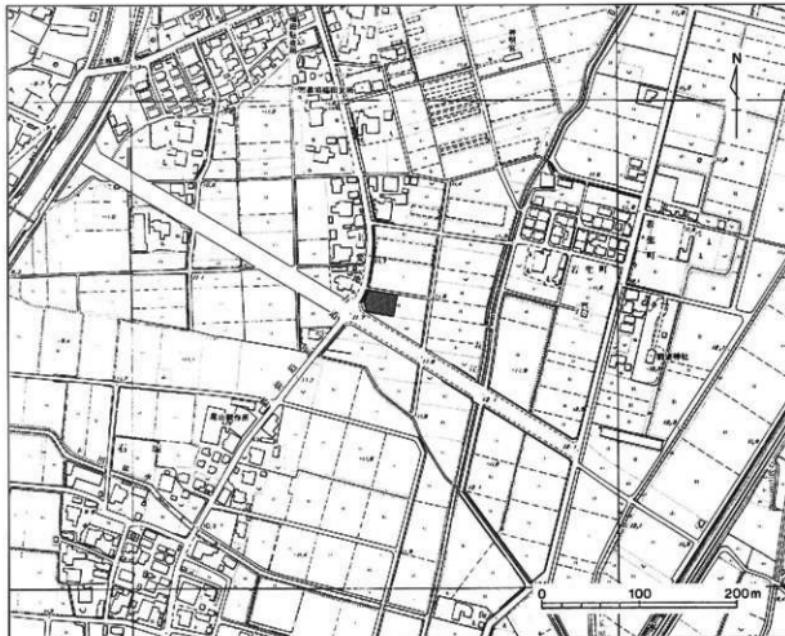
第19図 石塚遺跡位置図（1／5万）

I 序 説

遺跡概観

当「石塚遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の西南西約3.0kmに位置する。遺跡の東端部をJR北陸本線が走っている。東側には和田川が、西側には祖父川がそれぞれ北流している。この両河川に挟まれた標高11~12mの微高地に当遺跡が立地している。この付近は、県西部の大河、庄川が形成した扇状地の末端部に当たる。和田川、祖父川とも、扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

遺跡の範囲は、南北600m×東西470mを計り、当地域では最大規模の遺跡である。周囲には縄文時代後・晩期から中世に至る小規模集落遺跡が数箇所あり、これらに対する中核的集落であったと言えよう。当遺跡では、最近縄文時代後期後葉の包含層も確認され、縄文時代晩期～弥生時代前期は明確でないものの、これ以降、營々と生活や活動がなされたことが判明してきている。特に弥生時代中期の遺構・遺物は上記の遺跡範囲全体に存在しており、県下西部地域において初期農耕文化が初めて定着した集落跡としての評価がなされている。



第20図 石塚遺跡白石地区位置図 (1/5,000)

調査に至る経緯

当地区の開発計画については、仲介の間口不動産の方から照会を受け、計画段階から連絡調整等を行ってきた。当地区的位置は、西北西～東南東へ走る都市計画道路伏間江福田線と北東～南西へ走る主要地方道高岡環状線（IH、一般地方道立野鶴鳥線）の交差点の東北東側である。遺跡範囲の北西端部に当たる。当地区的南東側に接して、平成7年度に発掘調査を実施した「石塚遺跡、老子地区」があり、この地区的状況より当地区にも遺構等が存在している可能性が高いものであった。そこで、地主の竹内幸和氏や施主の白石敏幸氏等と協議をして、試掘調査を省略して直ちに本調査を実施することになった。当初、平成8年度事業として実施することにしていたが、諸般の都合により平成9年度の事業となった。

調査経過

発掘調査は、平成9年9月22日から同年11月13日まで実施した。実働調査日数は19日である。表上に除去はバックフォーで行い、竹内幸和氏の協力を得て当地区に隣接する水田に置いた。9月22日～26日に実施した表上除去後、速やかに手作業による調査を実施する予定であったが、他の調査地区が予定外に手こぎり、調査員や作業員の配置の都合から、10月20日より再開となった。調査対象面積417m²で、377m²の発掘を実施した。

検出遺物

- 井戸址 1基（S E06）
- 土坑 4基（S K144～147）
- 溝 1条（S D55）
- 地震址（噴砂址） 1箇所（S X62）

出土遺物

出土遺物は以下のとおりである。

- 土器・陶磁器類：弥生土器、土師器、須恵器、珠淵、青磁、越中瀬戸
- 石製品：砥石（玉砥石）

グリッド

調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯35°00'00''、東経137°10'00''）に合わせた。X=1、Y=1の地点は、原点より西へ16.260km、北へ81.285kmの位置である。遺構図のメッシュは5m区画である。

II 遺構

1. 井戸址

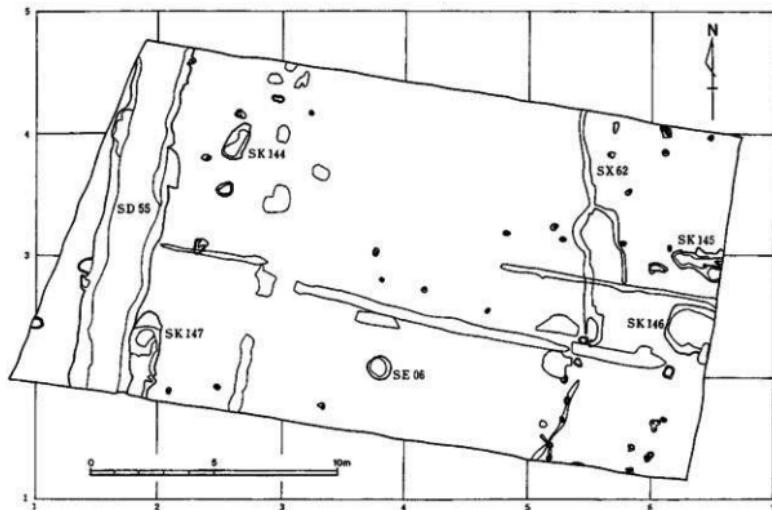
井戸址 SE06

調査地区の中央南側（3、1・2）区で検出された。平面形は円形で、規模は直径95cm、深さ70cmを計る。形態等より、素掘りの井戸址と考えた。出土遺物は、土器器、須恵器である。図示した土器類は、図面13-3107である。

2. 土坑

土坑 SK144

調査地区的北西側（2、3・4）区で検出された。平面形は梢円形で、規模は長軸1.65m、短軸0.80m、深さ5cmを計る。遺物は出土していない。



第21図 石塙遺跡白石地区遺構図 (1/200)

土坑 S K145

調査地区的東側中央（6、2・3）区で検出された。平面形は橢円形で、規模は長軸2.10m以上、短軸1.40m、深さ23cmを計る。東側は調査地区外となる。出土遺物は、土師器、須恵器である。図示した土器類は、図面13-3101である。

土坑 S K146

調査地区的東側中央（6、2）区で検出された。平面形は橢円形で、規模は長軸1.93m以上、短軸1.80m、深さ15cmを計る。東側は調査地区外となる。攪乱に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。図示した土器類は、図面13-3102である。

土坑 S K147

調査地区的南西側（1・2、1・2）区で検出された。平面形は橢円形で、規模は長軸3.50m以上、短軸1.28m以上、深さ38cmを計る。南側は調査地区外となる。S D55に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲、青磁である。

3. 溝

溝 S D55

調査地区的西端部で検出された。南北に走る溝である。規模は幅210~280cm、深さ36cmを計る。14.4mに亘り検出され、北側、南側とも調査地区外へ延びている。S K147を切っている。出土遺物は、弥生上器、土師器、須恵器、珠洲、近世・近代陶磁器である。図示した土器類は、図面13-3101、3105、3106、3109、3122~3128、3130、3133、3135、3136、図面14-3110~3121、3129である。

4. 地震址

地震址 S X62

地震の噴砂現象に伴う砂脈である。南北方向に延びている。ピットや攪乱に切られている。

III 遺 物

1. 土器類

弥生土器

壺 図面13-3101。壺の底部である。磨滅していて整形手法は不明である。

土師器

杯 図面13-3102~3104。口縁部片の3102・3103と底部片の3104である。3104の底面は糸切りである。

壺 図面13-3105。壺の口縁部片。口端部は肥厚している。

須恵器

杯 図面13-3106・3107。口縁部片の3106と底部片の3107である。

壺 図面13-3108。小型の壺の底部片である。

壺 図面13-3109。壺の口縁部片である。波状文が付く。

珠洲

鉢 図面14-3110~3115。3110~3112は口縁部片である。口端部が内傾する3110と外傾する3111・3112がある。3113~3115は底部片である。3113・3114にはオロシ目が確認できる。

壺 図面14-3116・3117。肩部片である。櫛撻文が付く。

壺 図面14-3118~3121・3129、図面13-3122~3128。口縁部片の3118~3121、側部片の3122~3128、底部片の3129である。

越中瀬戸

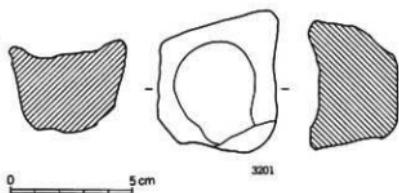
椀 図面13-3130~3135。椀の底部片である。

鉢 図面13-3136。鉢の底部片である。

2. その他の遺物

石製品

砥石 第22図-3201。いわゆる玉砥石の部類に分類できるものと考えられる。



第22図 石塚遺跡白石地区砥石実測図
(1/2)

IV 結 語

今回の調査地区は当石塚遺跡の北西部で、この遺跡の調査で最も北西方の調査地区である。

検出された遺構は、井戸址、土坑、溝であり、これ以外に地震による噴砂の址も検出している。

調査地区の西端部で検出された溝 S D55は、近代の溝であるが、古代・中世の土器類が多く出土している。これ以外の遺構からの上器類の出土は少量であり、遺構の時期の比定については、数少ない土器類以外に、覆土の様相や過去の調査例を参考にしての判断となった。

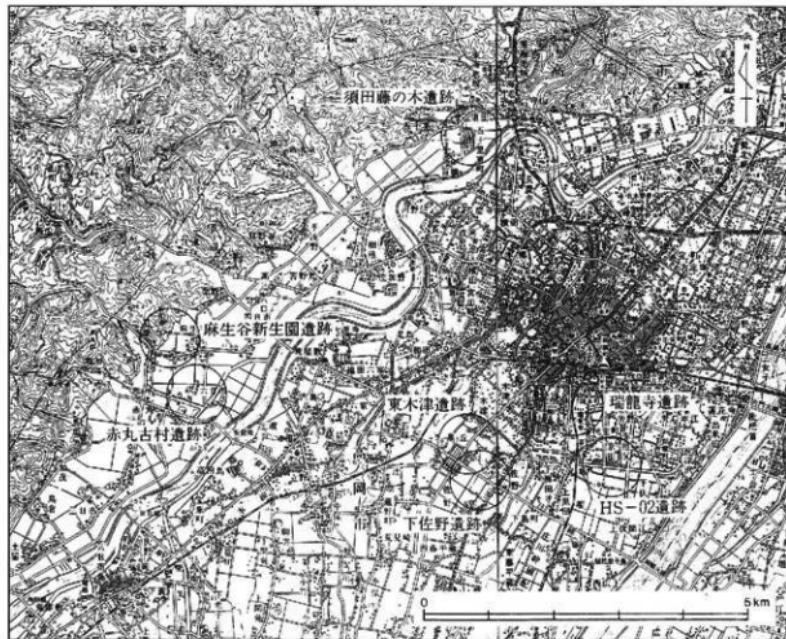
井戸址 S E06と土坑 S K145・146は平安時代と推定される。土坑 S K147は珠洲が出土しており、中世のものである。土坑 S K144は出土遺物がなく明確ではないが、中世のものと考えた。

出土遺物では弥生土器も出土しているが、遺構は検出されていない。当遺跡は弥生時代の遺跡として著名であるが、この付近は弥生遺跡の北西側端部になる可能性がある。

4. 試掘調査地区

試掘調査地区、目次

I 東木津遺跡、山口地区	45
II 麻生谷新生園遺跡、村田地区	46
III 須田藤の木遺跡、背戸地区	47
IV 赤丸古村遺跡、公民館地区	48
V 瑞龍寺遺跡、中西地区	49
VI 下佐野遺跡、新田地区	50
VII HS-02遺跡、各地区	51



第23図 試掘調査地区関係遺跡位置図 (1/7万5千)

I 東木津遺跡、山口地区

遺跡概観

当「東木津遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の南西約3kmに位置する。泉ヶ丘団地の北側一帯であり、東側約500mには国道156号線が、西側約500mにはJR北陸本線が、北北東～南南西方向に走っている。遺跡は、東側の千保川と西側の和田川に挟まれた標高11～12mの微高地に立地している。

基本層序

厚さ約20cmの表土の下は、黄褐色の基盤層である。

調査概要

所在地：高岡市木津1067-1、対象面積：496m²、発掘面積：106m²

調査期間：平成9年4月15日（1日）、調査原因：小売店の建設

調査の結果

溝が2条検出された。出土遺物は、奈良～平安時代の土師器・須恵器である。



第24図 東木津遺跡山口地区位置図 (1/5,000)

II 麻生谷新生園遺跡、村田地区

遺跡概観

当「麻生谷新生園遺跡」は、高岡市街地の西方、隣接する福岡町との境付近に位置する。JR高岡駅の西側約6.5kmの所である。北西側には西山丘陵が迫り、南東側約1.8kmには小矢部川が北東方向に流れている。丘陵谷部には、県立の養護施設である「新生園」が所在するが、この谷部と南東側一帯が当遺跡である。

基本層序

表土が約20cm、第2層が区画整理時の盛り土で、その下が弥生時代末から中世の遺物包含層である。

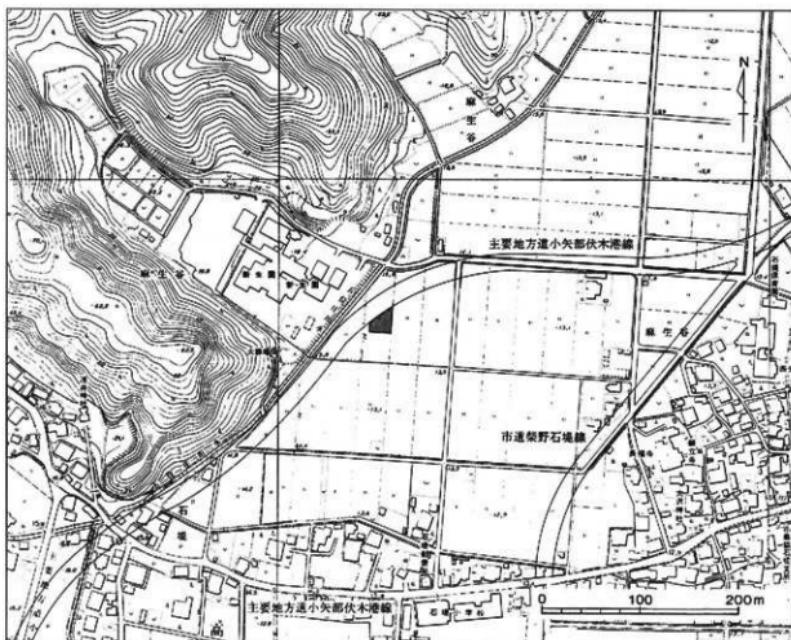
調査概要

所在地：高岡市麻生谷414-4、 対象面積：499m²、 発掘面積：35m²

調査期間：平成9年4月16日（1日）、 調査原因：個人住宅の建設

調査結果

遺物の包含層が検出された。出土遺物は、土師器、須恵器である。



第25図 麻生谷新生園遺跡村田地区位置図 (1/5,000)

III 須田藤の木遺跡、背戸地区

遺跡概観

当「須田藤の木遺跡」は、高岡市街地の北西郊、約3.4kmに位置する。遺跡の南側を北西方向に小矢部川が流れ、蛇行しながら富山湾に注ぐ。北西約6.5kmには二上山があり、それに続く西山丘陵下に位置する自然堤防上に当たる。小矢部川の氾濫原に囲まれる標高約8mの微高地に立地している。

基本層序

厚さ約20cmの表土の下は、厚さ約30cmの区画整理時の盛り土である。その下が基盤層となる。

調査概要

所在地：高岡市五十里1924-2他、 対象面積：500m²、 発掘面積：39m²

調査期間：平成9年4月17日～18日（2日）、 調査原因：個人住宅の建設

調査結果

遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。



第26図 須田藤の木遺跡背戸地区位置図（1/5,000）

IV 赤丸古村遺跡、公民館地区

遺跡概観

当「赤丸古村遺跡」は、高岡市街地の西郊、JR高岡駅の西約6kmに位置する。高岡市の石堤地内の六市集落から、谷内川を挟んで西側に隣接する福岡町の赤丸地内の古村集落にかけての遺跡である。古代～近世の遺跡で縄文時代についても可能性が指摘されている。

基本層序

厚さ約20cmの表土の下は、黄褐色の基盤層である。

調査概要

所在地：高岡市石堤157、対象面積：318m²、発掘面積：59m²

調査期間：平成9年5月12～13日（2日）、調査原因：公民館建設

調査結果

遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。



第27図 赤丸古村遺跡公民館地区位置図 (1/5,000)

V 瑞龍寺遺跡、中西地区

遺跡概観

当「瑞龍寺遺跡」は、高岡市街地の南西約0.9kmに位置する。遺跡の西端を南北にJ R城端線が走る。遺跡の西方には千保川が、東方には庄川が北流している。北側約1.8kmには高岡城が立地している、標高15mを計る高岡台地がある。当遺跡は高岡市関本町にある近世寺院の瑞龍寺とその周辺である。

基本層序

約1mにわたり、後世の掘削等を受け、擾乱されていた。その下は青灰色の粘土となっている。

調査概要

所在地：高岡市上関町519-3他、 対象面積：160m²、 発掘面積：30m²

調査期間：平成9年11月13～14日（2日）、 調査原因：個人住宅の建設

調査結果

遺構は検出されず、出土遺物もなかった。



第28図 瑞龍寺遺跡中西地区位置図（1/5,000）

VII 下佐野遺跡、新田地区

遺跡概観

当「下佐野遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の南西約2.5kmに位置する。当遺跡の立地する所は、高岡市の東側を北流して富山湾に注いでいる庄川が形成した扇状地の前面に当たり、東側の千保川と西側の和田川に挟まれた標高11~12mの微高地である。

基本層序

厚さ約20cmの表土の下は、青灰白色粘土の基盤層である。

調査概要

所在地：高岡市佐野626-2、 対象面積：499m²、 発掘面積：20m²

調査期間：平成9年12月11~12日（2日）、 調査原因：個人住宅の建設

調査結果

土坑、溝が検出された。出土遺物は土師器、須恵器である。時代的には奈良・平安時代である。



第29図 下佐野遺跡新田地区位置図 (1/5,000)

VII HS-02遺跡、各地区

遺跡概観

当「HS-02遺跡」はJR高岡駅の南側約1.5kmに位置する。西側に千保川、東側に庄川が北東方向に流れ、この2つの河川に挟まれた沖積低地に立地する。この遺跡は弥生時代から近世にまたがる遺物散布地である。周囲には、北東側に前田墓所遺跡、北側に八丁道遺跡、北西側に瑞龍寺遺跡が所在している。

基本層序

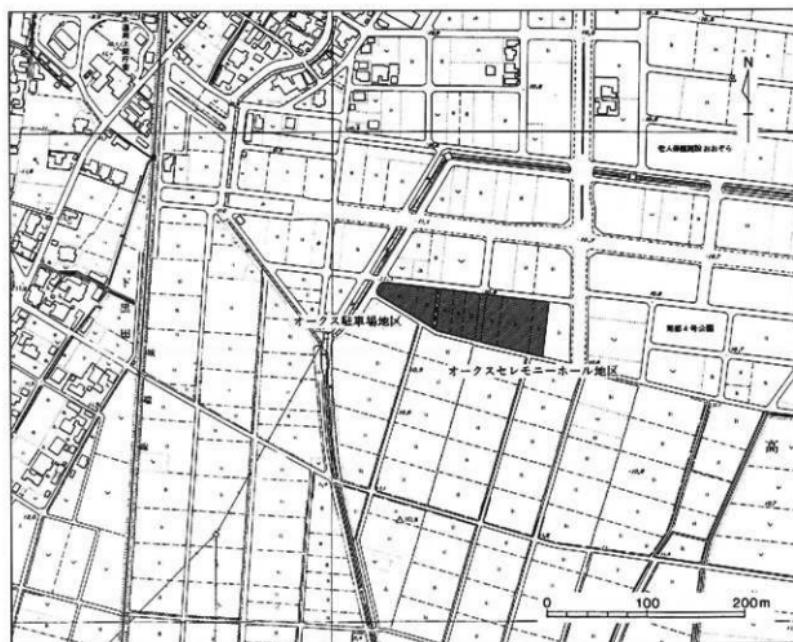
表土15~20cmの下に、腐食物を多く含む厚さ20~40cmの黒色粘質土層があり、さらに腐食物を含む厚さ30~50cmの青灰色ないし暗灰色の粘質土層が現れる。その下に黄褐色粘質土層、青灰色砂礫層の堆山が現れる。

各調査地区的概要

1. オークスセレモニーホール地区

所在地：高岡市京田656他、 対象面積：5,446m²、 発掘面積：382m²

調査期間：平成9年4月21~23日（3日）、 調査原因：セレモニーホールの建設



第30図 HS-02遺跡調査地区位置図 [1] (1/5,000)

2. アルビス地区

所在地：高岡市赤祖父671他、 対象面積：5,869m²、 発掘面積：345m²

調査期間：平成9年5月27～30日（4日）、 調査原因：スーパーマーケットの建設

3. 林地区

所在地：高岡市赤祖父757他、 対象面積：1,553m²、 発掘面積：122m²

調査期間：平成9年10月16～17日（2日）、 調査原因：貸店舗の建設

4. オークス駐車場地区

所在地：高岡市京田654他、 対象面積：1,720m²、 発掘面積：140m²

調査期間：平成9年12月15日（1日）、 調査原因：駐車場の建設

調査結果

遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。



第31図 HS-02遺跡調査地区位置図〔2〕(1/5,000)

参考文献

- 青木一彦他 1996 「射水平野の遺跡－古代の北陸道を探る－」 『大境』第18号 富山考古学会
- 伊藤隆二 1992 「小矢部市内で発掘された古代道」 『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 伊藤隆三 1994 「小矢部市発掘の推定北陸道」 『季刊考古学』第46号 雄山閣
- 伊藤隆三 1995 「古代北陸道の発掘調査－富山県小矢部市桜町遺跡－岸田地区－」 『古代交通研究』第4号 古代交通研究会
- 大日方克己 1985 「律令国家の交通制度の構造－遷送・供給をめぐって－」 『日本史研究』第269号 日本史研究
- 金坂清則 1996 「北陸道 その計画性および水運との結びつき」 『古代を考える古代道路』 吉川弘文館
- 木下良他 1980 「富山県歴史の道調査報告書－北陸街道－」 富山県教育委員会
- 木下良 1992 「古代交通研究上の諸問題」 『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 木下良 1995 「古代の交通体系」 『岩波講座日本通史』第5巻 岩波書店
- 木下良 1995 「日本の古代道路－駅路と伝路の変遷を中心に－」 『古代文化』第47巻第4号 古代学協会
- 木下良 1996 「古代道路研究の近年の成果」 『古代を考える古代道路』 吉川弘文館
- 木下良 1996 「古代道路の複線的性格について－駅路と伝路の配置に関して－」 『古代交通研究』第5号 古代交通研究会
- 木本雅康 1997 「古代伝路の復原と問題点」 『古代交通研究』第7号 古代交通研究会
- 小林健太郎 1978 「北陸道」 『古代日本の交通路』 II 大明堂
- 永田英明 1997 「七道制と駅馬・伝馬」 『古代交通研究』第7号 古代交通研究会
- 早川泉 1997 「古代道路遺構の虚像と実像－東山道武藏路の調査を通して－」 『古代交通研究』第6号 古代交通研究会
- 森田博 1993 「伝馬制の考察」 『続日本紀研究』第285号 続日本紀研究会
- 柳原太郎 1978 「駅伝制についての若干の考察」 『古代史論叢』中巻（井上光貞博士還暦記念会編） 吉川弘文館

調査参加者名簿

発掘

上田工、浦上忍、大田欣和、岡田一広、岡本真由美、尾山久美子、角田知津江、木原和美、京田直子、小島善雄、
小林央、佐野實、新谷晴紀子、杉本広政、樋井公子、赤井久子、寺山知子、上合良子、中山賢富、菅原朋江、
広沢隆太郎、放生千絵、前田武國、三國世理子、水外一郎、向井美江、山岸朋子、山崎一男、山城一夫、山本好美、
脇智恵子

整理

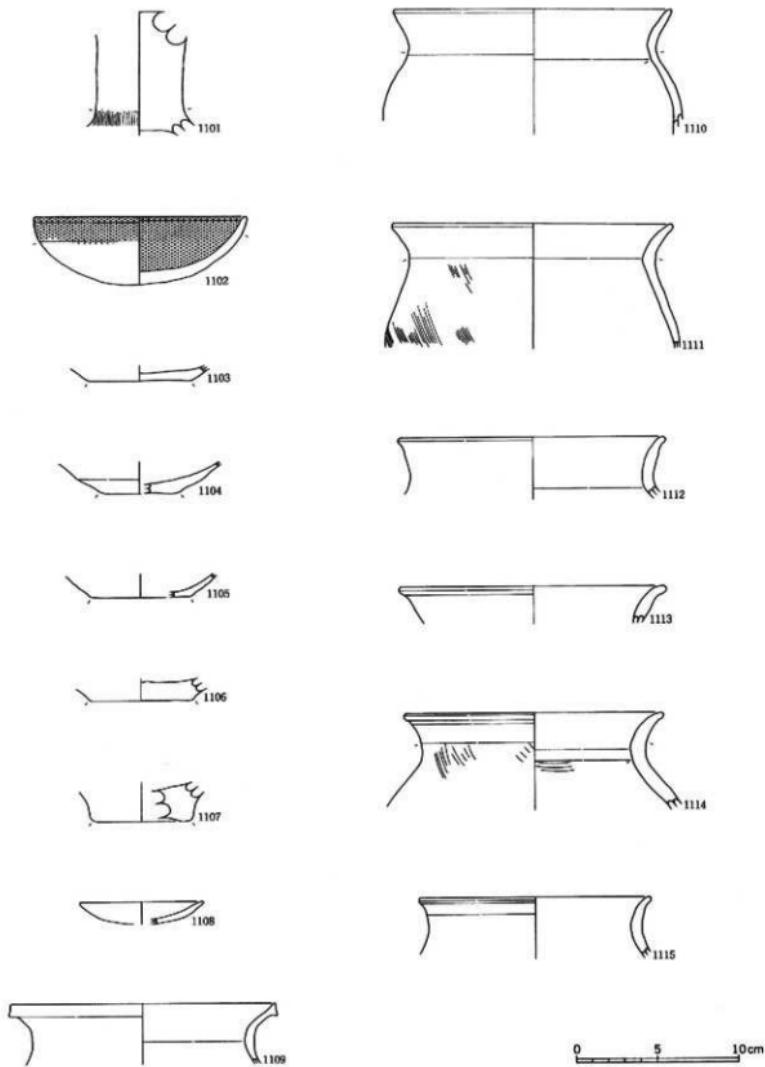
大田欣和、岡田一広、垣地慶子、木原和美、京田直子、小島善雄、小林央、新谷晴紀子、杉村いく子、高田えみ子、
樋井公子、川辺幸代、谷内櫻子、寺井久子、道谷美奈子、西本真由美、苗田朋江、萩原京、幡薫、針原美佳、
福澤雪、放生千絵、三島幸代

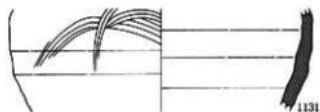
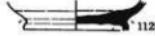
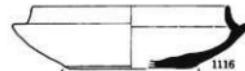
報告書抄録

ふりがな	しづくむらうきはな
書名	市内遺跡調査概報
副書名	平成9年度麻生谷新生園遺跡の調査他
巻次	
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	第39回
編著者名	山口辰一、邑本順亮
編集機関	高岡市教育委員会
所在地	〒933-0057 富山県高岡市広小路7-50
発行年月日	西暦 1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地 市町村	北緯 度		東經 度		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度	度			
麻生谷 新生園	富山県高岡市 麻生谷	016202	202036	36° 44° 35°	136° 56° 31°	19970512 19970820	180m ²	住宅建設
東木津	富山県高岡市 木津	016202	202150	36° 43° 43°	136° 59° 43°	19970818 19971023	338m ²	店舗建設
石塚	富山県高岡市 上北島	016202	202158	36° 43° 52°	136° 59° 10°	19970922 19971113	377m ²	住宅建設
その他の遺跡	富山県高岡市	016202						住宅建設等
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
麻生谷新生園	集落跡	奈良平安	道路址1条 溝4条	土師器、須恵器	古代北陸道の検出			
東木津	集落跡	奈良平安	土坑1基 溝16条	土師器、須恵器 青銅鏡	漢式鏡の出土			
石塚	集落跡	平安中世	井戸址1基 土坑4基、溝1条	珠洲				
その他の遺跡					※試掘調査地区			

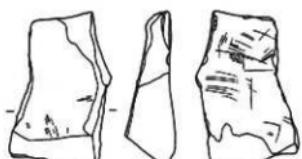
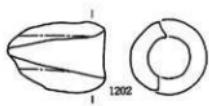
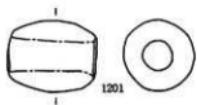
図 面



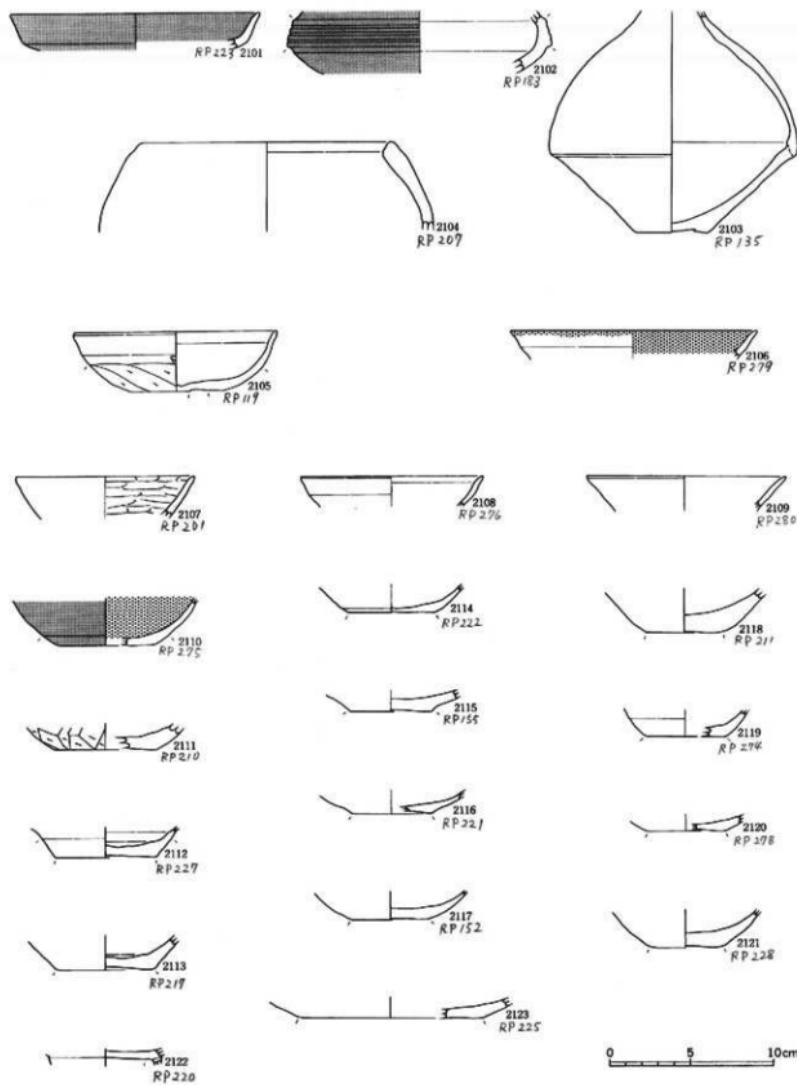


0 5 10cm

図面三 遺物実測図
麻生谷新生園遺跡

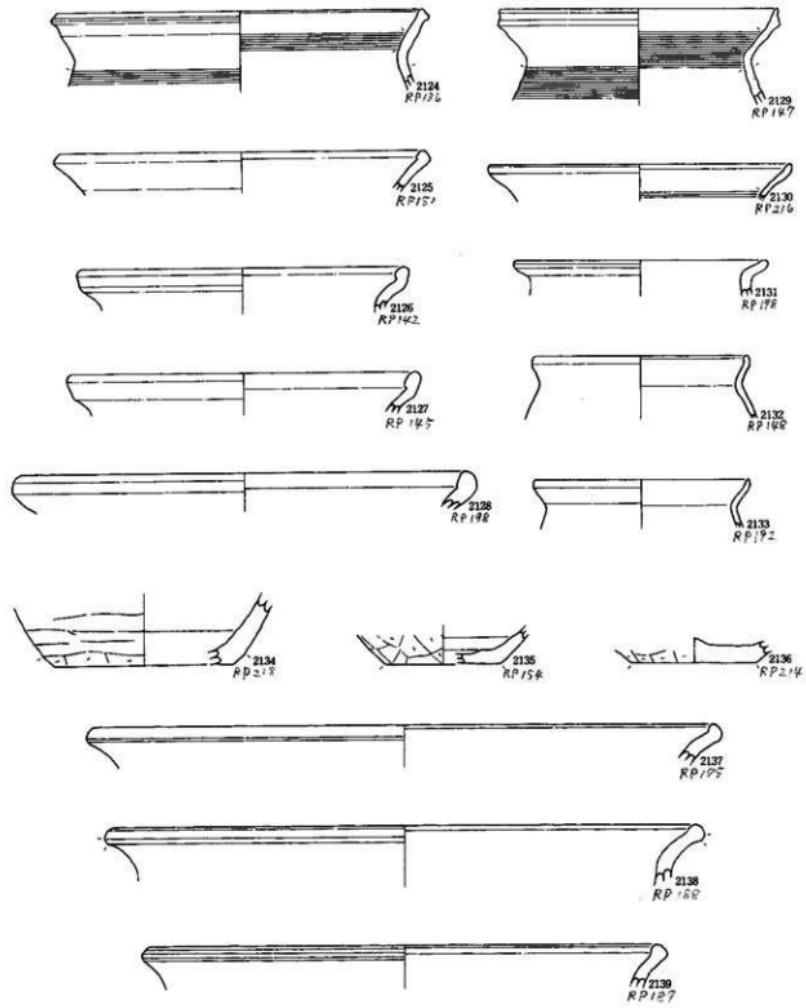


0 5 10cm

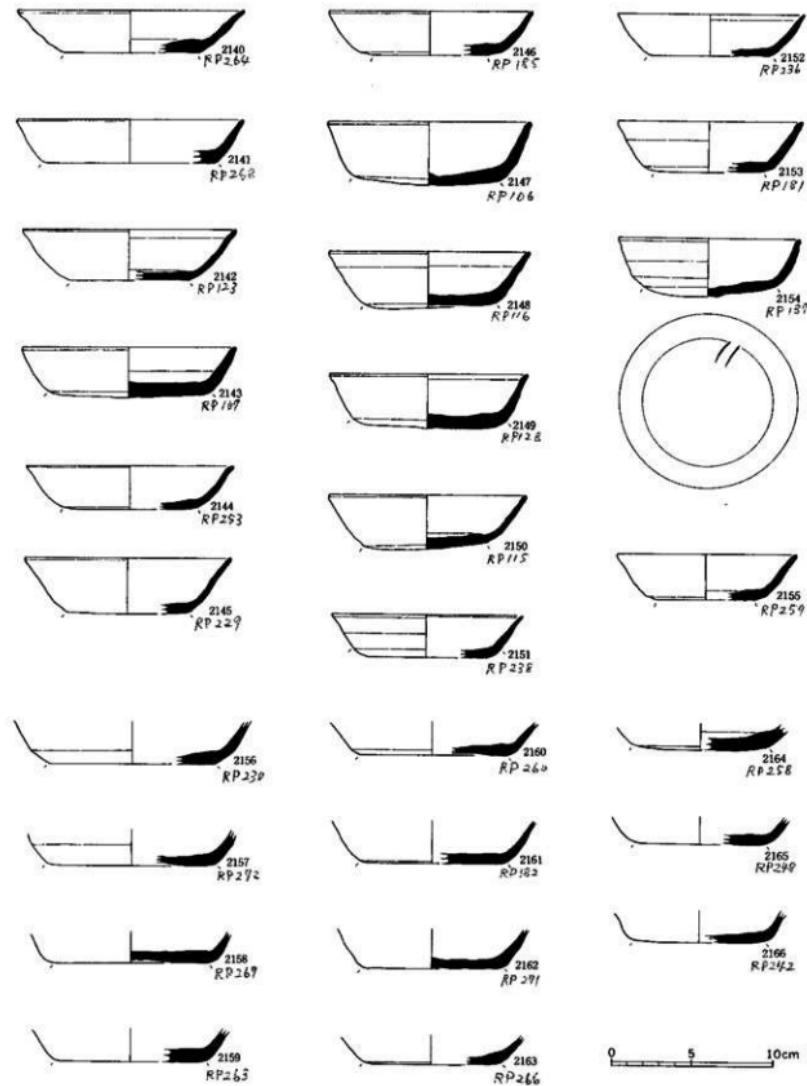


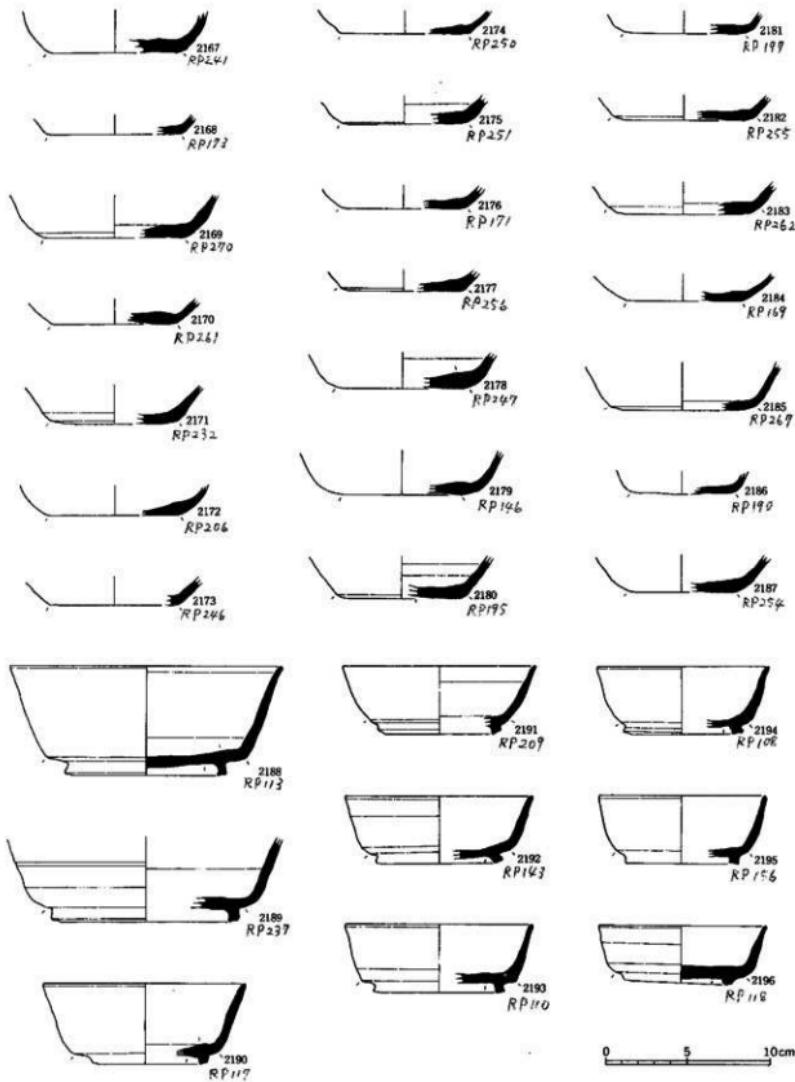
弥生土器；2101～2104、土師器；2105～2123

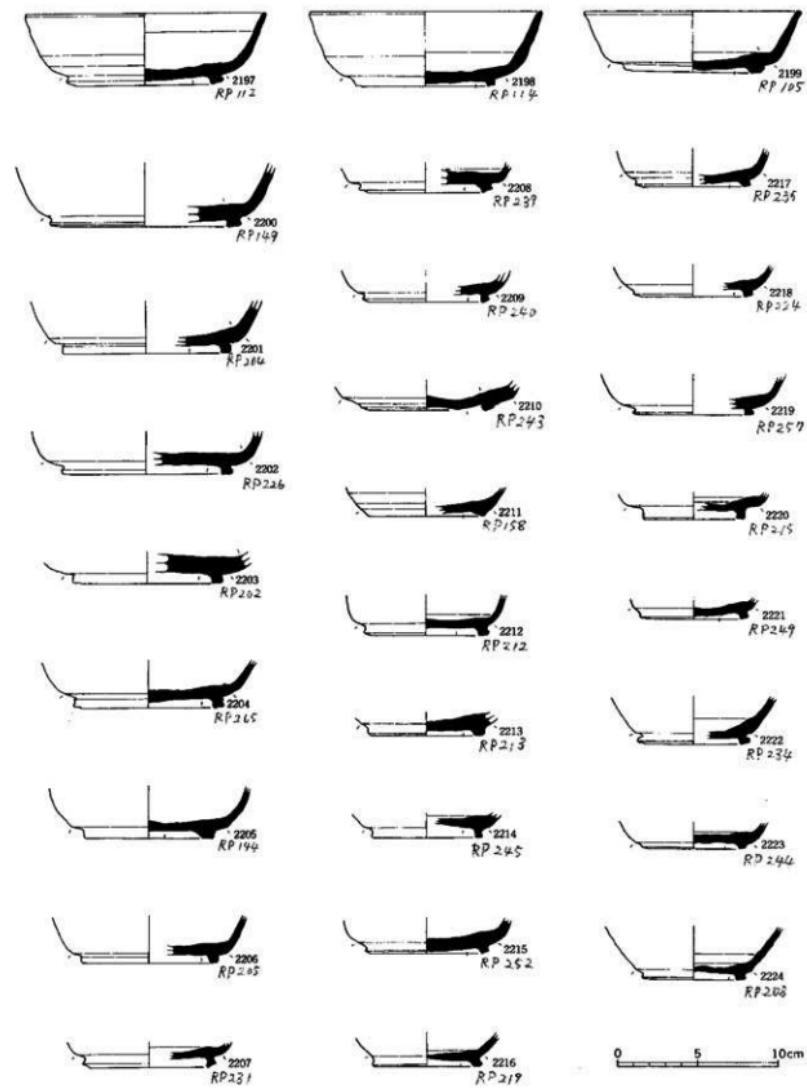
縮尺 1 / 3



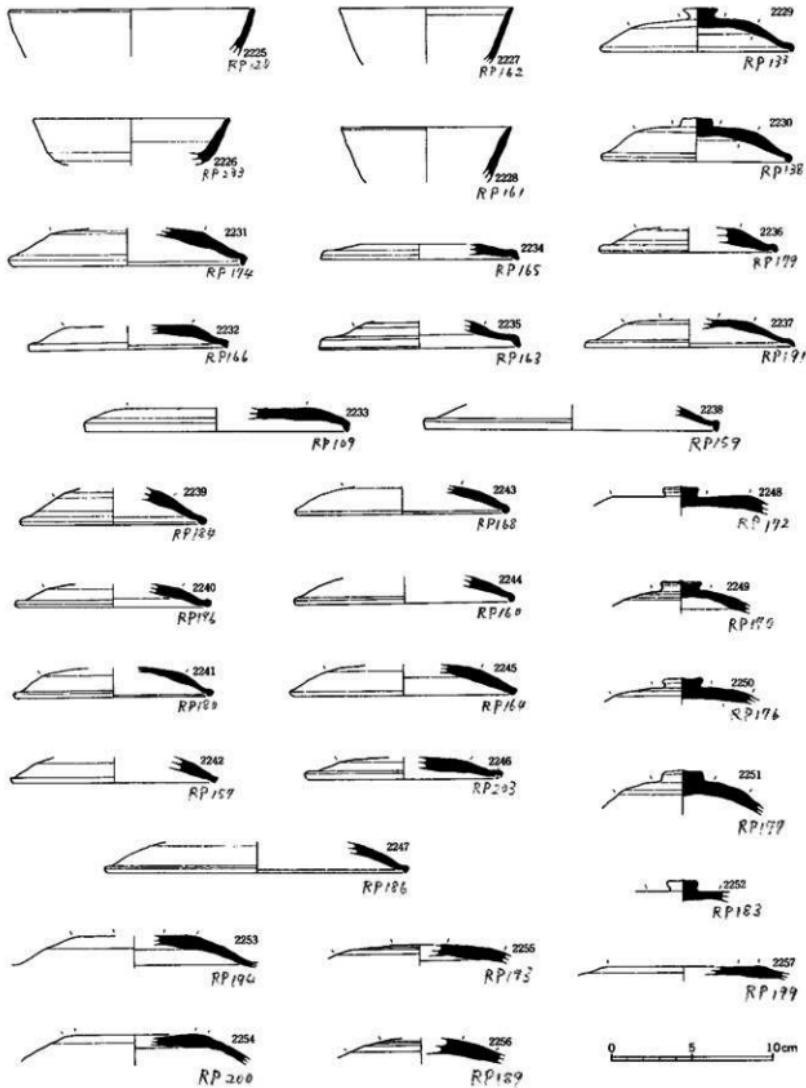
0 5 10cm

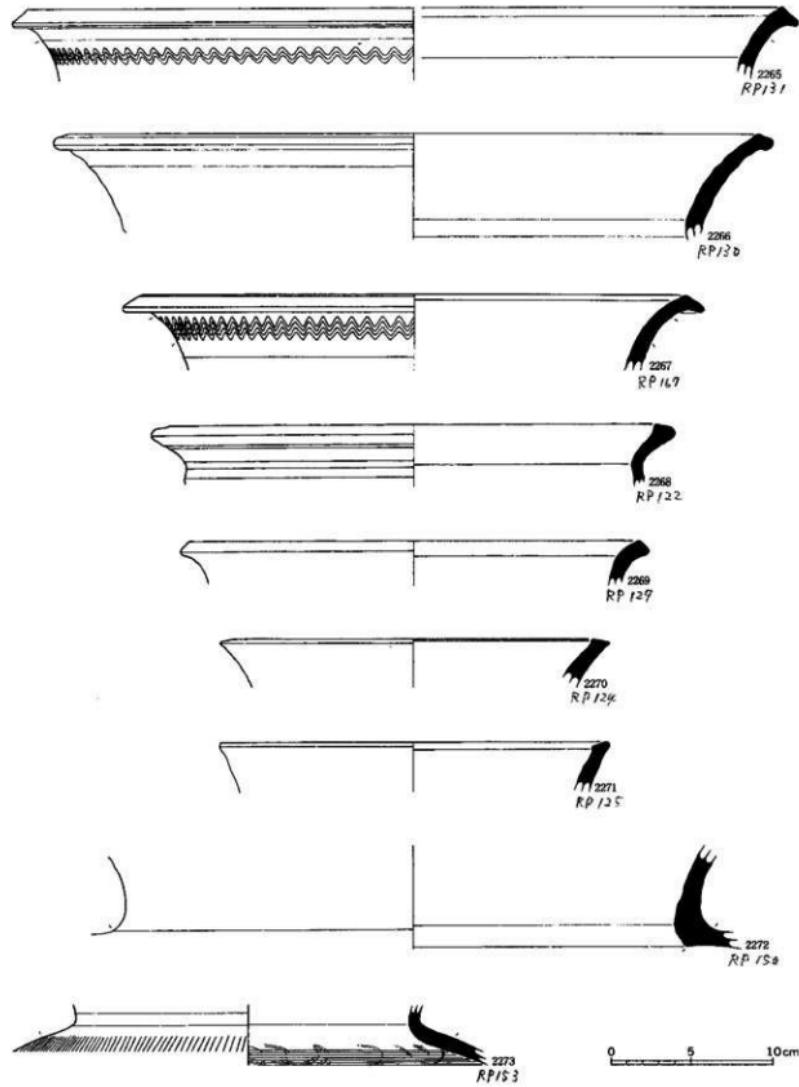




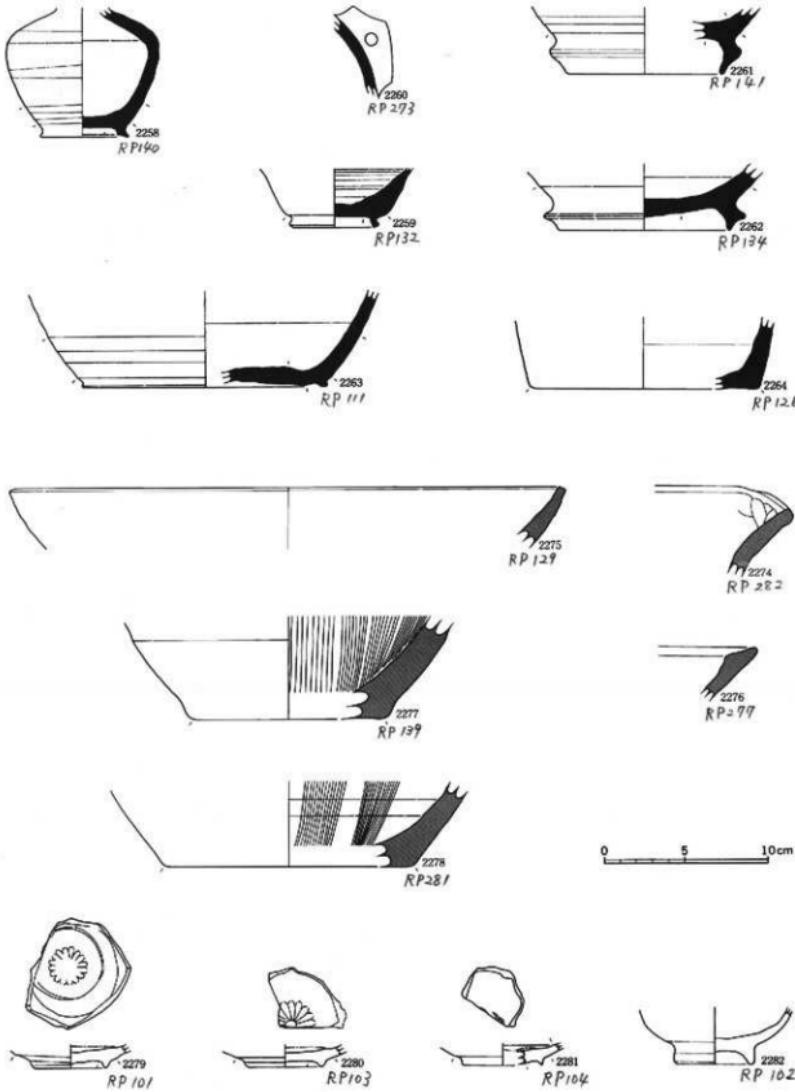


図面九 遺物実測図 東木津遺跡



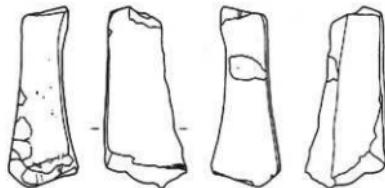
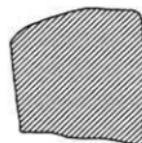
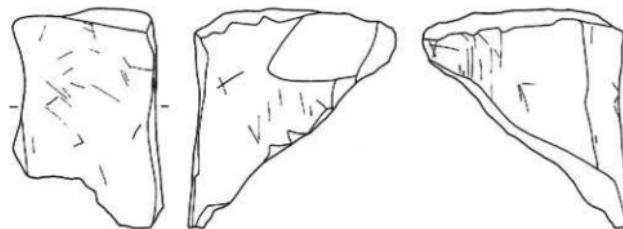
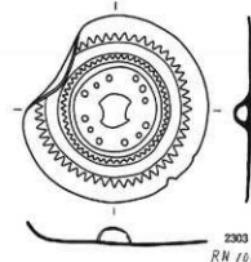
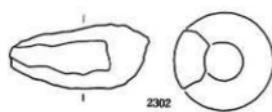
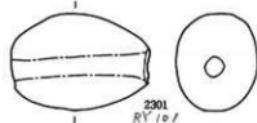


圖面二一 遺物実測図 東木津遺跡



須恵器；2258～2264、珠瀬；2274～2278、越中瀬戸；2279～2281、唐津；2282

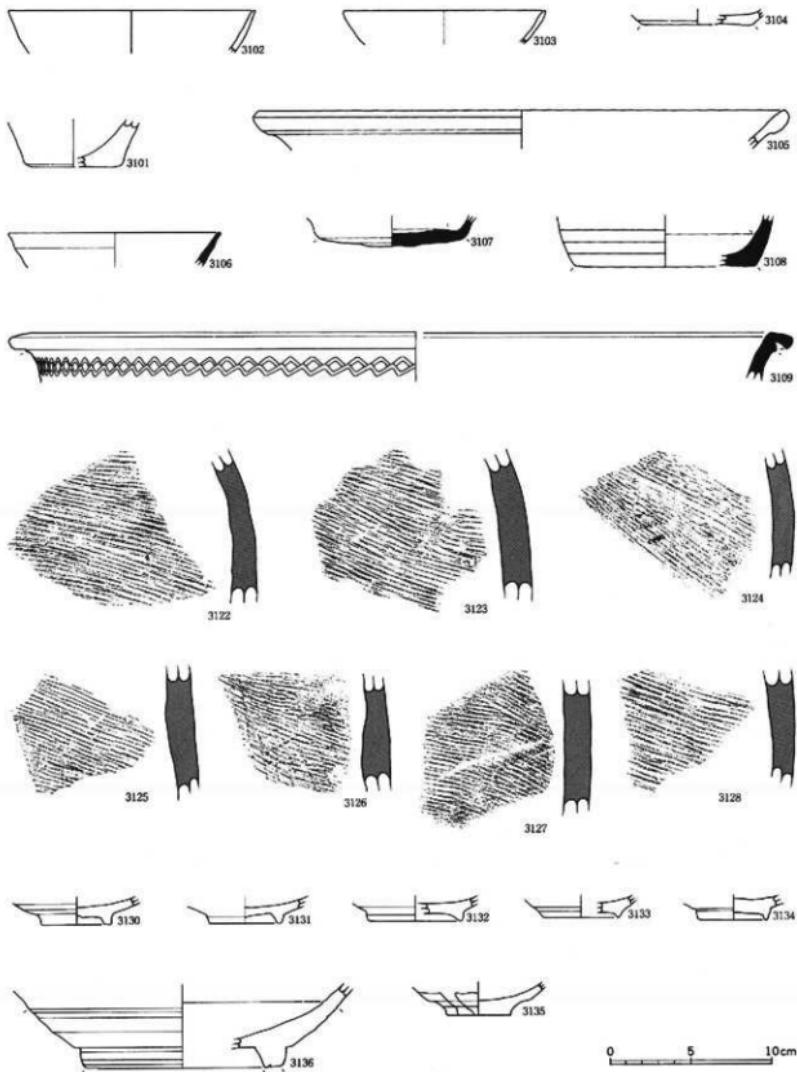
縮尺 1 / 3



0 5 10 cm

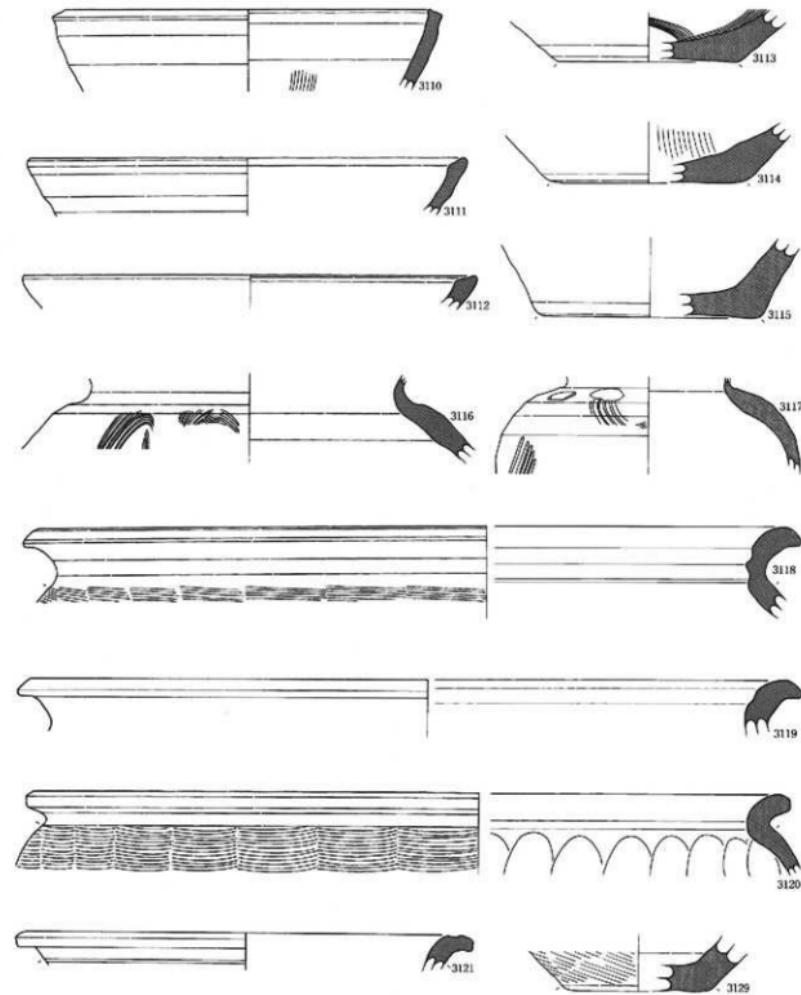
土錐；2301・2302、青銅鏡；2303、砥石；2304・2305

縮尺 1／2



土師器；3101～3105、須恵器；3106～3109、珠洲；3122～3128、越中瀬戸；3130～3136

縮尺 1 / 3



0 5 10 cm

図 版



1. 調査地区遠景（南西）



2. 調査地区遠景（南南西）

図版二 遺構 麻生谷新生園遺跡



1. 調査地区全景（北東）



2. 調査地区全景（南南東）

図版三 遺構 麻生谷新生園遺跡

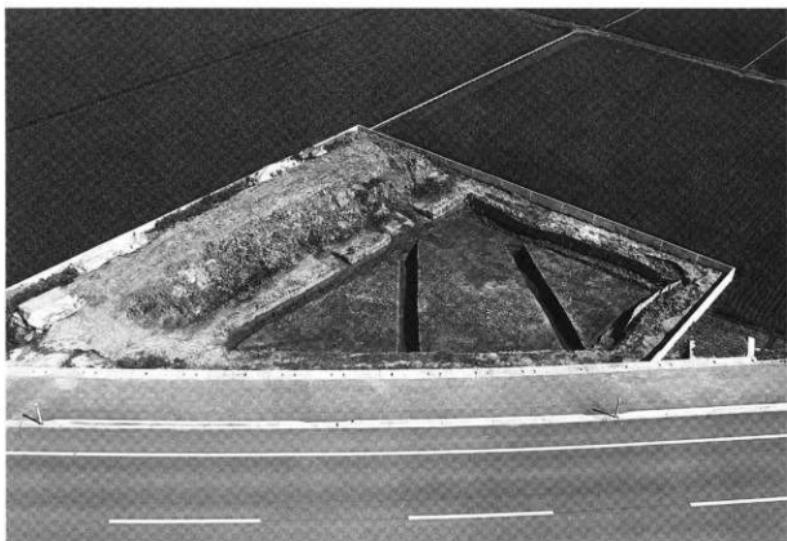


1. 調査地区遠景（南西）



2. 調査地区遠景（南西）

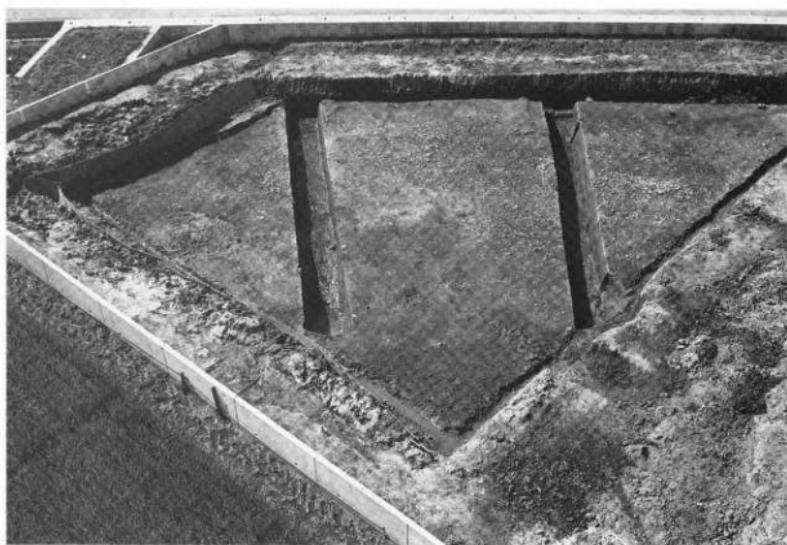
圖版四
遺構
麻生谷新生園遺跡



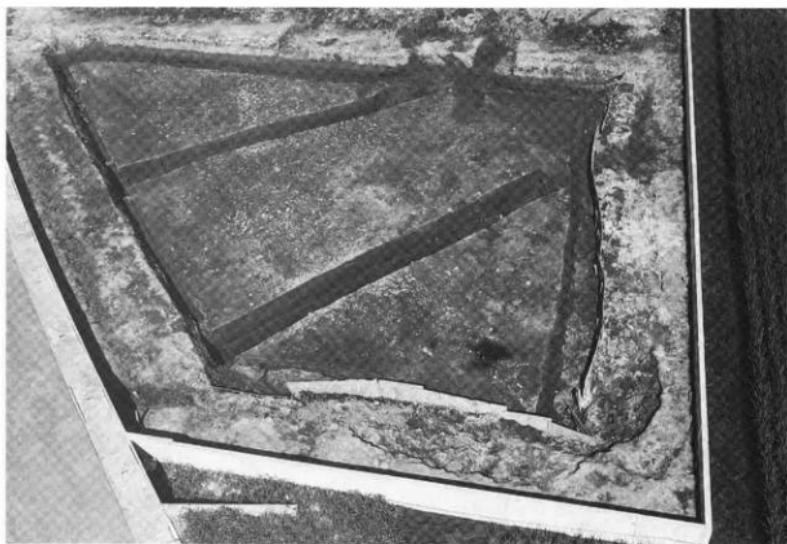
1. 溝柵地区全景（北西）



2. 洞柵地区全景（北東）

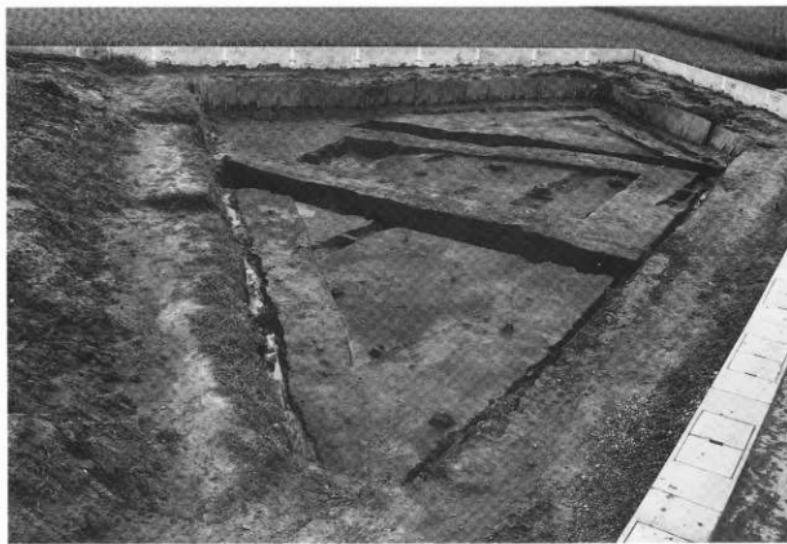


1. 調査地区全景（南東）

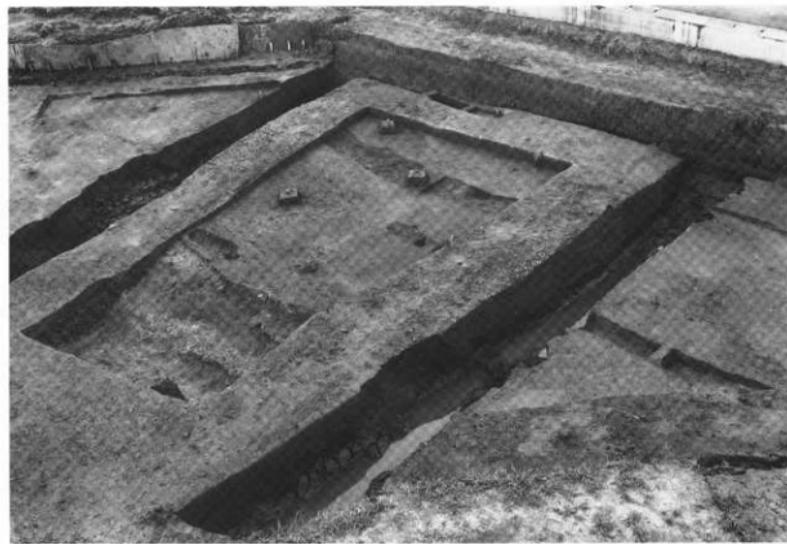


2. 調査地区全景（西）

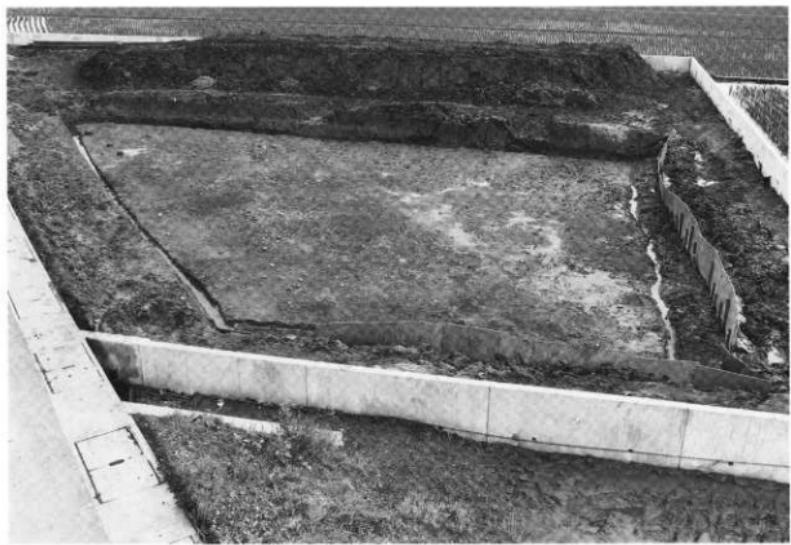
圖版六
遺構
麻生谷新生園遺跡



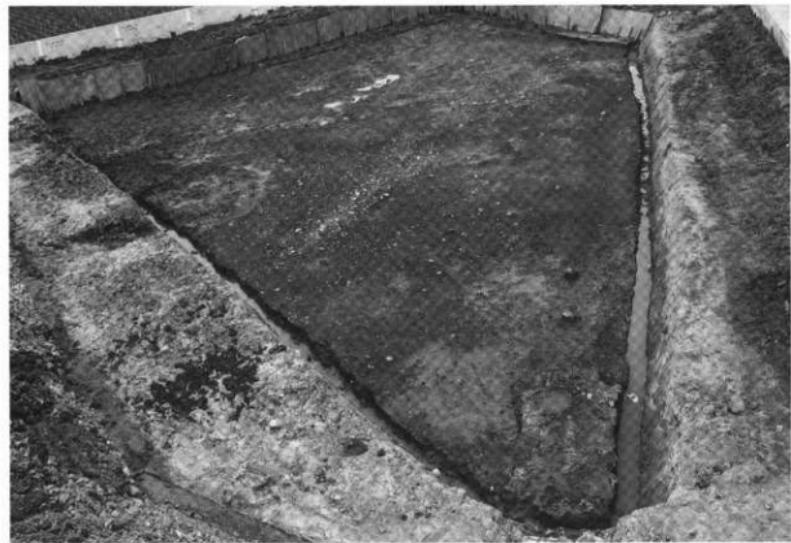
1. 完掘状態全景（北）



2. 完掘状態近景（東）



1. 路面検出状態全景（西）



2. 路面検出状態全景（北東）

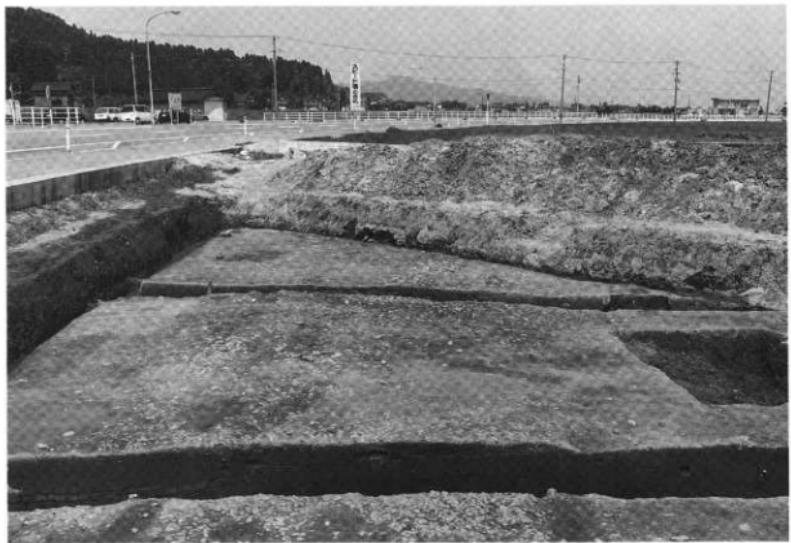


1. 路面検出状態近景（北）



2. 路面検出状態近景（北西）

圖版九 遺構 麻生谷新生園遺跡



1. 路面検出状態近景（南西）



2. 路面検出状態近景（南西）

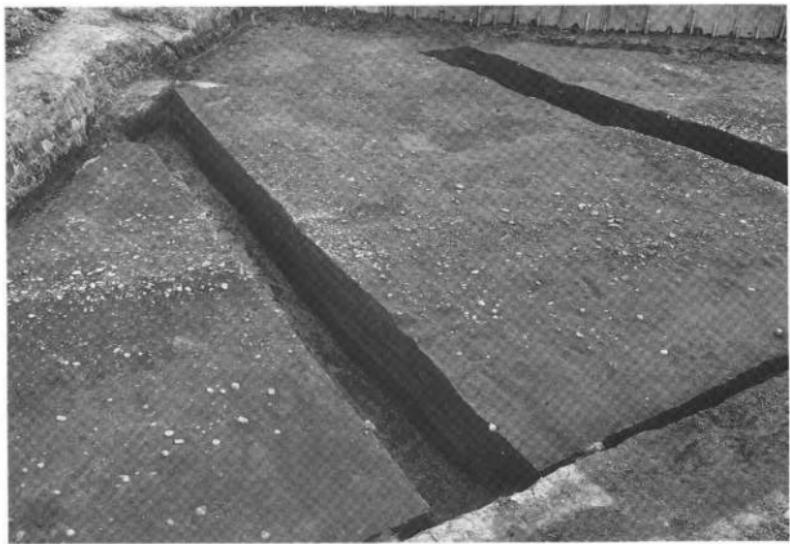


1. 路面検出状態近景（北）

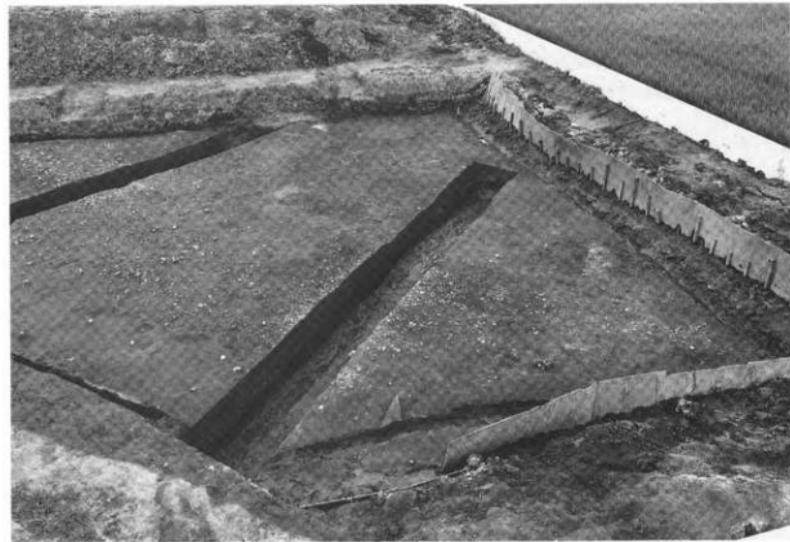


2. 路面検出状態近景（北）

圖版一
— 遺構
麻生谷新生園遺跡



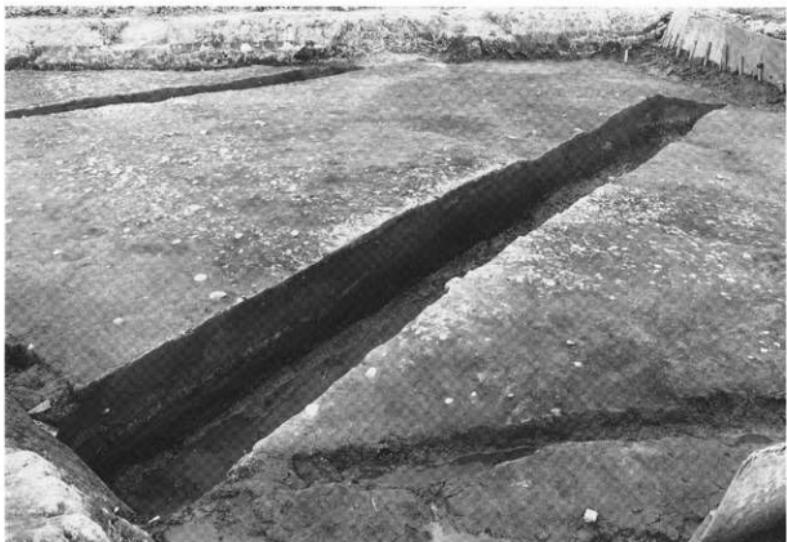
1. 北東側サブトレンチ全景（北）



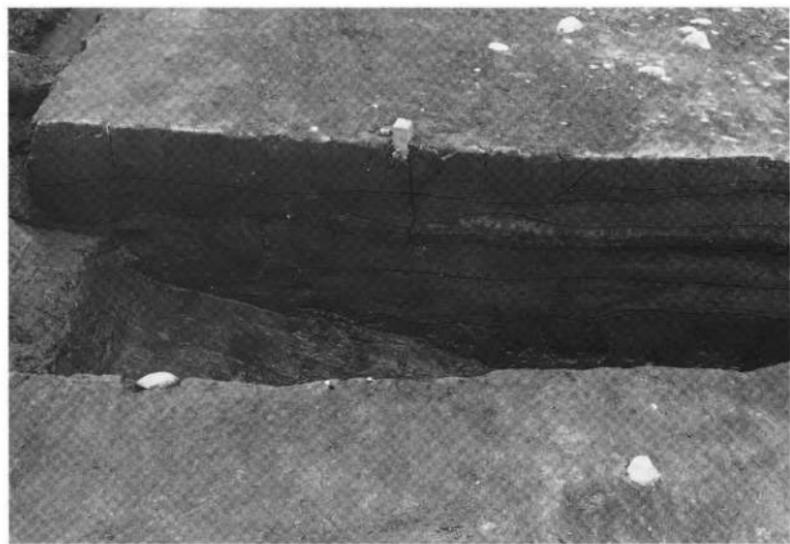
2. 南西側サブトレンチ全景（西）



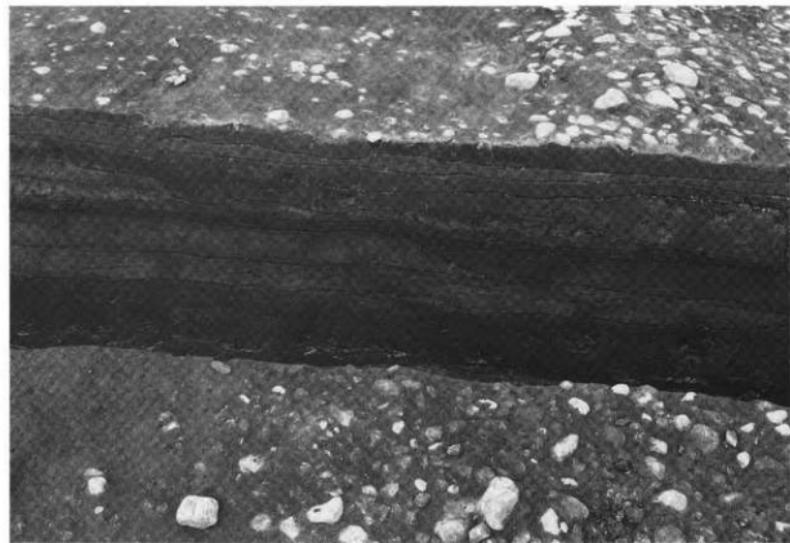
1. 北東側サブトレンチ北東壁近景（南）



2. 南西側サブトレンチ北東壁全景（西）



1. 北東側サブトレンチ北東壁北端部（南西）

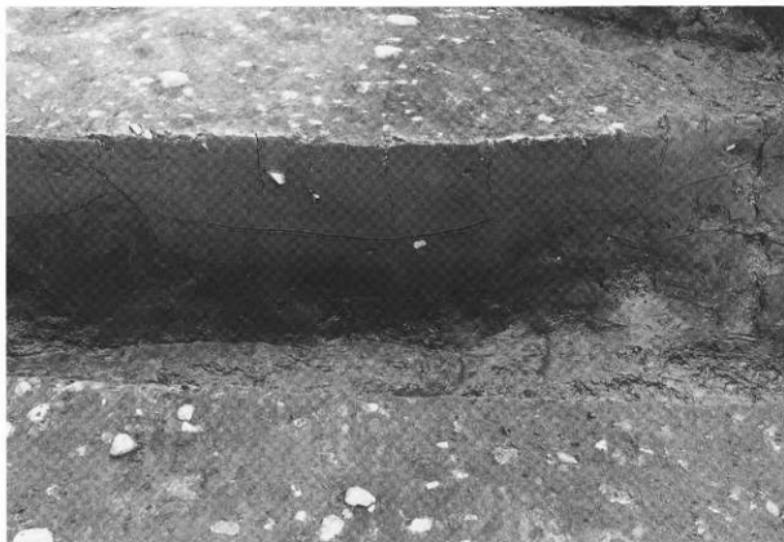


2. 北東側サブトレンチ北東壁中央北寄り（南西）

図版一四 遺構 麻生谷新生園遺跡



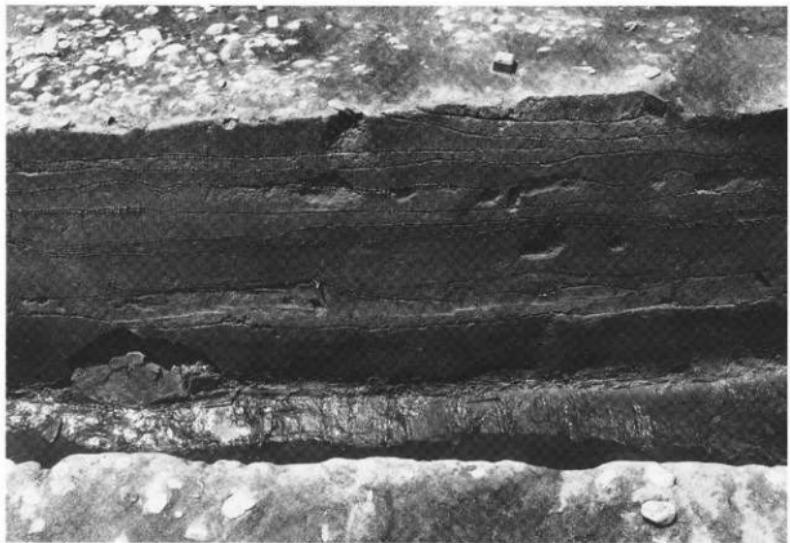
1. 北東側サブトレンチ北東壁中央部（南西）



2. 北東側サブトレンチ北東壁南端部（南西）



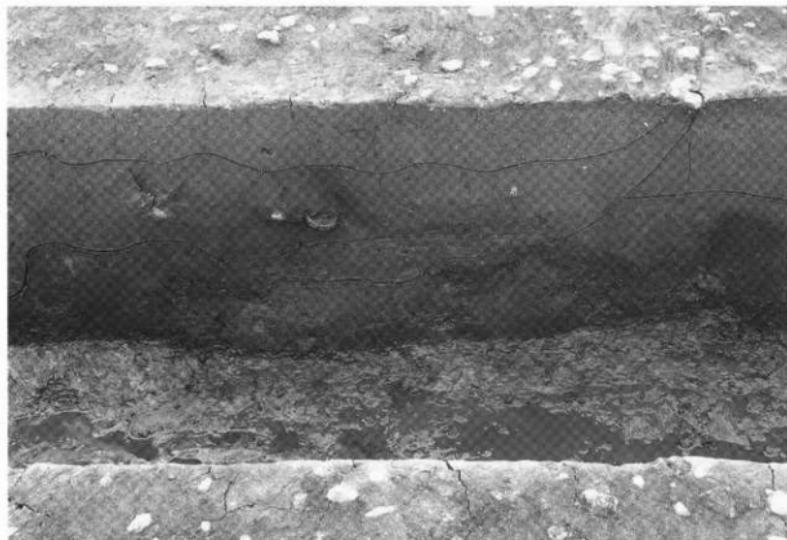
1. 北東側サブトレンチ南西壁北端部（北東）



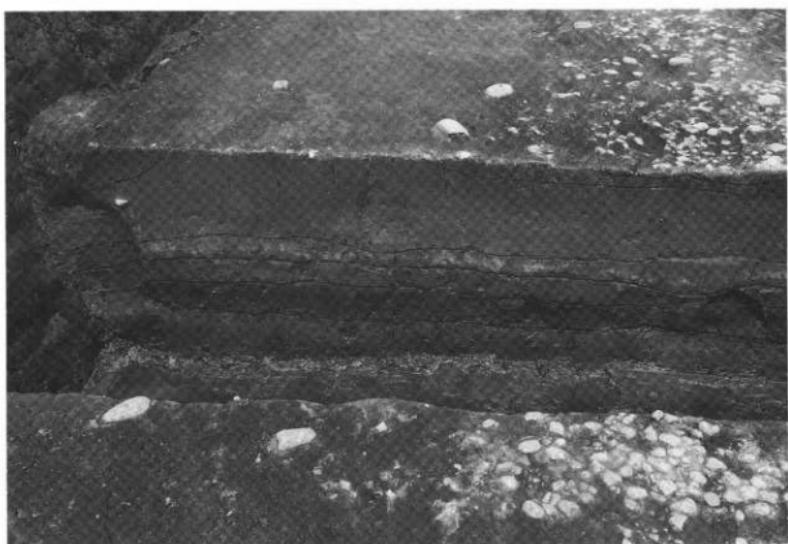
2. 北東側サブトレンチ南西壁中央北寄り（北東）



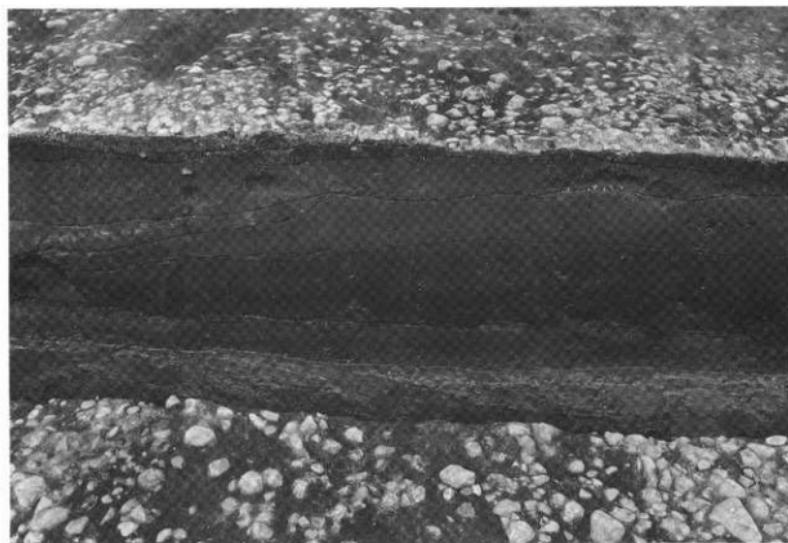
1. 北東側サブトレンチ南西壁中央部（北東）



2. 北東側サブトレンチ南西壁中央南寄り（北東）

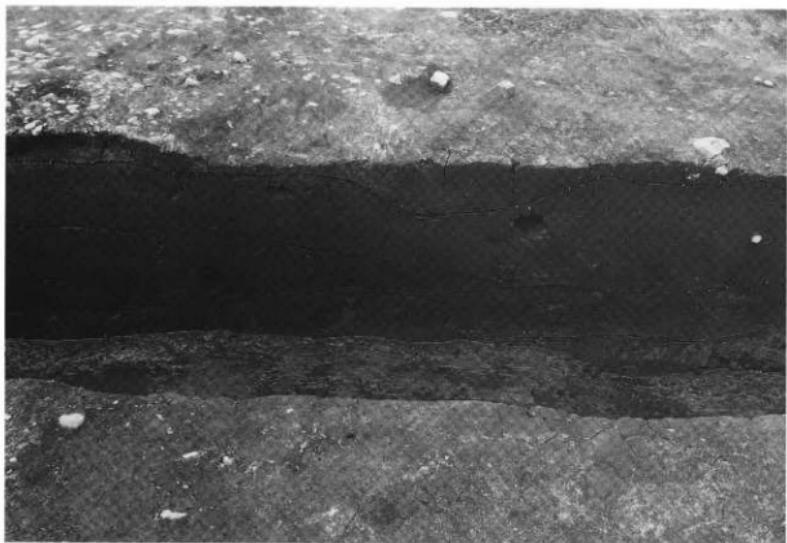


1. 南西側サブトレーンチ北東壁北端部（南西）

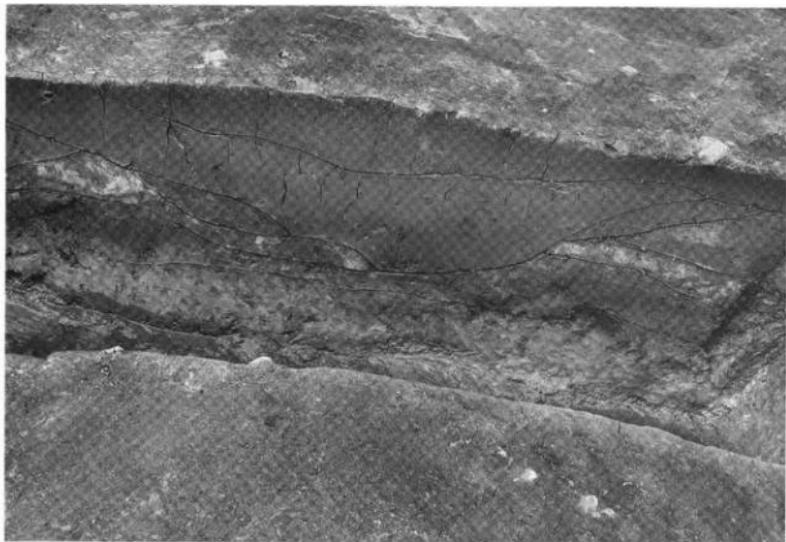


2. 南西側サブトレーンチ北東壁北部（南西）

圖版一八 遺構 麻生谷新生園遺跡

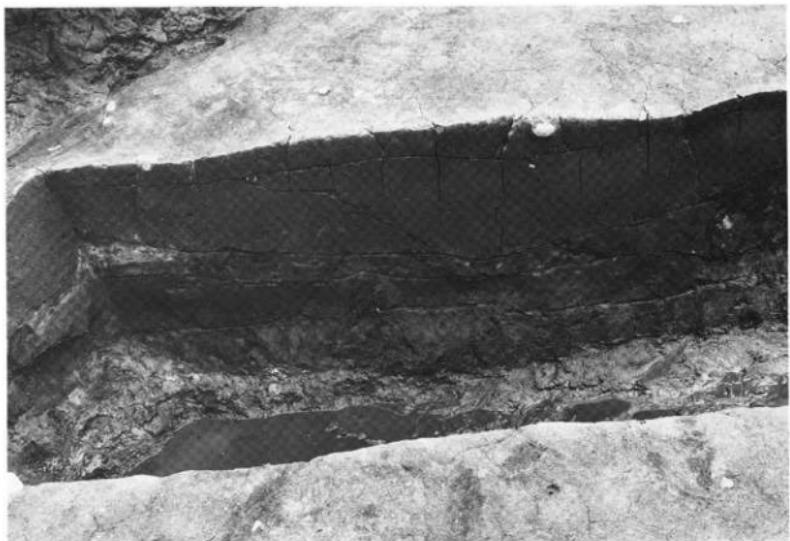


1. 南西側サブトレンチ北東壁中央部（南西）

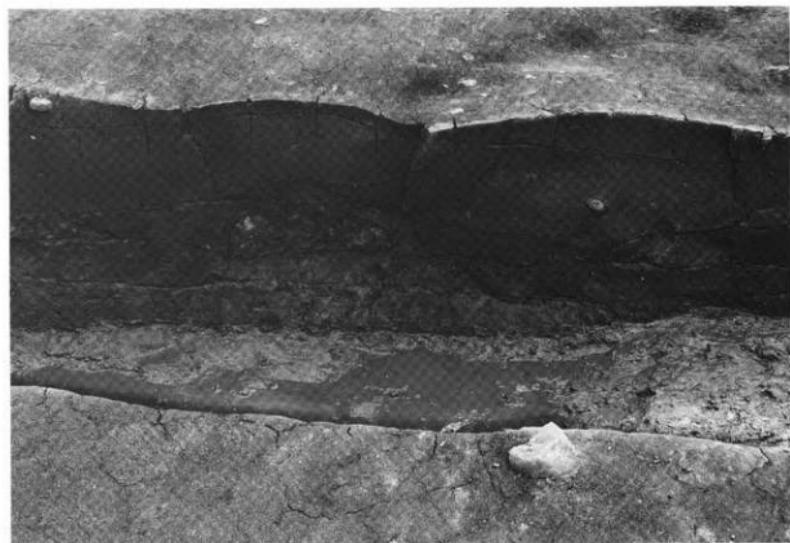


2. 南西側サブトレンチ北東壁南部（南西）

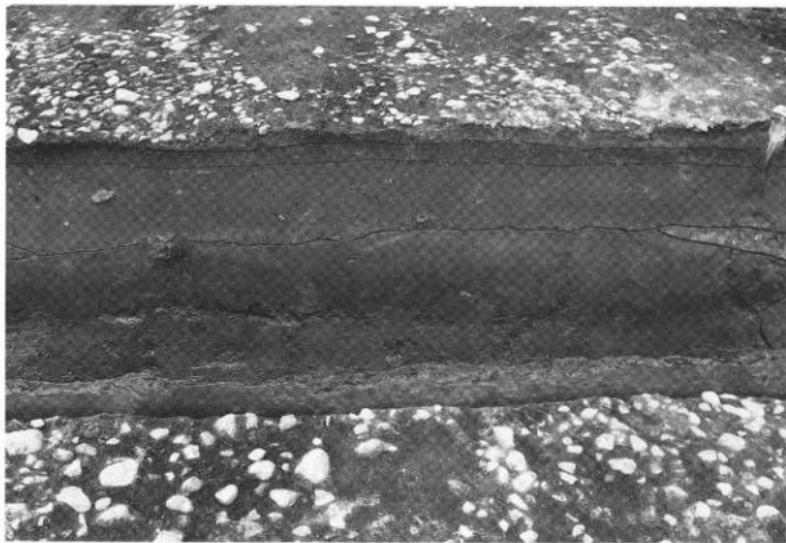
圖版一九
遺構
麻生谷新生園遺跡



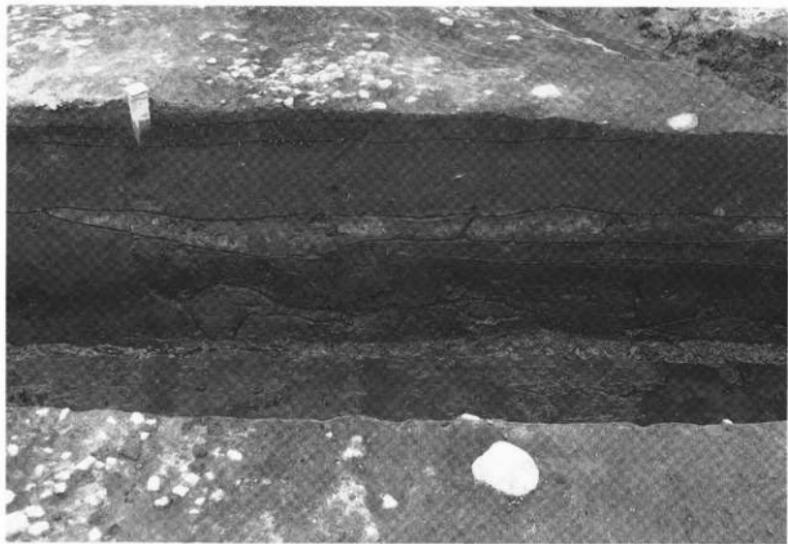
1. 南西側サブトレンチ南西壁南端部（北東）



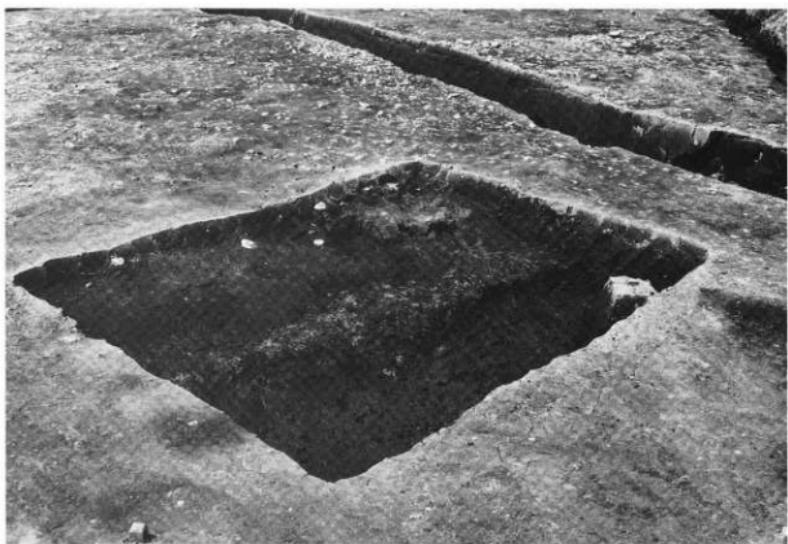
2. 南西側サブトレンチ南西壁中央南寄り（北東）



1. 南西側サブトレンチ南西壁中央北寄り（北東）



2. 南西側サブトレンチ南西壁北部（北東）

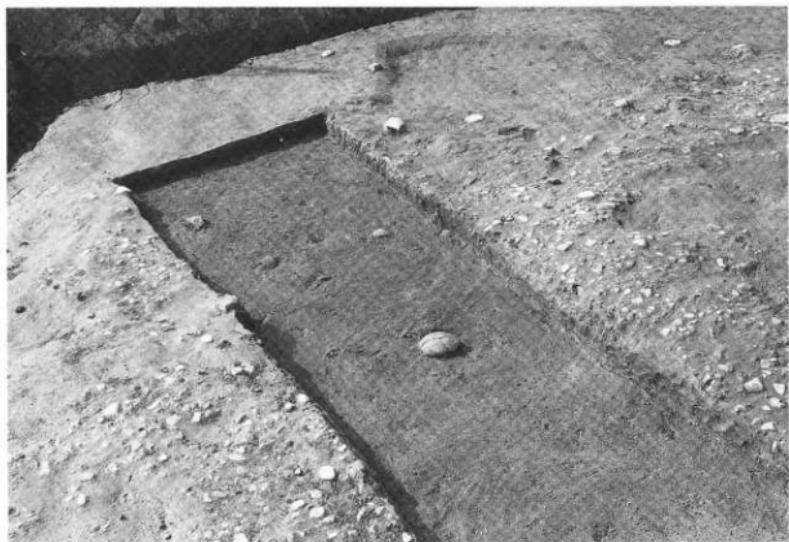


1. 溝SD01（南東側、側溝）全景（南）

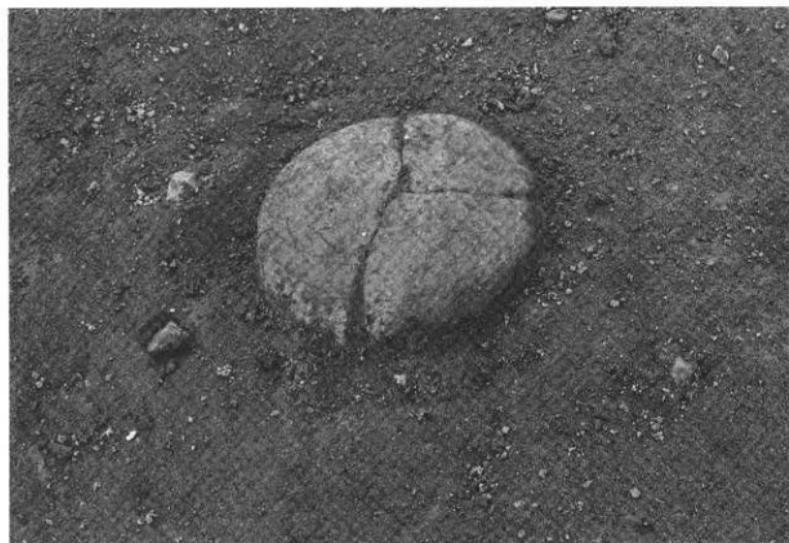


2. 溝SD01（南東側、側溝）全景（南東）

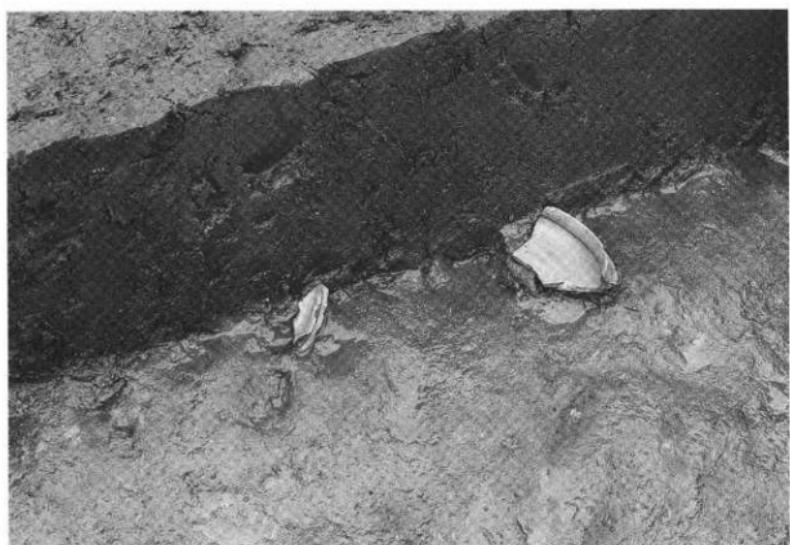
図版二二 遺構 麻生谷新生園遺跡



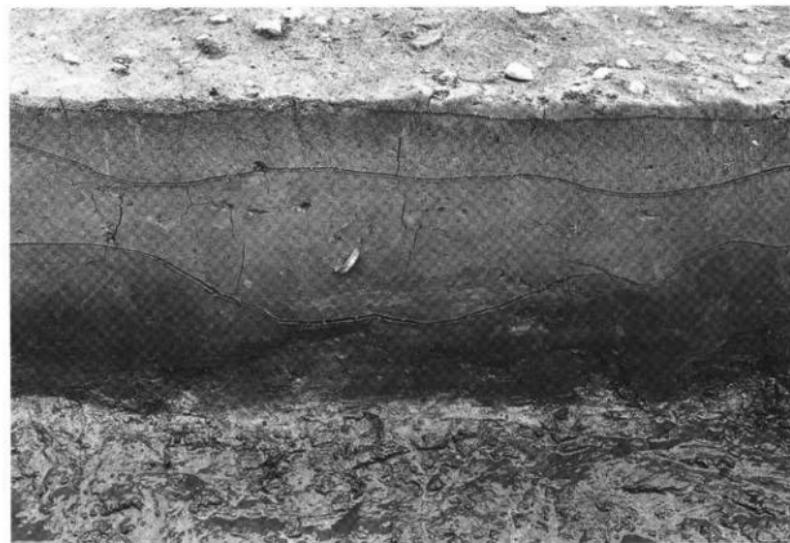
1. 南西側サブトレンチ北端部土師器出土状態（南）



2. 南西側サブトレンチ北端部土師器出土状態（南西）



1. 南西側サブトレンチ南端部須恵器出土状態（西）

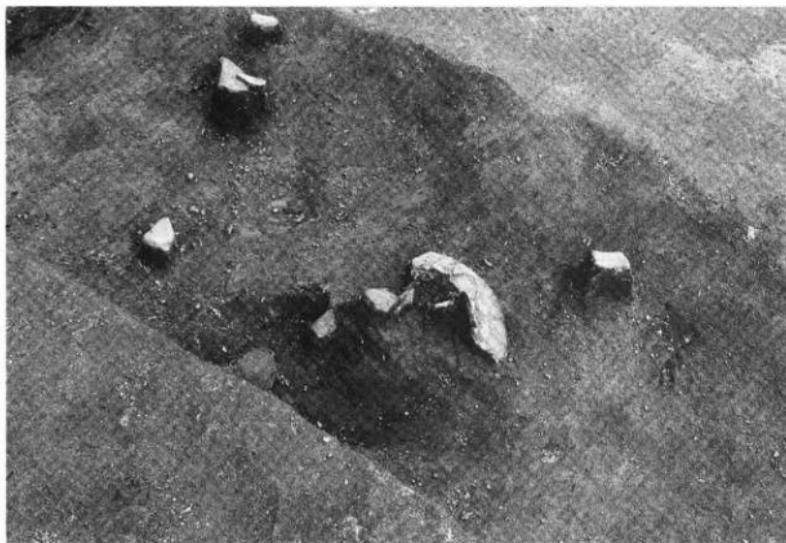


2. 北東側サブトレンチ南西壁南部須恵器出土状態（北東）

圖版二四 遺構 麻生谷新生園遺跡

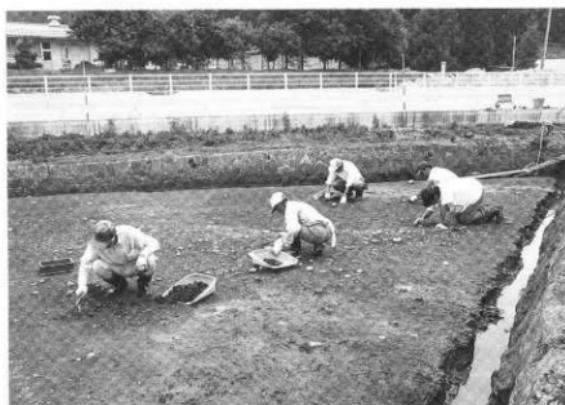


1. 調査地区南西部路面下遺物出土状態（北東）



2. 潟 S D03遺物出土状態（北西）

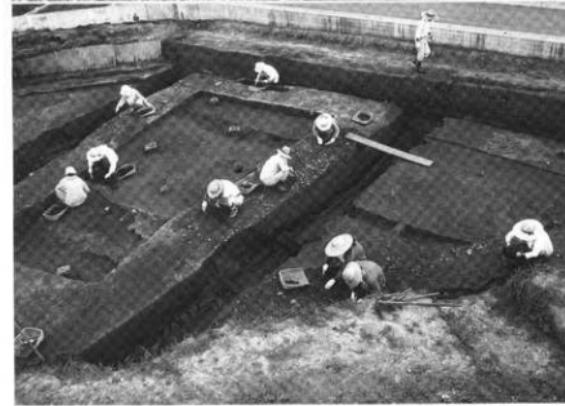
圖版二五
遺構
麻生谷新生園遺跡



1. 調査風景（南）



2. 調査風景（南西）



3. 調査風景（東）



1. 調査地区遠景（南東）



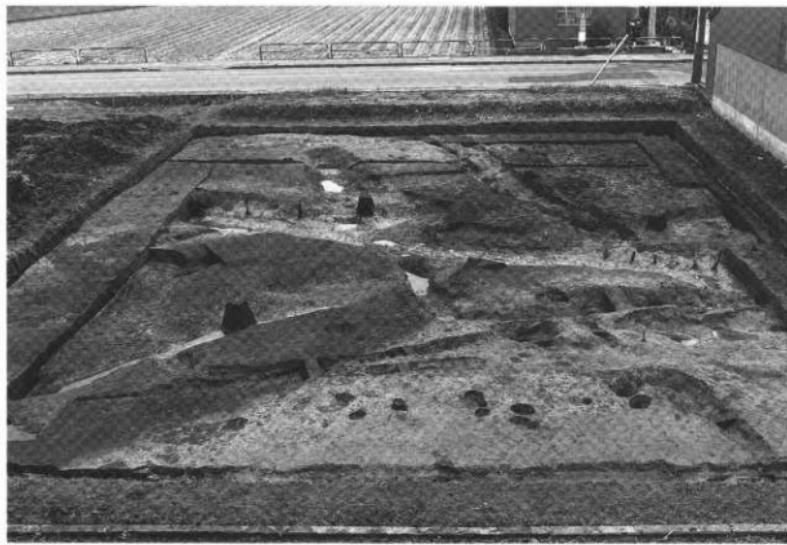
2. 調査地区全景（北）



1. 調査地区全景（北西）



2. 調査地区全景（北東）



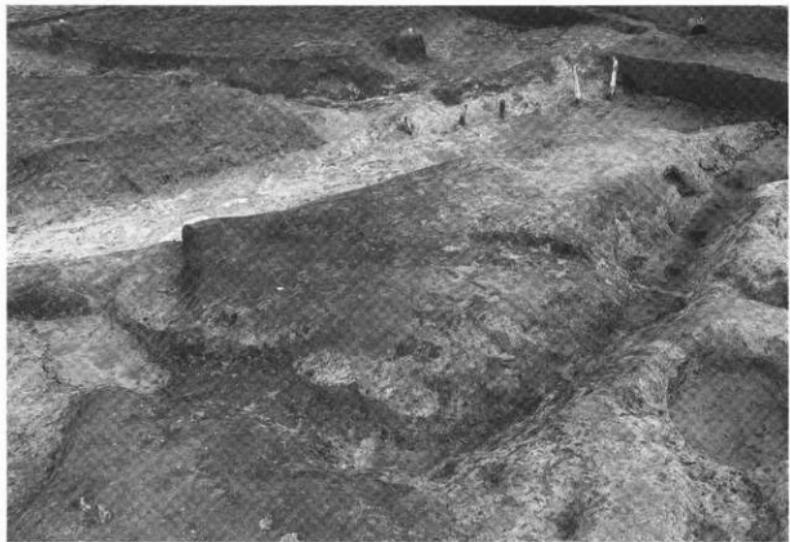
1. 調査地区近景（北西）



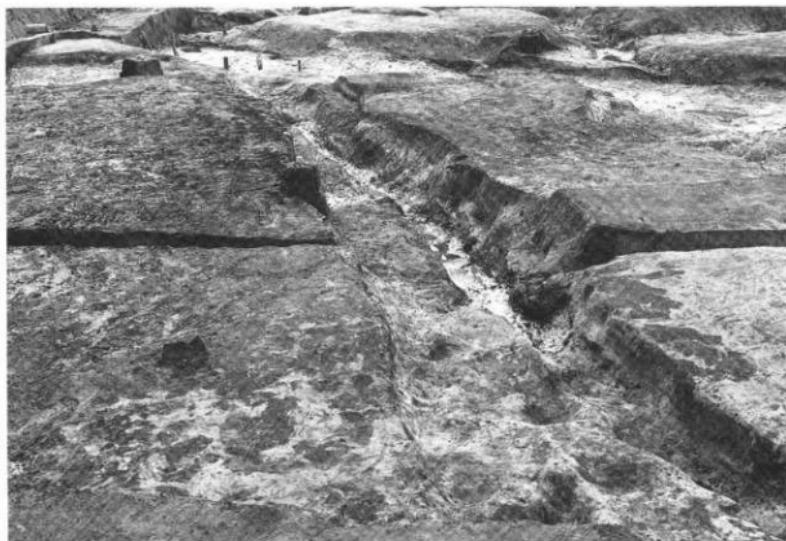
2. 調査地区近景（北東）



1. 溝S D06東側近景（東）



2. 溝S D06西側近景（北）



1. 潟 S D05・09全景（南東）



2. 潟 S D13・14全景（北）



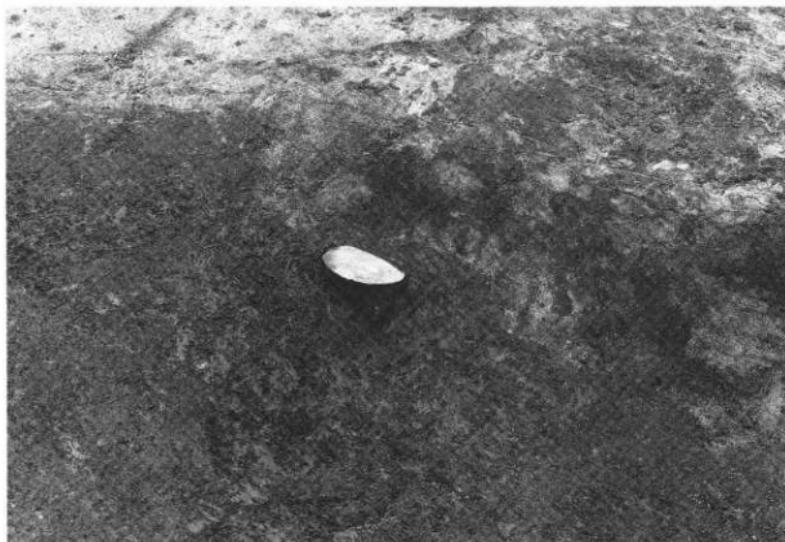
1. 調査地区南東部遺物
出土状態（北）



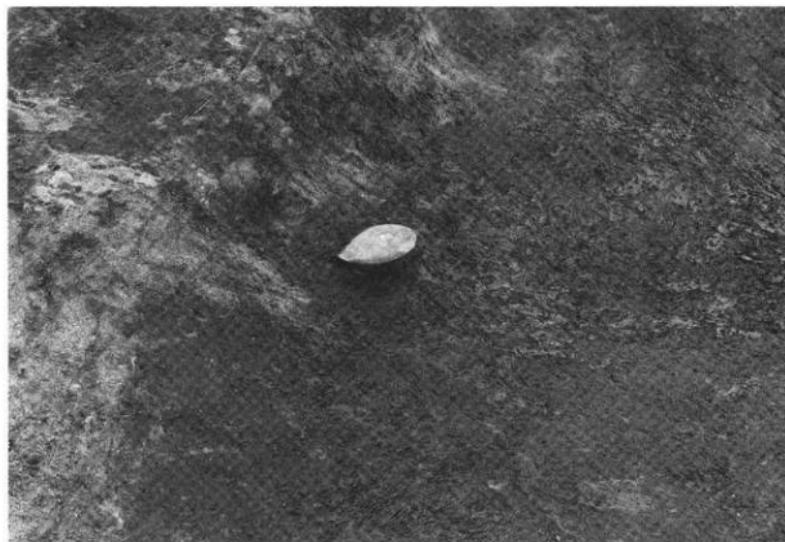
2. 潟 S D05遺物出土状
態（西）



3. 潟 S D05遺物出土状
態（西）



1. 溝 S D06鏡出土状態（東）



2. 溝 S D06鏡出土状態（南）



1. 溝 S D06銅出土状態（南西）



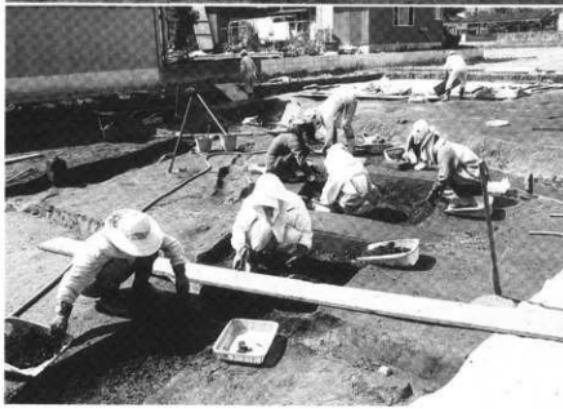
2. 溝 S D06銅出土状態（南）



1. 調査風景（南西）



2. 調査風景（南西）



3. 調査風景（北東）



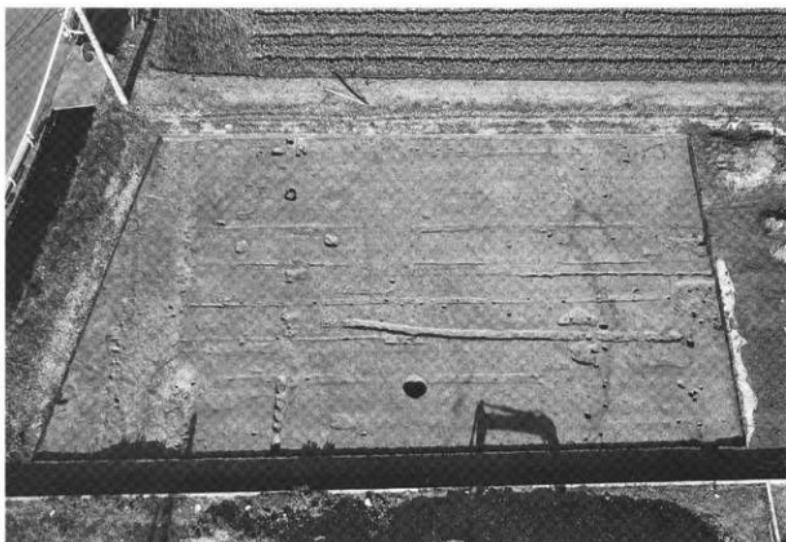
1. 調査地区遠景（南西）



2. 調査地区遠景（南）



1. 調査地区全景（東南東）

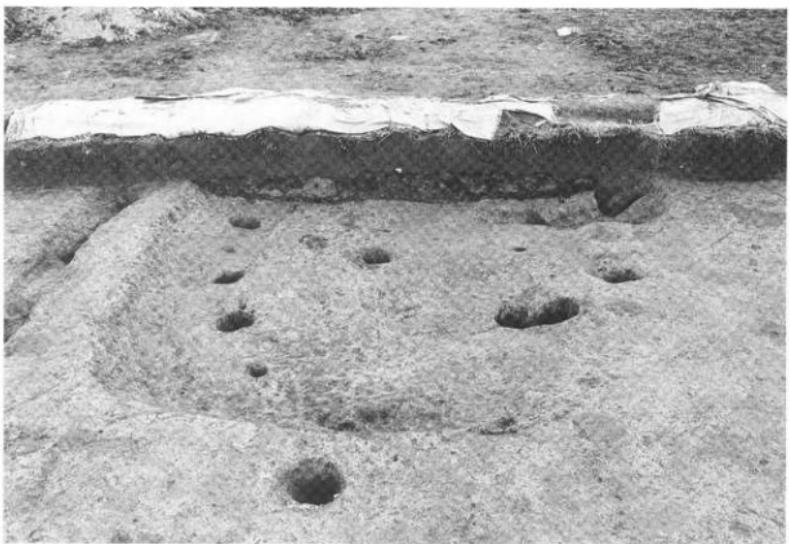


2. 調査地区全景（南南西）

図版三七 遺構 石塚遺跡



1. 調査地区近景（南東）



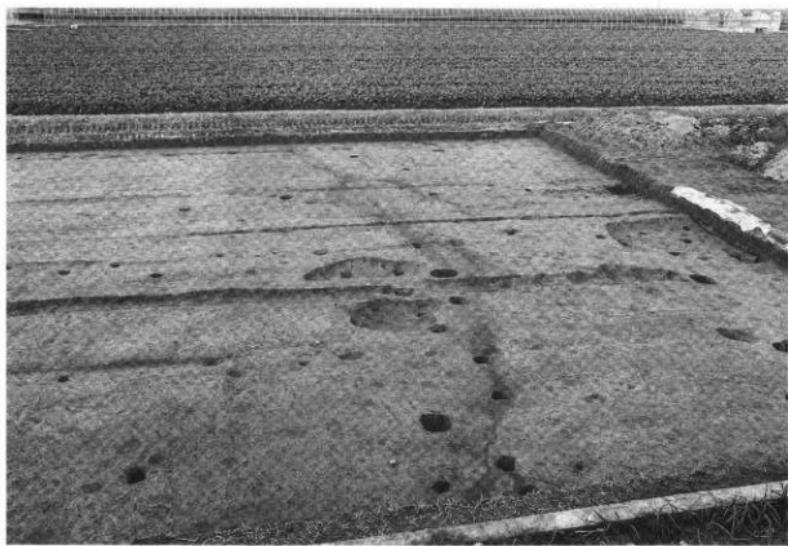
2. 土坑SK 146全景（西）



1. 井戸址 S E 06余景（西）



2. 井戸址 S E 06近景（北）



1. 地震址 S X62全景（南西）



2. 地震址 S X62近景（南東）



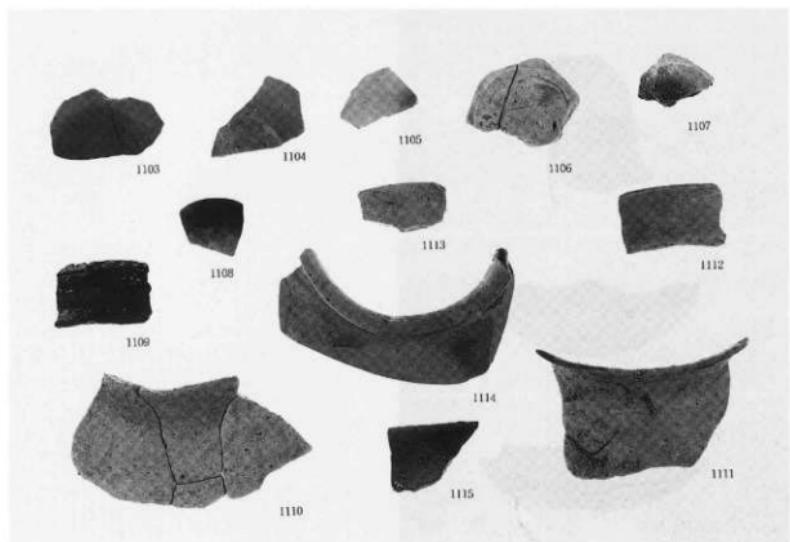
1. 調査風景（南）



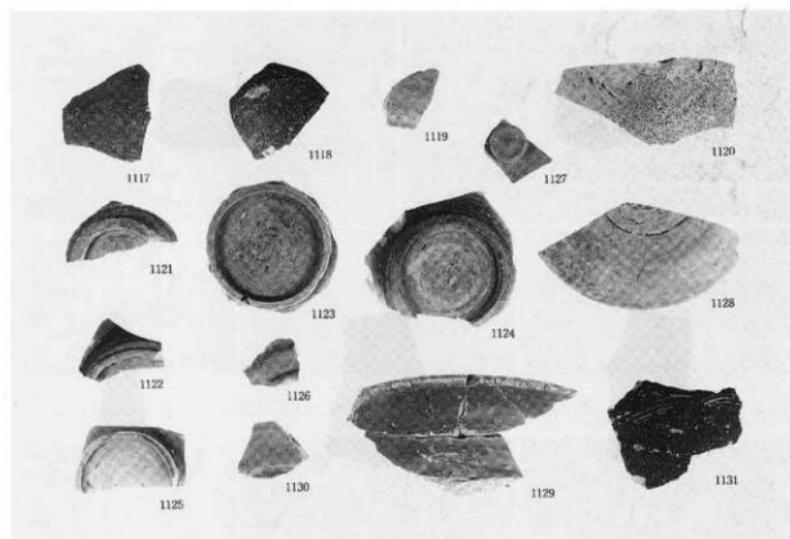
2. 調査風景（南西）



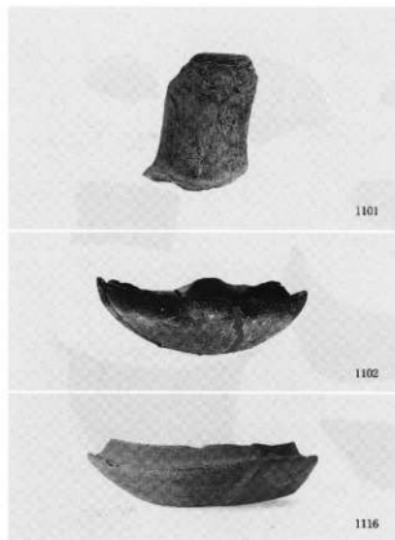
3. 調査風景（南西）



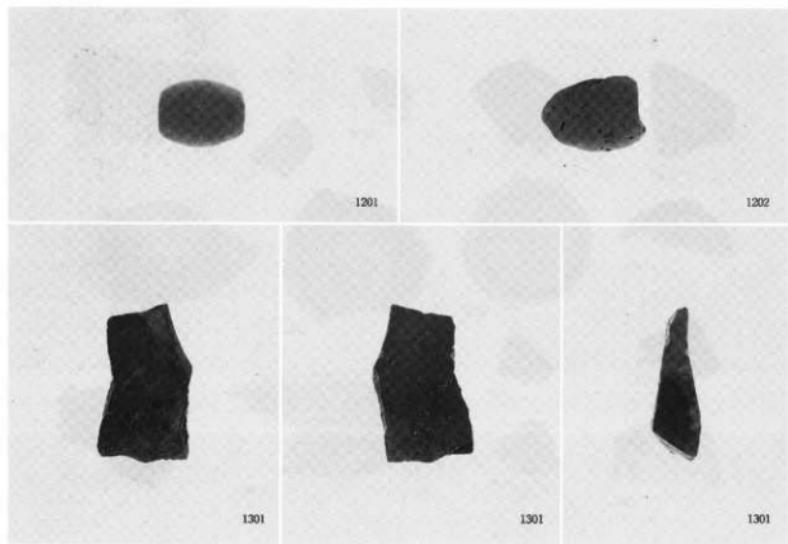
1. 土器



2. 須恵器、珠韁



1. 土師器、須恵器



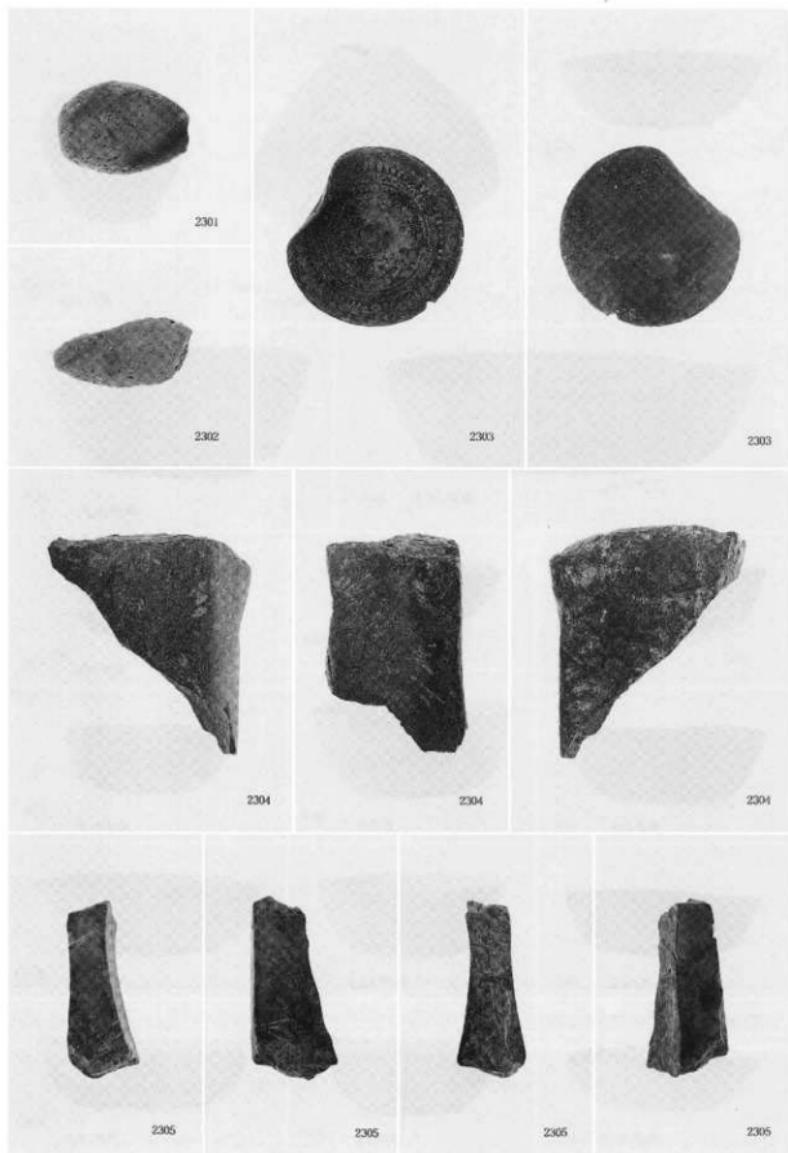
2. 土製品、石製品

圖版四三 遺物 東木津遺跡



共生土器、須恵器

圖版四四
遺物
東木津遺跡



土製品、銅製品、石製品

高岡市埋蔵文化財調査概報第39冊
市内遺跡調査概報

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号

1998年3月31日

印刷所 小間印刷株式会社
富山県高岡市利眾町3